
IS ~ インフィニットストラトス ~ 黒騎士は織斑一夏

AST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニットストラトス〉黒騎士は織斑一夏

【Nコード】

N7189X

【作者名】

A S T

【あらすじ】

変態腐れニート神との決戦で彗星に押し流されたマキナは、偶然にも円環から弾き出されてしまう
気が付けば、彼は織斑一夏として未知の世界に生まれていた。
この小説は一夏がマキナだったらカッコ良くな？という妄想から生まれた駄文ですので期待しないでください

第一話（前書き）

とうとう書いてしまった連載小説
どこまでいけるか分かりませんが
不安だらけのこの作品にお付き合いいただけるのでしたらお願いします。

第一話

ギロチンの刃に自分の首を飛ばされ敗北しながらも、やっと自分の名を思い出せた事

自分を創り出した腐れニート神との決戦で流星に押し流された自分の体が何処かへと墜ちてゆく浮遊感

ずっと墜ち続けた自分が新しく生まれ落ちた瞬間の光

「この子の名前は

」

第一話

織斑一夏は前世の記憶というものがある。

否、気づいたら新しく生まれ変わっていたという表現が正しいだろう
前世の彼であったのなら即座に死を望み、座に存在する変態ニート
神を呪っていただろう

だが、この身は前の様に死んだ身の姿では無く

織斑一夏という人間の肉体であり前世の姿では無い
かつてマキナと呼ばれ、本当の名をミハエルと呼ばれた彼の前世は
やっと死ぬ事が出来たと言う事だ。

ならば自分は織斑一夏としての人生を生きてゆこうと決意した。

まあ、ここまででは良かった。

軍事転用された宇宙用マルチフォーム・スーツ、インフィニット・
ストラトス、通称IS

篠ノ之束によって開発され、女性しか起動できないと言う欠点の為に女尊男卑の社会を生み出した。

現在はスポーツとしての形で落ち着いている。

そして国連によって造られたISの操縦者を育成する学園、IS学園
「何故、俺はここに居る・・・？」

そう呟き、周囲を見回す。

かつて小学生のころに分かれ、和風美人となった幼馴染に目をやる
と目を逸らされた。

本来、男である筈の一夏がここに居るのは、受験会場を間違え、偶然ISに触れたら起動してしまったからだ。

クラスメイトは全員女子、この状況を悪友の五反田弾に言ったら
それ何てギャルゲー？と心底羨ましそうな視線を浴びせながら言ったのを覚えている。

その時は「そうか・・・」と素っ気無く返したただだったが、
この気まずさと居心地の悪さの中で新しい人生の青春時代を過ごす
のかと考えると

今なら言える。

今すぐ代わってくれ！と

「————— くん、織斑一夏くん」

「む・・・？」

気が付けばクラスの副担任である山田真耶が自分の名前を呼んでいた。

「あ、あの、大声出しちゃって、ごめんなさい。あの、お、怒ってる？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！で、でも自己紹介、『あ』から始まって今『お』なの・・・

だから、織斑君の番なんだよね、だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？」

ダメ？と涙目になっている山田先生を落ち着けてから自己紹介をする事にした。

「・・・落ち着け」

「は、はい！」

ぶっきらぼうな一言の筈なのに

何故か年上の男性に優しく言われた様に感じた山田真耶は頬を紅く染めながら答えた。

自己紹介をするべく一夏は席から立ち上がった。

「織斑一夏だ。・・・よろしく頼む」

彼の自己紹介終了

「えっと・・・以上ですか・・・？」

「これ以上、言葉で語る意味は無い」

キーン！！

多分、クラス中にそういう擬音が聞こえた気がする。

これが普通の男子なら単なる格好付けだと思われるだろう

しかし、一夏の多くを語らない寡黙な大人の男を感じさせる所

所謂ハードボイルドな男の雰囲気は漂っていた。

クラスの女子たちは自分達と同年代である筈なのに、

はるかに一回りも二回りも年上の大人であるかのように感じさせる

一夏にときめきを覚えた。(個人差はあるが)

「お前がそういう性格なのは分かっていたが、自己紹介としてそれはどうなんだ？」

その言葉と共に教室に入ってきたのは、

一夏にとって唯一無二に家族にして、幼い自分を学生の身でありながらも必死に自分を養ってくれた大恩ある実の姉

世界一のIS操縦者と名高い織斑千冬であった。

彼女の頬がやや赤く染まっているのはどうしてだろうか？

「すまないな、山田君。挨拶を押し付けてしまって・・・」

「いえ、これ位の事は・・・」

取り敢えず座る一夏

「全く・・・お前はもう少しマトモな自己紹介は出来ないのか？」

「・・・姉さん」

スパアン！と出席簿で頭を叩かれた。

「ここでは織斑先生と呼べ、いいな？」

「・・・分かりました。織斑先生」

その後、すぐにクラスのミーハーな女子達が騒ぎ出したりしたが、一夏は我関せずと言った様子で居たのだった。

第二話（前書き）

続きです。

素人の駄文を読んでもくださり、ありがとうございます。

第二話

授業が終わり少しの間の自由時間となった。

一夏はひたすらに腕を組んで目を閉じていた。

彼の周囲にいる女子達は話しかけたい様だが、良くある誰が話しかけるかで言い合っていた。

すると彼女達とは別の女子が一夏に話しかけた。

「ちよつといいか？」

閉じていた眼を開けて声の主の方を見る。

「・・・ああ」

短い返事を返し、席から立ち上がる。

「ここは人が多い、屋上で話そう」

教室の至る所から残念そうな声が聞こえたが、一夏は気にする事も無く彼女に連れられて行く

第二話

人気の無い一年校舎の屋上で一夏は久しぶりに再会した幼馴染と二人きりでした。

「久しぶりだな、篝。六年振りか」

「ああ、お前も相変わらず無口なままだな」

「・・・饒舌な方が良かったか？」

「いや、それはそれで何か気持ち悪い」

「・・・随分な言い様だな」

少しムツとした感情が声にも伝わる。

どうやら一夏の感情は顔で無く、声に出るらしい

「・・・まあ良い、教室で一目見てお前だと分かった。」

「そ、そうか？」

「髪型、眼、雰囲気・・・こんな所か」

箒は顔を照れくさそうに自分の髪の毛を弄っている。

一夏は彼女との記憶を思い返していた。

自分の拳は強すぎた。

だから彼女の実家である神社の道場で剣道を学び始めた。

そこで共に剣を学び高めあった幼馴染

姉妹揃って人付き合いが苦手で両親が悩んでいた事も思い出せる。

最初の頃はお互いに交わす言葉は少なく、素っ気ない会話ばかりだった。

まともな会話をする様になったのは彼女が男女と馬鹿にされ、イジメを受けていたのを助けた時からか

馬鹿にされている彼女を抱き寄せ、ただ相手に向かって一言

「黙れ」

それだけで彼女にイジメをする者はいなくなった。

子供なら気絶する寸前の殺気をぶつけたのだから当たり前である。

ちなみに一夏は気づいていないが、この時の箒の一夏を見る眼は王子様を見る眼だったらしい

それから一夏は箒を抱き寄せて胸の中でひとしきり泣かせた後に元気づける為に彼女の額にキスをした。

これは精神が子供の扱いに慣れていない独り身のオッサンである一夏が、胸で泣いている箒をどう元気づけようか必死に考えていると

唐突に前世で唯一の子持ち（親父として色々ダメな美丈夫は除外）で子育て経験のある同僚ならどうするかと思いついた結果である。

効果は抜群だった。むしろ抜群すぎた。

何故なら、その直後に同僚だった白騎士の如く神速の速さで走り出したのだから

その時の感想は

「・・・どうやら元気になった様だな。感謝するぞ、バビロン」

何処かで困った様に苦笑しながら“やっぱり兄弟かしらね？”と自分が育てた曾孫に言うFカップの巨乳美女が居たとか何とか・・・そろそろチャイムが鳴る頃だろうと思った一夏は過去の思い出から帰還して箒に言った。

「話したい事はまだ有るだろうが、そろそろ鐘が鳴る頃だ、戻るぞ。」

「

「そう・・・だな」

少し残念そうな表情になる箒を見て一夏はやれやれと言った様子で溜息を吐くと

「・・・箒」

彼女に急接近し

「なッ、ななな何だ？」

箒の頬が赤く染まるのにも構わずに

「綺麗になつたな」

そう言つて昔の様に額にキスをした。

「~~~~~!!!!!!」

「??????」

箒は顔がものすごい勢いで真っ赤に染まり、ぶしゅゅゅと蒸気を出し

まるで蒸気機関車の如く、猛スピードで教室にすっ飛んで行った。

「・・・熱でもあつたのか？」

当の本人だけが何も分かつていなかった。

“やっぱ、罪造りな男だよね。あのマキナがあんな事するなんて思わなかつたけど、流石は藤井君のお兄さんって思えるよね？”

と、また何処かで、好意を抱く自分の後輩を弄るクォーターの少女が居たとか何とか・・・

その後、授業に無事、間に合った二人であったが、篝の方は顔を真っ赤にしながらもどこかニヤけており

千冬は、またコイツかと言いたげな表情で一夏を見ていたのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

当の本人はやっぱり気づいて無かった。

第二話（後書き）

なんかマキナがキャラ崩壊を起こしている気がしなくも無い
リザさんと玲愛先輩は完全な傍観者の場所にいます。

直接、話に関わることはありません。
多分ね

第三話（前書き）

今回、マキナー夏を喋らせ過ぎた。

キャラが崩壊している様な気もつとしてきたぞ？

・・・やっべえ、お気に入り登録している人が意外と多いぞ
プレッシャーは無い（キリッ）と言いたいけど・・・

・・・うん、やっぱり無理

第三話

「~~~~であるからしてISの基本的な運用は~~~~」

一夏が箒と教室に戻ってきてから、現在二限目の授業を受けている。相変わらず一夏は無表情で教科書を見ていた。

箒の方はぶしゅくと顔を真っ赤にしながらも何とか授業を受けている。

流石にその様子を不審に思ったのか

「えつと・・篠ノ之さん？」

「は、はいッ!？」

「随分と熱っぽそうに見えますけど大丈夫ですか？」

「も、ももも、勿論です!大丈夫です!」

物凄い動揺しながらも答える箒

その様子にクラスメイト達の乙女センサーは教室に戻ってきた様子やそれからのニヤケ顔と蒸気噴射から、休み時間に絶対何かあった!と確信するのだった。

「ちょっとよろしくて?」

「・・・む?」

二限目の休み時間、今度は金髪縦ロールのお嬢様が一夏に話しかけた。

「なんですの!そのお返事。私に話しかけられるのも光栄なのですから

それ、相応の態度と言う物があるのでは無いかしら?」

それを聞いた一夏は即座に脳内情報を検索、該当する人物を探し当てる。

「英国の代表候補生か・・・」

「その通りですわ。名前まで覚えていらっしやらないのは、如何なのかしら?」

「覚えていない訳では無い。セシリア・オルコット」

ジロリとセシリアを見ると、ぶつきらぼうに言う

「何の用だ?」

「まあ!何て物言いでしょう!?本来、私の様な選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡なのですわよ?その辺りをお分かり頂けるかしら?」

「そうか・・・幸運だ。」

「馬鹿にしているのですか!?!」

喰ってかかるセシリアと我興味無しと言った様子の一夏

まるで構って欲しい犬が吠えてくるのを適当に相手する飼い主にも見えなくない

「ふ、ふん!まあ、よろしいですわ。何か分からない事が有ったら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ!

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!」

ある程度落ち着いたセシリアが偉そうに言うが

「俺も倒した。」

「・・・・・・は?」「」「」

セシリアだけで無く、会話を遠巻きに見ていたクラスメイト達まで

呆けた声を上げた。

「わ、私だけと聞きましたか!？」

「女子では、な」

「で、では、私だけでなく貴方も倒したと言うのですか!」

「ああ」

「どうやって!？」

ガアツと再び食って掛かるセシリア

教官を倒したと言う事に興味深そうに眼をキラキラ輝かせているクラスメイト達

彼女らに説明するように一夏は語る。

「突撃したら、向こうの方も突撃してきた。」

「それで?」

「懐に入った。」

「そして近接武器を使って倒したと?」

「頭掴んで地面に叩きつけた。」

「……………ひどっ!!!」「……………」

実際、相手になった真耶は凄まじい速度で地面に叩きつけられた衝撃で気絶

そのまま追撃してもう一方の拳を叩き込もうとしたら

ブザーが鳴って試験が終了した。

まさか高空から地面に顔面を叩きつけられるなんて経験したのは彼女が初めてだろう

意識を取り戻した真耶はその時の記憶が飛んでいたらしい

おそらく精神の安定を図るために脳が記憶から消去したのだろう

その後、千冬に“お前は教官を潰す気か!”と怒鳴られた。すると、チャイムが鳴りだした。

「ッ!…っ、続きはまた後ですわ!」

セシリアは捨て台詞を吐くと自分の席に戻ってゆく

三限目の授業を終え、今は四限目の授業だ。

「これから再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。クラス代表者とは、そのままの意味だ。対抗戦だけで無く、生徒会の会議や委員会にも出席する。まあ、クラス長の様なものだ。クラス対抗戦とは入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差は無いが競争は向上心を生む。一度決まれば余程のことが無い限りは一年間変更は無い。その点を踏まえておけ」

教壇に立った千冬が全員に言い放つ

いつも通りの一夏は興味が無いとばかりに腕を組んで千冬を見ている。

「はいっ！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！！」

クラスメイトが次々と一夏を推薦する。

「では、候補者は織斑一夏・他にはいないか？自他推薦は問わないぞ？」

それに反論する声が上がった。

「待って下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言うのですか！？」

更にセシリアは捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！！大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛でしか——「下らん」何ですって？」

一夏の言葉の端々には怒りの感情が感じられた。

「下らんと言った。クラス代表になるのであれば、国家の代表候補生ならば

他国を国を侮辱する言動は慎め、英国には礼儀と言う物が無いのか

？」

普段寡黙な一夏がここまで喋るのは結構怒っていると云う事だ。

「なっ、私の祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのは貴様だ。英国人^{ライミー}」

イギリス人への侮辱の言葉を言われたセシリアは

「決闘ですわ!！」

「良いだろう」

前世で黒騎士と呼ばれた男に挑戦状を叩き付けた。

「もし私が勝ったら小間使い!いいえ、奴隷にして差し上げますわ

!！」

「俺が勝った場合はどうするつもりだ？」

「そんな事、万が一にもあり得ませんわ!

もし貴方が勝ったら奴隷でも何でもなって差し上げますわ!！」

まあ、そんな事あり得ませんが!と云うセシリアに一夏は問う

「手加減はどうする?」

「あら、早速お願いかしら?」

「違う、俺の手加減だ。」

するとクラス的女子が一斉に笑い出す。

「織斑君、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのって大分昔の話だよ?」

口々に言うクラスメイトが言うが、下らなさそうに一夏は語る。

「それは女がISを使えるからだ。女が男に対しての絶対的優位性を持つISを

男の俺が使える。それがどういう意味か分かるか?」

その言葉にクラス中が押し黙る。

「それにIS以外の肉体的要素は男の方が上だ。学力は本人次第で如何にでもなる。」

つまり、と一夏は続ける。

「ISが使える事以外で男女に差は無い」

俗物共の政策で女尊男卑の社会が作られただけだ。

と見事に政治家を敵に回す発言を一夏はした。

「話が逸れたな・・・尤も、俺と貴様に経験による差があるのは否めん。」

だが、決闘に手加減を加えるのも誇りに反するか・・・」

一夏はそう言ってセシリアを見据える。

「良いでしょう！私の誇りに掛けて貴方を全力で倒して差し上げますわ」

その言葉に一夏は僅かにニヤリと笑った。

それに気づいたのは筈と千冬の二人だけであったが・・・

「さて、話は纏まったな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う」

織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように」

千冬がそう言って纏めると、授業が始まったのだった。

第三話（後書き）

さっさと原作買って読まない和不味いな・・
金使いたくないから中古で買おうと思うけどあるかな？
大学生なのにバイトが出来ないのはキツイ
感想をくれるともっと嬉しいです。

第四話（前書き）

感想をくれた皆様、お気に入り登録をしてくれた皆様
本当にありがとうございます。

皆様方の応援や感想を見ると、本当にこの作品を投稿して良かった
と思えます。

これからも、よろしくお願いします。

さて、今回の話は、ネタ有り、エロ有り、笑い有り、青春有り、と
様々な劇が繰り広げられます。

ゆえに面白くなると思うよ

では読者の方々、彼ら彼女らの織りなす劇をご覧ください（ニート風）

第四話

押し倒した彼女の糸纏わぬ裸体が一夏の眼に映る。

上気した彼女の頬

シャープな輪郭の顔

凜とした意志を感じさせる眼

ベッドの上に広がる濡れた黒髪

豊かな胸

ほっそりと引き締まった体のライン

くびれのある腰

しなやかに引き締まった脚

それらが集まり一つの芸術品であるかの様な美しさを醸し出している。

そして目の前の彼女は初夜を迎える生娘の様に

「一夏……」

その瞬間を待つように目を閉じる。

第四話

話は放課後に戻る。

本日の授業も終わり、授業の復習の為に教室に残っていた所へ真耶がやって来た。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。良かったです。」

「何か？」

「えっと、織斑君が生活する寮の部屋が決まりました。」

「……自宅通い」

少なくとも一週間は自宅通いと言う事を一夏は聞かされていた。すると真耶はこっそりと耳打ちしてきた。

「そんなんですけど、事情が事情なんで一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したみたいなんです。・・・その辺りの事は政府から聞いてます?」

一夏は首を横に振った。しかし一夏は事情を理解した。

本来なら女性にしか動かさないはずのISを動かした唯一の男性操縦者

その価値は計り知れないものだ。

入学式になる日まで自宅の前にはマスコミがたくさん集まって来ていたし

解剖させてくれ、体を調べさせてくれ、等と言ってきたマッドまで居た。

仕方なしに取材を受けた時の受け答え

「世界初の男性IS操縦者になった気持ちは?」

「どうでも良い」

「やはりあのブリュンヒルデの弟と言った所ですね」

「下らん、俺は姉の付属物では無い」

「何か一言を!」

「特にない」

「研究させてくれ！」

「貴様が永遠に呼吸しないで生きていたらな」

と最後に変なのが混じっていたが、いつもの調子で受け答えしていた。

「と言う訳でして、政府の特命もあつて織斑君を寮に入れる事を優先したらしいです。」

「一月もあれば個室を用意できるので、それまでは相部屋で我慢してください」

ふむ・・と一夏は顎に手をやってから気づいた。

「荷物は？」

「それなら私が手配した。ありがたく思え」

「姉・・織斑先生が？」

荷物などは一週間後から運ばれてくる様になっていたが

どうやら千冬が手を回してくれたらしい

「相変わらず、何も無い部屋だったかな・・」

その言葉に真耶が驚いたように千冬に尋ねる。

「えっ、織斑君って私物が少ないんですか？」

「ああ、昔からこいつは必要最低限の物しか持たん。」

「じゃあ、趣味とかは・・・」

「強いてあげるとしたら、料理や家事か？」

「それって一般の男子から離れているんじゃない・・・」

「家事が出来ない姉を持つところな、ぶっ!!!?」

最後まで言い切る前に千冬のチョップが一夏の脳天に直撃していた。

「人の個人情報を漏らすな」

「・・・弟の個人情報は良いのか？」

「お前は私のモノだ。拒否権は無い」

誤解を生みそうな発言である。

現に真耶は顔を真っ赤に染めて、イヤンイヤンと体をくねらせている。

「・・・・・・・・不条理だ。」

「弟は姉に逆らってはいけないと決まっている。」

常識だろうか？と千冬は言い放った。

姉が白と言えば何色であるつとも白、黒と言えば何色でも黒

それが織斑家の不文律であり、絶対の法則

姉と言う座から流れ出た法則である。

『流出：絶対に君臨せし姉』である。

「とにかく四の五の言っても何も変わらん。生活必需品だけで充分だろう?」

「俺のレシピは・・・?」

その言葉に衝撃を受けたかのように固まる千冬

「くっ、不覚!この私がまさか一夏のレシピを忘れるとは・・・」

そのレシピには今まで一夏が培ってきた料理だけで無く、

マッサージ等の技術やテクニックまで書き記してある。

正に一夏の技術が詰まった秘蔵の書である。

別名、シスコン白書

全てが千冬の為に習得した技能であるのだが・・・

彼女に養われていた一夏はせめて自分が出る全ての事をしよう

彼女の為に出来る事を死にもの狂いで習得していったのだ。

その話は置いておいて

一夏は真耶から渡されたメモ用紙に書いてある番号の部屋1025室へと向かっていた。

部屋に入ると、そこら辺のホテルとは比べ物にならない程の設備だった。

取り敢えず自分の荷物が入ったダンボールを確認した直後

「ああ、同室の者が。こんな格好ですまないな。私は篠ノ之ほう・・・き・・・」

シャワー室からバスタオル一枚の姿で出てきた筈の姿が・・・

「「「「「「「「」」」」」」」」

バスタオルを体に巻いているのではなく、体に押さえつけている状態の為

結構、きわどい所まで見えていた。

まず目に付くのは、バスタオルで隠しきれない程の豊かな胸の膨らみ

幼少の時に見た幼女の裸では無く

成熟した体つきとアジア系の未熟な顔つきという

アンバランスであるが故の魅力があった。

随分と女らしくなった成長したものだな・

と、約2秒でここまでの評価をした一夏を凄いと言っべきか

箒は、そんな一夏を見ながら肩を震わせている。

「・・・寒いのか？」

「ぎゃあああああああああッ！！！！」

悲鳴を上げると同時に、箒は部屋に置いてあった竹刀を取り

一夏に向けて振り下ろす。

躲す素振りさえ見せなかった一夏は、そのまま脳天に一撃を受けて倒れるかに思えた。

が、ここに居る一夏はただの一夏では無い

バシィ！と右手で竹刀を掴んで受け止めると、

勢い良く自分の方へ竹刀を引き寄せる。

同時に竹刀を握っていた箒もそのまま引き寄せられ一夏の胸にダイブする。

その勢いそのまま箒を抱き寄せ半回転して、彼女をベッドに押し倒す。

両腕を押さえつけ抵抗できないようにする。

「落ち着け」

そう言っただけ彼女の姿を改めて見る。

バサツと幾分か水分を吸って重くなったバスタオルが落ちた音が響く

そして冒頭に戻る。

「一夏・・・」

何かを待つ様に目を瞑る箒を見て

流石の一夏も何をすればいいか分かっていた。

「箒・・・」

チュツという音が彼のキスした所から聞こえた。

彼女の頬から……

「ふえっ？」

箒は自分が予想していた場所とは違う所にキスをされて

驚いた様にも、残念そうな様にも聞こえる声を上げたのだった。

「落ち着いたか？」

一夏は彼女の顔を覗き込みながら聞いた。

「あ、あう……」

プス・・プス・・プシューと先刻と同じ様に顔が真っ赤に染まり
蒸気を噴き上げる箒

一夏は顔が近いから話しづらいのだろうと思い、顔を離れた。

成熟した箒の体を改めて見ると大人顔負けのプロポーションである
事が分かる。

箒の全裸、二つの母性の頂点とか下腹部の成長具合と言った

本来隠されているべき場所までしっかりと見ていた。

まあ最近では色々と解禁されているから、直接的な描写が無ければ
問題無いだろう。

と、一夏がメタな事を考えた瞬間、部屋のドアが開かれ

「なんか凄い悲鳴が聞こえたけど、大丈夫!？」

「何、どうしたの!？」

「何があったの!？」

篝の悲鳴を聞きつけた女子生徒達が突入してきた。

「……………あ……………」

その場にいた全員の声が重なる。

今の一夏と篝の状況を見て、第三者はどう思うか？

制服姿で全裸の女子を押し倒し、抵抗できない様に腕を抑えている
男子

状況証拠的に言い逃れは出来ない状況である。

このままでは一夏が性犯罪者となってしまう!!

と、約0.2秒で判断した篝は無我夢中で口を動かしていた。

「ち、違うんだ!これは……私と一夏の訓練だ!！」

その発言がどれほどの誤解を生み出すのかも知らずに……

一夏と篝の親密さは休み時間の様子から、

即座に学園中とはいかないが同学年の生徒たちの間では広まっていた。

そして明らかに性犯罪としか見えない状況で言い訳しているのが男では無く、女の方

それらを加えて彼女たちが下した判断とは

「「「「「「し、失礼しました！！どうぞごゆっくり~~~~~」」」」」」

「だから、誤解だアアアアアアツ！！！」

無慈悲にもドアがボタンと閉められた。

“これで明日には、一夏と自分はこういう仲だと学園中に広まってしまうのだな・・・”

そこまで考えた篝は「おや？」と考える。

“あれ？むしろ、これで私と一夏は公認の仲になったのでは？”

と、乙女的思考回路が神速の如き速度で答えを導き出した。

“し、しかし、なし崩し的に一夏とそっいう仲になるのは如何か？”

と、今度は篝の良心が咎める。

女神で天然で巨乳の金髪碧眼フランス娘に終了させられたのだっ
た。

決して、

育てられた環境のせいで世渡りが上手く

高い人気を誇る尽くしてくれる系の男装美少女では無い

部屋の外に出た一夏は箒が着替えるのを待っていた。

少し時間が経ってからドアの向こうから箒の声が聞こえた。

「入れ・・・」

ドアを開けて、部屋に入ると剣道着を来た箒が立っていた。

その顔はかなり真っ赤に染まっており、体が震えている事から
相当な羞恥心に身を焼かれているのだろう

まあ、意中の男に風呂あがりの姿どころか

フルヌードを見られてしまったのだから、無理も無いだろう。

こうして顔を合わせるだけでも、必死で耐えている事が分かる。

対して、一夏は表情を変える事も無く

「すまなかつたな、箒」

深々と頭を下げるのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・沈黙が二人の間を支配する。

未だに頭を下げたままの一夏、何を話せばいいのか迷っている箒

二人の間で時間だけが過ぎ去ってゆく

「とりあえず、頭を上げる・・・」

箒がそう言うと一夏は頭を上げ箒を見る。

彼女は顔を紅く染めたままだった。

「さっきの事は水に流そう、それの方がお互いの為だ・・・」

「そうだな・・・」

このままでは何時まで経っても、お互いにギクシャクしたままだ。

ならば水に流してしまった方が良く、と箒は考えたのだった。

かなり惜しい事をしたとは思うが、

これからの生活で一夏との仲がギクシャクして話し辛くなるよりはマシだ。

それに同室で一緒に過ごすならば、まだまだチャンスはある。

“モッピー知ってるよ、一夏はこんな18禁ハプニングでは揺らない男だったこと。”

箒の脳内に座す軍師モッピーは己の知識を総動員して

状況を判断し、箒にとっての最善の決断を導き出したのだ。

（感謝するぞ、モッピー！）

形容し難い笑みを浮かべるデフォルメキャラに礼を言う箒

“箒にとって最善の未来を導くのがモッピーの役目だって知ってるよ”

そんな声を残してモッピーは己の内に帰って行くのだった・

二人はとりあえずベッドに腰掛ける。

「お前が私の同居人なんだな・・・」

「嫌か？」

何て事も無いように聞いてくる一夏に箒は

「別に嫌と言う訳では無いんだ・・・しかし“男女七歳にして同衾せず”と言っただろう?」

軍師モツピーの助言で幾分か素直になっただけらしい

「ああ・・・俺もそう思う」

だが、と一夏は続ける。

「国からの要請だ。仕方無い」

やはり一夏は大人だった。

「それに幼馴染であるお前と一緒にの方が落ち着く」

「そ、そうか、私と一緒にの方が落ち着くのか・・・嬉しいものだな」

そう呟いた筈の笑みはとても優しげで、綺麗だった。

「何故だ?」

「昔から一夏には助けられてばかりだった・・・だからお前に頼られるのは嬉しい」

「そうか・・・」

何時しか二人の間には春の陽だまりの様に優しい空気が流れていた。

と、ここまでならいい話で終わったのだろうか……

ふと、視線を感じた一夏がドアの方を見ると

じ~~~~~と、ドアの隙間から見ている乙女達が居た。

自分の部屋に戻っていたかと思いきや、最初から見えていたらしい

ニヤニヤと二人の甘酸っぱい青春劇をゆっくり鑑賞していたらしい

主に同じ乙女である筈の方ばかりだが……

この劇の主役は一夏では無く彼女の方だったらしい

「……鍵をかけ忘れたな」

「きゆう」

流石に羞恥心の限界を突破したらしい筈は

珍しく可愛らしい声を上げて意識を手放したのだった。

「篠ノ之さんも乙女よねえ……」

「うんうん」「うんうん」

三年生の先輩の一人の言葉にみんなが同意した。

“ やれやれ、だな…… ”

一夏は仕方ないとばかりに筈をベッドに寝かせると彼女の頭を慈しむ様に撫でる。

“ 少しは成長したと思ったが、まだ未熟な子供だな…… ”

まるで彼女の兄か父親の様な事を思いながら、彼は来客者の相手をするのだった。

どうやら神は意外と恐怖劇以外の演出もするらしい

第四話（後書き）

はい、どうでしたか？

今回は前回の三倍以上の文字量です！

気づいたらこうなっていたんだ。

一回これ、自動的にやり直しになったから

はっちゃけた文は無しにします。

勝手にユーザートップに戻った時の脱力状態で今、必死に書いてます。

さて次回は、決闘までの日々を短い話で書くか、抜かして決闘を書くか、悩んでいます。

後、詠唱にゲーデやアーサー・ハーバートの詩をそのまま使おうと考えてますが

著作権とか、大丈夫ですよ？一応、コピーしたサイトには違反していたら削除しておきますって書いてあったから・

ただ、セシリアとの対決はある意味、期待を裏切るかもしれませんがと言っ
て置きましょう、だって、大学の講義中に思いついたんだもの
セシリアとの決闘は当初予定を変更します。とだけ言って置きます。
まあ、変わるかもしれないですけどね。

第五話（前書き）

はい、今回は戦闘です。
初戦から創造とかが出ます。

それではどうぞー！

第五話

セシリアとの決闘の当日、放課後の第三アリーナAピットには一夏と箒が二人きりでいた。

観客席にはクラスメイト達が、管制室には千冬と真耶が居た。

セシリアは先にISを展開して、一夏を待ちかまえている。

一夏は箒と共に自分の専用機が届くのを待っていた。

第五話

「来ないな・・・」

「ああ・・・」

するとスピーカーから真耶の声が聞こえてきた。

『織斑君、来ました！織斑君の専用IS』

『織斑、すぐに準備をしる。アリーナの使用時間にも限られているからな、初期化と最適化は実戦でやれ、お前にとって、この位は問題ないだろう？』

ハッチが開き、視界に入ってきたのは“白”だった・

「これが一夏の専用機・・・」

『織斑君の専用IS“白式”です。』

純白の機体に触れ、精神を集中する。

“ニグレド黒騎士の俺が、アルペド白騎士を使う事になるとは・・・これも何かの縁か”

そう思って、彼は“白式”を装着し一体化する。

“しつくり来るな・・・”

やはり前世での経験がISとの同化に役立った様だ。違和感が無い

『織斑、気分はどうだ？行けるか？』

「大丈夫だ。行けるさ」

その言葉に千冬は“そうか”とだけ返した。

「一夏・・・」

筈が不安げにこちらを見るが、一夏はカタパルトの方を向く

「行ってくる・・・」

「ああ・・・勝つて来い」

フツ、と笑うとカタパルトから発進する。

「織斑一夏・・・出る。」

黒き騎士は新たな力を得て、再び戦場に羽ばたいた。

嘗て黒騎士と呼ばれし男は、新たな世界で白き装甲を纏い、ここに蘇った。

アリーナ上空まで上昇し、待ち構えていたセシリアを見る。

「あら、やっと来ましたのね。待ちくたびれて仕舞いましたわ」

「それはすまない、ISの搬入が遅れた。」

だが、と一夏は続ける。

「この戦いは退屈させん」

「あら、たいそうな自信ですわね。」

互いに相手を見据えて、集中する。

『これより、クラス代表決定戦、織斑一夏 対 セシリア・オルコットの対戦の始めます。』

真耶の号令と共にセシリアが先手を取った。

彼女の持つスターライトMk ？から放たれたレーザーが一夏へと向かう

「・・・遅いな」

それを身を振り、紙一重で躲す一夏

「さあ、踊りなさい！！この私とブルー・ティアーズの奏でる円舞^{フル}曲を！！」

続けてレーザーが襲い掛かってくるが、全てを紙一重で躲し続ける。

「遅い、遅すぎるな・・・」

彼にとってレーザーの速度は、光速であるのにも拘らず慣れてしまっている。

前世に於いて約五十年間もの間、マキナは魔城で二人の騎士と訓練をしてきた。

その片割れである白騎士の称号を持つ少年：ウォルフガング・シュライバー

彼の能力は絶対先制加速、これによる速度の上限は無い

故に彼は光速の相手であっても、その上に行く神速の速さとなる。

そんな超加速能力を相手にしていれば、嫌でも速さに慣れる。

まあ相性上、彼は一度も攻撃を当てる事は出来なかった訳だが・・・

馬鹿げた速度に慣れてしまっているが故に、高速対応が可能な反射神経なのである。

体は一夏であるが、最近になって音速までなら完全に対応できるようになった。

流石にレーザーの光速には対応できないが・

“ まだまだ、射撃も未熟だな ”

中身が歴戦の戦士である一夏は、彼女の射撃をそう評した。

「 棒立ちでは、相手の射撃兵器の的だぞ? 」

悠々绰绰と一夏は彼女の欠点を述べながら、高速移動で彼女の横へと回り込む

そして近接用ブレードで切りかかる。

「 くっ!!!? 」

間一髪の所で回避したセシリアは一夏から一旦距離を離す。

まさか、接近を許してしまうとは思ってもいなかったセシリアは本気で一夏を倒そうとする。

「 貴方が初めてですわ。ここまで私の攻撃を避けたのは。 」

その貴方に敬意を表して全力で行かせて頂きますわ! 」

ブルーティアーズの肩の装甲から、四機のビットが射出される。

「む……」

それぞれが別々の方向から一夏に向かってレーザーを放ち始めた。

それすらも躲してゆくが、

その内の一撃は躲しきれ無いと判断したの一夏は右手のブレードで叩き切った。

「なッ!？」

まさかレーザーを叩き斬るなんて非常識な真似をするとは思っていなかったセシリアが驚きの表情で一夏を見た。

「まだ、戦いは始まったばかりだ……全てを見せてみるがいい」

まるで、彼女を試しているかのように言い放つ一夏

その眼は、まだこの程度ではないだろうか?と語っている。

「いいでしょう、この私、セシリア・オルコットの全てを貴方に見せてあげますわ!」

セシリアは己の全てを一夏へ見せつける為に戦う

“未熟だ。……ならば、この戦いを教訓に出来るものへと変えて

やるっ”

一夏は先生的な事を思いながら、彼女の円舞曲ワルツに付き合っただった・

モニターでそれを見ていた篤は一夏の行動に疑問を持っていた。

「何故、追撃しなかったんだ・・・？」

一夏がセシリアを切り付けた直後に、追撃していればダメージを与えられた筈だったのだ。

「多分、オルコットのワルツに付き合っつもりなんだろう・・・」

千冬が篤の質問に答える。

「どうしてですか？早く決めてしまえば良いと思わないんですか？」

真耶が不思議そうに聞いてくる。

「あいつは戦士だ。戦いの中でオルコットを教育するつもりなんだろう・・・」

「教育って・・・オルコットさんは代表候補生ですよ？」

「だが、実戦の経験も無く、戦場を知らない」

“私もだがな”と付け足して真耶の疑問に答える千冬

「では、織斑君には戦場の経験があるんですか!？」

「いや、無い筈だ・・・だが、あいつは明らかに戦場を、闘争を知っている。」

そう言った千冬表情はどこか悲しげであった。

試合開始から十分後・・・

セシリアは自分の胸の内の変化に戸惑っていた。

彼の戦士として眼に男を感じ、胸が熱くなるのはどうしてか？

自分を見守るような父親の様な眼に安らぎを感じるのはどうしてか？

“自分の胸の内を焼く、この感情は何だ？

数瞬の後、彼女はその答えに思い至る。

“ああ、そうですね・・・この感情が恋と云うものなのですね・・・”

己が内に芽生えた感情は、自覚した途端に更に激しさを増しながら

燃え上がる。

彼に自分の全てを見て欲しい・・・そして、その全てを受け止めて欲しい、と

この時、セシリア・オルコットのの中に生まれた想いは確かに渴望だった。

そこに水銀の手が加われば、永劫破壊の術式はここに完成する。

“さて、彼女が語るのは道を求める物か？道を覇する物か？”

彼女の口から語られるのは、己が渴望の具現化

一夏の眼が僅かに驚愕で見開かれる。

Love bade me welcome : yet my soul drew back ,

愛は私を喜んで招き入れてくださった、だが私の魂はしり込みしていた

Guilty of dust and sin .
塵と罪に汚れていたからだ

But quick - eyed Love , observing me grow slack

だが慧い眼をお持ちの愛は、私がぐずぐずしているのを見ておられた

From my first entrance in ,

私が初めて戸口に入った時から

Drew nearer to me, sweetly
questioning,

私に近付いて、やさしくおたずねになったのだ

If I lack'd anything.

客人が、私は答えた、ここにふさわしくないのです

A guest, I answer'd, worthy to
be here:

何か足りないものがあるのか?と

Love said, You shall be he.

愛はおっしゃった、お前がその客人になるがいいと

I the unkind, ungrateful? Ah, my
dear,

私のような薄情で恩知らずな者ですか?ああ、わが愛しきお方よ

I cannot look on thee.

私はあなたを見つめることもできません

Love took my hand, and smiling
did reply,

愛は私の手を取り、微笑んでお答えになった

Who made thee eyes but I?

私でない誰がその目を作ったというのだ?

Truth, Lord, but I have married
hem: let my shame

真実です、主よ、ですが私はそれを汚してしまいました、私の恥に

Go where it doth deserve .

しかるべき報いを受けさせてください

And know you not, says Love, who
bore the blame?

お前は知らないようだな、と愛はおっしゃった、誰がその責めを
負ったのかを？

My dear, then I will serve .

わが愛しきお方よ、それではお仕えしましょう

You must sit down, says Love, an
d taste my meat :

お座りなさい、愛はおっしゃった、そして我が肉を食べるのです

So I did sit and eat .

そこで私は座り、いただいたのだ

Cru

創造

Seren go laud ydd tei mlad syrth
io mewn cariad

星光降り注ぐ、恋慕心情

彼女を中心に異界が展開される。

しかし、世界が灼熱の世界に変わる事も無ければ、紅い月が照らす夜になる事も無い

だが、彼女の世界が生み出された事だけは確かであった。

「織斑さん……いえ、一夏さん……私の全てを受け止めて下さいな」

熱っぽい声で愛しい彼に告げた彼女は、同時に蒼き雫達を一斉に放った。

一夏はそれを油断せずに回避しようとする。が・・

「言った筈ですわ、全て受け止めてと……躲そうとするなんて酷いではありませんか」

彼女がそう言った直後、蒼き雫達から放たれたレーザーが拡散した。

まるで雨の雫の様に丸く小さな光の弾が、豪雨の如く彼に降り注ぐ！！

「——ッ！！！」

最大出力で急速上昇し、雫の弾幕から脱出するが

全てを躲しきれず、装甲が豪雨に降られシールドエネルギーを持って行かれる。

「くっ!」

一撃一撃の威力は大した事無いが、それが豪雨の如く降り注いでくるのだ。

完全に躲す事など、あの千冬ですら難しいだろう

だが弾幕を何とかやり過ごした一夏はそのまま彼女へ向かって行くが……

「……だから言った筈ですわ。全て受け止めて欲しいと!」

次の瞬間、背中に豪雨が降り注いだ。

「ぐっッ!?!?!」

突然の衝撃に落下してしまう一夏だが、すぐに体制を立て直す。

“そういう事か……”

一夏は理解した。

彼女の渴望は“自分の全てを受け止めて貰いたい”と言う霸道である。

つまり、当たるまで追い続ける大量の弾幕

レーザーが拡散して小さな雫の様になったのは、全て受け止めて欲しいものと言う事から

四つでは足りずに表現しきれないと言う事だ。

その眼は久しぶりの窮地に焦りと楽しみを感じている事で輝いていた。

“ つくづく、自分は戦う事に向いているらしいな……”

自分は戦いの運命に戦わずに生きてゆく事は出来ないらしい

次の瞬間、一夏を包み込むようにして、レーザーの弾幕が襲い掛かった。

その頃、管制室でも騒然としていた。

「レーザーが拡散した!？」

真耶が驚愕の声を上げる。千冬も驚いたような表情をしている。

更に一夏が飛び越して躲す。

するとレーザーの弾幕はとんでもない速度で曲がり、彼の背後から直撃する。

「一夏ッ!！」

篤が思わず声を上げた。

「馬鹿な・・・いくら偏向射撃が理論上可能とはいえ、あの曲がり方
はあり得ん・・・」

「で、では、あれは一体・・・!?」

篝の言葉に千冬も考える。

すると、クラスメイトの声が千冬の耳に入ってくる。

「セシリアさん、凄いね。」

「でも、あの詩って何だろう?」

そこで彼女は思い至る。

「まさか・・・あの詩を詠う事で発動する単一使用能力なのか・・・?」

「そんな!まだ二次移行でも無いのに単一使用能力の発現なんてあ
り得るんですか!?!」

真耶の言葉に、さあな、と千冬は返して続ける。

「ISはまだ謎が多い、あれが何であっても真実は分からない」

そして彼女はモニターに映る弟の姿を見る。

“ どうかやら、目はまだ死んでいない様だな・・・ ”

その表情は凜々しく、見る女、全てを引き寄せる魅力があった。

“自分ですら魅力を感じるのだから” と思い

ちらりと、他の連中に目を向けると・・

箒は頬を紅くして王子様を見る眼をしているし、隣にいる副担任も同じ様な目をしている。

“相変わらず罪作りな奴だ”

千冬はフラグ野郎の弟を見て溜息をつくのだった。

このままでは負けるだろうが、時間的にそろそろだろう

すると、彼を包み込むようにレーザーが全方位から襲い掛かった。

「一夏ッ！！！！」

箒が再び彼の名前を叫ぶ。

逃げる事も防ぐことも不可能な必中の攻撃に包まれた彼は墜ちるのか？

“それでは面白く無いだろう？”

英雄ヒーローとはどんな強敵にも決して負けず、最後に勝利を掴む。

それこそが英雄譚なのだから

織斑千冬はフツと笑って言った。

「機体に救われたな。馬鹿者め」

モニターには白では無く黒に染まりし、騎士の姿があった。

「一次移行！？・まさか、今まで初期設定で戦っていたのですか！？」

セシリアが驚いた様子で彼に聞いてくる。

どうあっても、自分は黒騎士である事是否定できない様だ。

そして、その手に展開された武器は姉が使っていた物と同じだ。

「俺は最高の姉を持った。

幼き俺を必死で養い、栄光よりも俺を選んでくれた最愛の姉だ。

あの時に、俺は彼女を支える事を誓った！！

だからこそ、お前を倒す！

見せてやる。この俺を！！！！」

黒き装甲を纏った彼は彼女を本気で倒すことにした。

「……………」

千冬は体を震わせながら涙を流していた。

「……千冬さん。どうぞ」

「……すまない」

箒からハンカチを受け取ると溢れてくる涙を拭く

「いい弟さんを持ちましたね」

「ああ、いつも泣き言ひとつ言わずに、グスツ……私を支えてくれた

……グスツ……弟だ……」

だが、彼女は更に涙を流すことになる。

一夏は詠う、嘗ての渴望とは違う渴望の二つ

E s i s t u n s e r e l i e b e , I c h l i e b e
d i c h , I c h w i l l d i c h u n t e r s t ? t
z e n

―我が愛しき者よ、私は貴方を愛し、貴方を支えたい

D u u n t e r s t ? t z t e s t m i c h l a n g e .

― 貴方は、私を長い間支えてくれた。

D u g a b s t m i r a l l e s , u m m i c h z u
u n t e r s t ? t z e n .

― 貴方は私を支える為に、全てを私に捧げてくれた。

I c h u n t e r s t ? t z e d i c h d i e s e s M a
l .

― 今度は私が貴方を支える番だ。

G i b d i e s e n K ? r p e r , a l l e s ,

― この身を全てを捧げて

W i d m e n w i r s i c h d i r .

― 貴方に尽くそう

― B r i a h

― 創造

I c h g e b e e i g e n e n W e g D i e W e l
t d e s B r u d e r s

― 我捧ぐ・姉弟世界

それは最愛の人の為に出来る事を全て行いたいと言う渴望から生まれし求道

その力は万能化、ありとあらゆる物全てを使いこなす事が出来る能力

「は、はははははは！！素晴らしい！素晴らしいですわ！！一夏さん！！」

初期設定で私を苦戦させただけで無く、

一次移行で単一ワンオフアビリティ使用能力を発現させるとは！

やはり、貴方は最高に素敵ですわ！！さあ、もっとこの円舞曲ワルツを楽しみましょう！！」

セシリアの表情は歓喜に満ちていた。

自分の惚れた男は、これ程までに強さを示し、屈する事無き誇り高さを見せている。

“ならば全力を以ってして、全てを受け止めて下さい！一夏さん！！”

また一夏も熱烈な視線に眼で答える。

“お前の全てを受け止めてやる”

蒼き雫達がセシリアの周囲に集う

セシリア自身もレーザーライフルを構える。

円舞曲の終曲を飾るに相応しい一撃

“さあ、受け止めて下さい！！これが私の全てです！！一夏さん！！”

放たれし全てのレーザーは拡散し、再び収束して一つの極光を生み出す。

それを受け止めるべく一夏も又、正面から突撃して躲す事などしなかった。

“単一使用能力：零落白夜、発動！！”

巨大な極光の奔流の中を一夏は剣で切り裂きながら突き進む

「……………ッおおおおオオオオオッ！！！！！！！！！！」

咆哮を上げながら、スラスターの全開出力で突き進む。

「セシリア・オルコットオ！！」

極光の先に待ち受ける彼女の姿を、その瞳に捉える。

そして極光を突き抜け、所どころが融解した剣を捨て、彼女へ一撃を放つ！！

「これが！織斑一夏だアアアッ！！！！！！！！」

彼の放った拳と、彼女が最後に放ったミサイル

そのどちらが早く到達したのかは、言う必要はないだろう・・・

「何が“これが！織斑一夏だ！！”だ。負けたじゃないか！！」

保健室で箒に看病してもらいながらベッドの上に寝ている一夏

「そうだな・・・」

最後の一撃を放った時、確かに一夏の拳は届いた。

だが最後に放ったセシリアのミサイルの爆風が一夏の拳の狙いを僅かに逸らし

本当にギリギリの差で負けたのだ。

0・1：0の差で・・・

やはりレーザー四発分の直撃を受けたのがいけなかったらしい

「悔しいな……」

「そうか……」

ああ、そうだ。と一夏は言う

「必死で力を求めた癖に、敗北した……それだけなら許せる。

だが、姉さんの同じ力を使っておきながら敗北した。

俺は姉さんにまた恥をかかせた……」

相当、悔しいのだろう。握られた拳の色が変色して白くなっている。

するとそこへ……

「何を言っているか馬鹿者」

「姉さん……」

千冬がやって来た。

「いつも、お前は自分を責める馬鹿者だ。」

「う……」

千冬に責められて、しょんぼりする一夏

だがな……と千冬は言う

「お前が必死で私の為に努力してきたことは知っている。」

「……………」

「だから少しは自分を許してやれ……」

そう言っつて千冬は一夏を抱きしめた。

「……………ありがとう」

「構わないさ、充分すぎる位お前は尽くしてくれた。その礼だと思え」

そのまま一夏は安心したのか、千冬の胸の中で眠ってしまった。

「千冬さん……」

「織斑先生だ……後は頼んだぞ？」

「はい……………」

一夏を箒に託した千冬は保健室から去って行ったのだった。

「一夏……………」

箒は安心したような表情で眠る一夏を撫でながら、思う。

“お前は何時まで経っても千冬さんの事しかないのだな……”

何時か、そこに自分も入って見せると誓った彼女は、

自分も強くならなければと思うのであった。

何処かにある研究室の一室に彼女はいた。

「あはははは！これは凄いね！まさか、これ程の事が出来るなんて！」

ISの開発者、篠ノ之束はディスプレイに映る光景に興奮していた。

「己の渴望を世界へ戦闘用に具現化して、現出させるなんてさ・・・」

非科学的にもほどがあるよね、と束はごちる。

「このセシリアって娘の渴望は、レーザーを拡散と収束まで自在にしているし、」

おまけに追尾性能まで付いちゃってるなんてチートもいいところだよ・・・」

すると、束の背後から影法師の様な男が現れた。

“如何かな？彼女等が演じた歌劇の程は・・・”

「私の予想以上だよ、胡散臭くて最初は信じられなかったけどね・

「

“ふむ、君がそう評するならば、私が手を加えただけの甲斐があったと言うものだよ”

ニヤリと影は語る。

「でも、この創造って言うのは、誰でも使えるんだよね？」

“然り、君が使いたいと言うのなら、君に与える事も出来るが？”

「ふうん・・・じゃあ、今度頼もつかない」

“では、自分の内に眠る渴望を理解する事だ。それまでは私も舞台裏にいるとしよう”

そう言い残すと影は消えて行った。

「そうだね・・・貴方が出てくるのは舞台の最終章・・・」

そしてその時こそ貴方の願いを叶える時」

“そうだよ、メルクリウス？”

束の、その言葉はどこか暗い闇の中へと消えてゆくのだった・・・

第五話（後書き）

セシリアの創造に使った詩はジョージ・ハーバートの詩

「愛は私を喜んで招き入れてくださった」です。

前回のあとがきで、名前間違えました。

一夏の創造はオリジナルの詩で翻訳サイトを使用しました。
能力はゼロの使い魔のガンダルーヴと同じです。

武器以外にも適応されるといのが違いですが・・・

そして、最後にまさかの二ト登場

ISコアに永劫破壊の術式を仕組んだのもコイツです。

束がISを開発した時期に登場して関わっています。

これからどうなってゆくのか？

それはこれからのお楽しみです。

ではこの辺で・・・

第六話（前書き）

はい、ASTです。ちょっとカプセルガンダムにハマッていました。
遅れてすみません

中国娘の出演は次回にしました。
では、第六話です。どうぞ

第六話

「と、いう訳で一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決まりました。・・・あ、”一”繋がりでいいですね」

試合の翌日、朝のホームルームで真耶がそう言った途端

教室中から歓声が沸き起こった。

第六話

「・・・何故だ？」

不思議そうに一夏が真耶に聞く

自分の記憶が正しければ決闘に勝った方が代表になるという事だった筈である。

「それはですね「それは私が辞退したからですわ!!」・・・うう」

答えようとしたら、その上から勢い良くセシリアが答えたので、涙目になる真耶

「勝負は確かに貴方の負けでしたが、私とほぼ引き分けの僅差に

持ち込んだのですから・・・」

セシリアは咳払いを一つしてから続ける。

「それで、私も大人気無かったと反省しましたので・・・」

彼女は一夏にっこり笑いかけると

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。

IS初心者であれ程の実力ですのでクラス代表になって実験経験を
積み重ねていけば、

国家代表も夢ではないと思いますの」

そこでセシリアは頬を少し赤く染めながら一夏を見て言う

「そ、それですわね・・・私のような優秀かつエレガント、華麗に
してパーフェクトな人間が操縦を教えれば、それはもうみるみる内
に成長を遂げて――」

「生憎だが一夏との訓練相手は私だ。」

そこで箒が立ち上がり、セシリアを睨んで牽制する。

どうやら乙女の勳が、彼女を明確なライバルだと認識したらしい

しかし彼女も怯む事無く、箒を余裕の目で見る。

「あら、誰かと思えばISランクCの篠ノ之さんでは無いですか。

ランクAの私に何か御用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！一夏の相手は私だ。一夏にどうしても頼まれたからな・・・」

実際は一夏がどうしようか・・・と考えていると彼女と一緒に訓練してやろうと半ば強引に誘った結果である。

一夏自身も訓練用ISが無いから、筭の誘いに付き合ったのだ。

それは良いとして、二人の頭からバシン！バシン！と打撃音が響き渡った。

出席簿を片手に現れた千冬が、頭を抑えて悶絶する二人に言う

「座れ、馬鹿共」

そして、彼女は言う

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしてみれば団栗の背比べだ。まだ殻も破れていない段階で優劣など付けようとするな。」

千冬
コイツみたいな規格外ランクの奴でもだ。と、一夏を指して言う

ちなみに一夏のランクは規格外のSSである。

これは千冬のSランクを超えて、計測不能レベルの適正值に暫定的につけたランクである。

つまり一夏は世界一の適正值を持っているのである。

「代表候補生でも一から勉強してもらおうと前に言っただろう。」

下らん揉め事は十代の思春期の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。自重しろ。」

厳しく表情を引き締めて言う千冬に一夏は

「流石だな・・・これで私生活もしっかりしていれば良いのだが・・・」

そんな事を考えていると、千冬がこちらを向いた。

「織斑、今何か無礼なことを考えただろうか？」

ギロリと睨んでくるが、一夏は平然としていた。

「・・・完璧な存在など、この世界に在りはしないと考えただけです。」

相変わらず、ぎこちない敬語だった。

「そうか・・・」

ズバン！！

「すみませんでした。」

「分かれば良い」

千冬はフン、と鼻を鳴らしてから宣言するよつに言う

「クラス代表は織斑一夏。依存は無いな？」

ここに一夏がクラス代表であるが決まったのだった・・・

その後、ISを装着する為に一組の生徒全員がISスーツを着てグラウンドに居た。

ISスーツは簡単に言えばスクール水着に似ている為、健康的な太腿とか見事に露出しており、男である一夏の視線を気にして恥ずかしがっている者も居たが・・・

当の一夏本人は腕を組んで立っているだけで、女の肌に興味は無いとばかりに無関心だった。

その様子に残念そうにしている一部のクラスメイトが居たのだった。

「それでは、ISの飛行訓練を開始する。織斑、オルコット、ISを展開しろ」

一夏は待機状態にある己のISに目をやる。それは黒きガントレットであり

その外見は『人世界・終焉変生』だった。

“本当に、これも何かの縁か……”

「何を呆けている？ 早く展開しろ」

ふと気づくとセシリアは既に展開している。

千冬に急かされた一夏は腰に腕を置いて肘を横に突き出す。それは押忍！の格好に近い

「—— Yetzirah」

次の瞬間には黒い装甲を纏った一夏がそこに居た。

「よし、飛べ」

その言葉と共に砲弾の如き速度で上空に飛び上がる一夏、それに続いてセシリアも優雅に飛んでいる。

ある程度の高さまで上昇すると一夏は宙返りして待機する。

「流石ですわ、一夏さん。」

何処か嬉しそうにセシリアが話しかけてくる。

「いや、それ程でもない……」

素っ気無く返したのだが、その会話を快く思わない者がいた。

「では、今度二人きりで一緒に訓練を」一夏、何時までそんなとこ

ろにいる！早く降りて来い！！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、地上に目をやると
箒が真耶からインカムを奪っていた。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地
表から十センチだ。」

千冬が箒に拳骨を振り下ろして言う

「了解しました。では一夏さん、お先に。」

そう言ってセシリアは一気に加速して急降下し、一気に減速して完
全停止をしてクリアした。

“ 流石は代表候補生と言った所か ”

そう思いつつ、一夏も急降下を開始する。

急速度で地上へと降下して行く、そして地表ギリギリで轟音と共に
止まる。

「・・・確かにクリアはしたが、その方法は止める」

千冬が言ったのは、地表寸前で一夏は一気に拳を突き出し拳圧で速
度を相殺したのだ。

普通の人間が出来る事ではない。一夏だから出来るのだ。

「まあ、良い・・・次は武装展開だ。」

千冬が一夏の前に立つ

「では、やってみる」

一夏は何も言わず、ただ無言で拳を前に突き出し雪片式型を展開する。

「これ位は問題無いか・次はオルコットだ。」

「はい」

セシリアは真横に左腕を肩の高さまで上げる。

「ふむ、流石は代表候補生と言った所か・ただしオルコット、そのポーズは止める

誰を撃つつもりなんだ？」

「で、ですが、これは私のイメージにまとめるのに必要な――」

「直せ、いいな」

「はい……」

流石のセシリアも千冬には逆らえず、ただ返事をするしかない様だった。

「次だ。オルコット、近接武装を出せ」

「は、はい」

返事をしたものの、中々で展開されない

「まだか？」

「い、いえ……。うん……。ああ！もう、“インターセプター”……！」

うまくイメージ出来ない事に痺れを切らしたセシリアは、初心者コースのやり方でショートブレードを展開した。

これは代表候補生たるセシリアにとっては屈辱だろう。

「何秒待たしている。実戦で相手は待つてくれないぞ？」

「……。頑張ります。」

「分かれば宜しい」

この様に本日の授業は行われたのだった。

夕食後の自由時間、一年一組のクラスメイト達による『織斑一夏、クラス代表就任記念パーティー』が開かれていた。

「と言うわけで！織斑君クラス代表おめでとう！」

「「「「「「おめでとう~~~~!!!!!!」」」」」」

「……………ああ」

一夏はパーティーの中心で、クラスメイト達から次々と祝いの言葉を送られていた。

いつもの如く、ぶっきらぼうな返答に無表情といった様子だが、彼女達の気持ちを無下には出来ないらしく、ちゃんと会話に付き合っている。

その様子を見て、箒は不機嫌そうに茶を飲んでいる。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしてみました〜!!」

オオ〜と盛り上がる一同、学生だけあってノリが良い様だ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやってます。ハイ、これ名刺」

「……………どうも」

「ではでは、ずばり織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ!!」

「……………特に無い」

「え〜、もっと良いコメント頂戴よろ?案ずるな、私は負けん!!とか」

お前はどごぞの黄金的な台詞を求めんのかよ!?!と突っ込みたいが気にしないで置こう

「夏はマキナだ。マキナがそんな事を言うなんて無理にも程がある。」

「……言葉で飾る必要など無い」

「おお……ハードボイルド……」

「夏は言葉では無く、行動と背中では語る漢なのだ。」

「じゃあ、仕方無いから適当に捏造しておくから良いとして……セシリアちゃんも何かコメントを」

「私、こういったコメントはあまり得意ではないのですが……」

そう言いながらも、満更じゃなさそうにしているセシリア

「では、まずどうして一夏さんに代表を譲ったのかと言うと――」

「あ、長そうだから、写真だけで良いわ。」

「ちよっ!?!?」

「クラス代表を譲った理由も、織斑君に惚れたからでいいよね?」

「なっ!?!? ななな……」

セシリアが真っ赤になってプシュと蒸気を吹き上げる。

「ああ、織斑君、セシリアちゃんとのツーショットが欲しいから並んで?」

「構わん」

そこで一夏はセシリアの横に並ぶと・・・彼女の肩に手を回した。

「い、一夏さん！！？」

「ぬあつ！！！？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「これ位のサービスはする。」

クラスメイトからは歓声上がり、箒からはギリギリと悔しそうな表情で睨んできている。

「やるねえ、織斑君。君って中々のプレイボーイ？」

「そんな訳あるか」

「じゃあ、撮るよ、 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「・・・知るか」

「正解は74・375でした」

直後にシャッターが切られるが、フレームに収まるようにクラスメイト達が入ってくる。

「・・・何故入っている？」

“まさか、筈までもが一緒になって入ってくるとは……”

獣殿もびっくりのチームワークである。

「あ、貴方達ねえ!!」

「セシリアだけ駆け抜けはけないでしょ?」

「ま〜ま〜」

「クラス全員の思い出になっていいじゃん」

「わ〜い、おりむ〜に、いのっちと写真〜」

「先輩、後でその写真くださいね!!」

“全く、子供だな……”

一夏はそんな事を思いながら彼女達の見ていたのだった。

その後、セシリアの肩を抱いたことに対する筈の嫉妬に、頬へキスすることで落ち着いた。

が、ズルイと言うセシリアを含めたクラスの声に

一夏は仕方なくクラス全員の頬にキスする事になったのだった……

結局この馬鹿騒ぎは夜十時まで続けられ

その間に一夏は数え切れない位、クラスメイトの頬や額にキスをしたのだった・・・

流石に“唇にしてくれ”と言う者は、同じ乙女達によって阻止されたが・・・

それでも皆、その日はとても満足そうにしていたのだった・・・

第六話（後書き）

はい、一夏君の鈍感振りと父親的スキルの発動です。

すごいですね一夏、クラスメイト全員に唇ではないとは言え、何度もキスしてます。しかし、一夏自身は家族や友達に対するスキンシップの様なものと考えているので、性質が悪いです。

設定集（前書き）

これまでの設定集です。

設定集

ふむ、この舞台裏を見に来るとは、君も中々に奇特な・・・いや、知識欲が旺盛な人間なのかな？

・まあ良い、大したもてなしは出来ないが、ここを見に来たのだから、精々楽しんでくれたまえよ・・・フッフ・・・

・織斑 一夏

前世はDies iraeの聖槍十三騎士団・黒円卓第七位ゲッツ・フォン・ベルリツヒンゲン

通称マキナと呼ばれていた英雄ミハエル・ヴィットマン

腐れ二トことカール・クラフト：メルクリウスとの戦いで何の偶然か円環から弾き出されて、気が付けば織斑一夏として生まれていった。

性格は前世のまま、寡黙でぶっきらぼうに話す。

織斑一夏という存在の影響を受けており、困っている人を見捨てることはしない

言葉にせず行動で表す人間、背中で語るハードボイルド、しかしシスコン。

前世の影響か、人間離れた身体能力を誇る。

剣道も天童と称されるほどの腕前だが千冬には及ばない

素手での格闘においては比類なき強さを誇る

剣道も手加減しきれない格闘の代わりに学び始めたもの、素手でコンクリートを砕き、鉄骨を折り曲げる。

千冬を支える為に生まれた時から自分に出来ることを必死でやってきた。

第二回モンド・グロツソで誘拐され、千冬が決勝戦を棄権して助け

に来てくれた事は

彼にとつて最大の忌まわしい記憶である。

元々養つてくれていた事に感謝していた一夏は、この事件がきっかけで千冬への想いや感謝が増し、シスコン度が増した。

学校でもハードボイルドな雰囲気から友人は少なかったが、無自覚にフラグを立てる。途轍もなくモテる。

一部では同性愛者か、不能か、とまで言われる程、色恋に興味が無い実際には色恋に興味が無い訳では無いが、千冬優先の為に構っている暇は無いのが実情である。

千冬に対する感情は、殆ど感謝、恩義、罪悪感、といったものだと思っているが、恋愛感情も多少含まれている。

専用ISは白式

・白式

一夏のISだが、どうもニートが余計なお節介をしてくれたおかげで、外見が一次移行の際に黒く染まり、本来と単一使用能力が変わっている。

単一使用能力は零落白夜なのだが、一夏曰くこれは不完全な単一使用能力の発現らしい

一夏自身はこれを両腕部分のみを部分展開して使うことがある。

更に量子化の応用による禁断の技があるがリスクが伴う

創造は“Ich gebe eigen Weg Die Welt des Bruders 我捧ぐ・姉弟世界”

これは一夏の渴望の一つである“最愛の人の為に出来る事を全て行いたい”と言う渴望から生まれた創造である。

効果はあらゆる物を使いこなす事が出来る様になる。それが武器であるうと、楽器であるうと、器具であるうと達人級の技量で行える。

意外と実用性は高く、日常生活にはもってこいの能力、種類は求道型。

・篠ノ之 篇

設定は原作と変わりないが、幼い頃の一夏の行動から新密度や愛情は高い、姉の束がISを開発した事で家族が散り散りになり、一種の呪いの様な物だと感じている。

別れる際に掛けられた言葉で一夏に対しての想いは常に烈火の如く燃え続けていた。

素直になりにくい幼馴染系クールツンデレ

幼い頃に一夏から慰めのキスを貰い、それ以来事ある毎に頬や額にキスして貰ったり

綺麗になつたと褒められたりと、意外といいポジションにいる。

同年代のヒロインの中では好感度が一番高い

一夏に裸を見られたり、押し倒されたりと何かしらの18禁的ハプニングに見舞われる。

・セシリア・オルコット

設定は原作と変わらず、幼少期の体験から人を見下す事がある。プライドが高く、金髪縦ロールの髪型と、正にお嬢様キャラの一つを体現した存在

男である一夏を見下し、対立して決闘を行う事になり、戦いの最中に一夏の誇りや心の強さに惚れる。

イギリスのIS国家代表候補生であり、学年の中ではトップクラスの技量を誇る。

・ブルー・ティアーズ

セシリアの専用ISであり、第三世代型のISである。特殊遠隔実験兵装“ブルー・ティアーズ”を六基搭載しており、実験機としての割合が強い

タイプの後方支援機であり、射撃に特化している為、接近戦となるとショートブレードの“インターセプター”しか無いので苦戦す

る。

ISのコアにメルクリウスが簡易版エイヴィヒカイトを仕込んだために、創造が発動可能

創造は

“ Seren golau dydd teimlad syrt
hiomewncariad 星光降り注ぐ、恋慕心情”

これは彼女の渴望である“自分の全てを受け止めて貰いたい”という渴望をから生まれた創造である。

効果はレーザーを雨粒の様に拡散させたり、収束させて一つの巨大なレーザーにしたり出来る。更にレーザーは相手に当たるまで追尾し続ける。

欠点としてはレーザーの燃費が酷くなり、二十発程でエネルギーが切れてしまう点である。種類は霸道型

・織斑千冬

織斑一夏の実の姉であり、世界初のIS操縦者でもある。ISの開発者、篠ノ之束とは幼馴染の親友である。

ISの世界大会、第一回モンド・グロツソ優勝者であり『ブリュンヒルデ』の称号を持つが本人はその名で呼ばれる事を嫌っている。高校生の時に親が蒸発した為、幼い一夏を学生の身で育てた苦労人である。結構ブラコンが入っている。

性格はクールで凜々しく、即決即断と言う行動方針であり軍人に近いが、心優しい一面も見せる。

能力が総じて高く、あらゆる事に対しての才能に恵まれていた。しかし家事関連の事は全く駄目である。

IS学園の教師をしており、厳格な鬼教官であるが、私生活はだらし無い

・鳳 鈴音

設定は原作と同じ、日本に転校してきた時にイジメを受けていたのを第の時と同じ様に救われた。

慰めに頬へキスをされ一夏にプロポーズする程夢中だった。

これは一夏が彼女をよく撫でたりして、半分猫扱いしていたからである。

一夏曰く“猫の様な奴”先輩曰く“ネコミミが似合いそう”との事
生意気な悪友系ツンデレで素直になる事もあるが重い事だと素直になれない事も・・・

中国代表候補生であり、二年でそこまで上り詰めた努力の才

・甲龍

中国第三世代型のISで鈴の専用機である。低燃費型の設計で近距離パワー型。最大の特徴は肩部にある非固定浮遊ユニットにある衝撃砲

ISコアに仕込まれたエイヴィヒカイトによって創造の使用が可能。
創造は“告別無永恆世界 告別無き永遠世界”

これは鈴の“別れたくない”と言う渴望から生まれた創造

効果は衝撃砲から不可視の糸を射出して、敵を捕縛したり引き寄せたりすることが可能。

しかし精神の強さによって糸の強度が左右される為、時には糸を引き千切られる。

種類は求道型

設定集（後書き）

キャラクターの設定や説明が出来次第、追加していきます。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・（前書き）

はい、思いつきで書いてみました。

上手く獣殿ことハイドリヒ卿を書けているか不安です。

これは小説本編とは関係ありません。

あくまで、もしもの物語です。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・

「織斑一夏だ。よろしく頼むぞ。麗しき乙女達よ」

IS学園に入学したのは、日本人でありながら黄金の瞳に鬘の様な長髪を持つ男だった。

その容姿は正に人体の黄金律と呼ぶにも、芸術品と呼ぶのにも相応しかった。

人間は本当に感動すると何も言えなくなるらしい・・・

外伝・もし一夏が獣殿だったら・・・

「久しぶりだな、篝。六年振りか・・・」

「ああ・・・貴方は相変わらずだな」

「ふっ・・・人はそう易々と変わりにはせんよ」

「その口調も変わらないな・・・」

「ああ、だが卿は美しく成長した。そう、幼かった蕾が花開く様な」

「そ、そうか・・・」

「うむ、卿と語り合う事は多いだろうが、この時間で語り尽くせるものでは無かるう?」

黄金はかつて別れた第一の幼馴染と再会する。

「決闘ですわ!!!」

「良かるう、代表候補生たる卿の力を見せて貰おうか」

黄金は、英国の令嬢との決闘に挑む

「愛せよ『破壊の君』」
ハガルクオーツ

黄金は嘗ての神槍を鎧として身に纏う

「な、何故、私の攻撃が通用しないんですの!!!?」

「愛が足りんよ、セシリア・オルコット」

超然とした笑みを浮かべ、黄金は不動の構えをとる。

「では、卿を愛そう」—— Y e t z i r a h 「

彼の手に黄金の神槍が現れる。

蒼き雫を身に纏う令嬢は黄金の愛を知る事になる。

「久しぶりね、一夏!！」

「そうだな、鈴よ。」

第二の幼馴染と再会する黄金

「その・・・私との約束を覚えてる?」

「ああ、卿との盟約は忘れもしない」

「じゃ、じゃあ・・・その・・・」

「甘いな、鈴よ・・・卿は私の愛は知っているが、私は卿の愛は知らん」

黄金に愛の深さを試される鈴

「よく、見ておきなさい一夏、これが私の愛よ!！」

「ふむ、悪くは無いが・・・愛が足りんよ、鈴」

鈴の愛は黄金の心を射止めるには届かなかった。

「僕はどうする事も出来ないんだ・・・」

「卿はそれでいいのかね？」

黄金は貴公子の姫君に問う

「僕は貴方みたいに強くなんて無い・・・」

「ならば、頼れば良からう？」

「でも、僕の話聞いてくれる人なんて・・・」

「私は総てを愛していると言った。ならば卿も例外などでは無い」

「僕の言葉を・・・聞いてくれるの・・・？」

「その通りだ。さあ、卿の想いを吐き出すが良い」

「嫌だ・・・嫌だよ・・・諦めたくないよ・・・」

まだ、やっていない事だつて、いっぱいあるよ。なのにこんな風に終わるだなんて・・・

そんなの嫌だよ・・・助けて・・・助けてよ、一夏!!!」

「任せる・・・卿を救って見せよう」

そして姫君は黄金の手を取る。

「お久しぶりです。獣殿！」

「ああ、卿も健勝そうで何よりだ。」

黄金は、己に忠誠を誓う銀の髪に黄金の片目を持つ旧友と再会する。

「ほう・・・姉上を模す・・・か、卿が望んだ強さとは本当にこれか
ね？」

「真に己の渴望を見つけられなかったか・・・ならば、私の愛で卿
の道を照らそう」

空虚な力に支配された彼女を黄金が破壊する。

「強さとは、一体何なのでしょう？」

「それは私や姉上が見つける事では無い、力は単なる力に過ぎんよ。何の為に卿は戦う？」

「分かりません・・・教官の様になりたいと思って、力を求めていました。」

「では、もう一度考えてみる事だ。何のために力を求め、戦うのか？・・・幸い、時間は沢山ある。」

力の意味を銀の少女は模索する。

「貴方を私の嫁にしてみせる！」

「はははははは！良かろう、卿の愛を私に見せてくれ」

銀の少女は黄金と共に在ろうとする。

臨海学校、照り輝く太陽の元、海で戯れる少女たちの瞳に、黄金の裸身が写る。

「うむ、海水浴など初めてだ。海は未知で溢れ返っている。」

「くっ、カールよ、ここで卿を感じるとは・・・」

力に慢心していた第一の幼馴染は、水銀の手が加わりし舞台上で暴君を演じてしまう

そして黄金は墜ちる。

「久しぶりだな、カールよ・・・」

「ええ、獣殿も変わり無き様で・・・」

「何故、卿はまた永劫破壊を？ここに円環は無いが・・・」

「獣殿、私の願いを聞き入れてくれはしませんか？」

そこで黄金は水銀の願いを知る。

「さて、私も挑ませて貰おうか・・・」

福音に挑むは新たな力を手にした黄金

「我が速度についてこれるか!？」

総てを追い越す速度で福音へと槍を振るう黄金

「ふむ、メイド喫茶か・・・面白い」

「フオオオオオオツ!!!!?」「」「」

着なくても良いのに態々、執事服を着る黄金

「良くぞ、戻って来てくれたな。主よ」

執事なのに偉そうな黄金

「さて・・・卿等は私を怒らせた・・・」

「ハア？何言つてやがん——ガアツ!!!!?」

黄金から放たれる殺意は余りにも圧倒的で凄まじい・・・彼等は黄金の逆鱗に触れてしまったのだ。

「私はM、そして織斑マドカだ・・・」

「卿は・・・」

戦奴として生きるしかない姉のクローンと黄金は出会う

そして、黄金と水銀は雌雄を決する。

「ふっ、カールよ、今こそ盟約を果たさそうではないか・・・」

「そうだな・・・ハイドリヒ・・・いや、織斑一夏」

総軍を率いる黄金、そこに集うは戦奴としてでは無く、肩を並べ信頼する戦友として集った者達

「行くぞ、卿等の渴望を叩き返してやれ！・・・案ずるな私は負けん！！」

Dies irae, dies illa, solvet
aecclum in favilla. Teste David
cum Sybilla.

怒りの日 終末の時 天地万物は灰燼と化し、ダビデとシビ
ラの予言のごとくに碎け散る

Et arma et verba vulnerant Et
arma

武器も言葉も傷つける

Quantus tremor est futurus, Qu
ando judex est venturus, Cunct
a stricte discussurus.

たとえどれほど大きな戦慄が待ち構えていようとも 審判者

が来たり、厳しく糾され 一つ余さず燃え去り消える

Fortuna amicos conciliat inopi
amicos probat Exempla

—— 順境は友を与えるだろう 欠乏は友を試し絆を高める事だろう

Tube, mirum spargens sonum Per
sepulcrare regionum, Cogit omne
s ante thronum.

—— 我が総軍に響き渡れ 妙なる調べ 開戦の号砲よ 皆すべからく 玉座の下に集つべし

Levis est fortuna id cito reposit
scit quod dedit

—— 運命とは軽薄である 与えたものをすぐに悉く裏切るが如く返すよう求める。

Lacrimosa dies illa, Quaresur
get ex favilla

—— 彼の日 涙と罪の裁きを 卿ら 灰より 蘇らん

Non solum fortuna ipsa est cae
casseditiam eos caecos facit
quos semper adjuvat

—— 運命はそれ自身が盲目であるだけでなく 常に助ける者 救われる者達をも盲目にする

Judicandus homo reus Huic ergo
parce, Deus.

—— されば天主よ その時彼らを許したまえ

Misc estultitiam consiliis
breve dulce est desipere in loco
—— 僅かの愚かさも思慮に混ぜよ 時に理性を失え それが望ま
しい

Pie Jesu Domine, dona eis requ
iem. Amen.
—— 慈悲深き者よ 今永遠の死を与える エイメン

Ede bibede post mortem null
a voluptas
—— 食べる 飲め 遊べ 死後に快樂はないのだから

「Atziluth
—— 流出

Du-sollst Dies irae
—— 混沌より溢れよ怒りの日

Acta est fabula
—— 未知の結末を見る

これはラインハルト・ハイドリヒが織斑一夏として生まれた人生を
描いた英雄譚である。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・（後書き）

さて、次回を書くのは何時になるのやら・・・

まあ、気力がドバアツと湧いてきたら、一気に書きます。

特に感想を書いたり、評価をしてくると、気力ゲージが貯まりやすくなります。（ゲームかよ・・・）

うん、鈴の渴望は出来上がってますし、創造の効果も考えてあります。

原作と似たような効果です。

ただ、シャルの詠唱にピツタリな詩は見つかりましたし、渴望もあるんですが・・・

その渴望から、どのような戦闘能力に変換すればいいか考え込んでいます。

第七話（前書き）

はい、徹夜で書きました。

明日も大学なのにねえ・・・

でも、読者の期待に応え、感想を貰うべく、俺は書く！！

という事で今回、中国娘の登場です。

第七話

パーティーの翌日、一組の教室では噂が広まっていた。

その事について、隣の席の谷本癒子が一夏に聞く

「ねえ、織斑君は転校生の話、聞いた？」

「いや、知らん・・・」

第七話

「何でも、中国の代表候補生が二組に転入して来て、クラス代表になっただけなんだって」

「そうか」

「あら、私の存在を危ぶんでの転入かしら」

相変わらず自身満々にポーズを決めて言うセシリア

もしISが無い世界であったならば、彼女は女優になっていたのだろうか？

“中国か・・・まさか、な・・・”

「む、やはり気になるのか？」

「一応、戦う相手ともなれば、少しは気にもなる。」

「・・・むう」

不機嫌そうに複雑な表情になる筈

「来月にはクラス対抗戦だ。それまでに相手を知る事に損は無い」

「それよりも私と二人きりの訓練に付き合ってもらえませんか？あれをうまく発動させられる様になりたいんです。」

確かにセシリアの言うとおりだった。

彼女はあれ以来、創造を上手く発動し切れていない

何故なら渴望を強靱な意志で維持しなければならぬからだ。

創造は、どれだけ強く渴望し続けていられるかと言う事が決め手となる。

簡易術式である為、創造を発動し維持するには強靱な意志で渴望を支える必要がある。

故に集中を切らしてしまうと即座に解除され、それまで麻痺していた疲労が一気に襲ってくるのだ。

嘗ては必殺技だった創造も、使い所を誤れば逆に敗北してしまうことも有り得る。

しかも彼女の創造は霸道型である為に効果空間内にいる者達の影響を受ける為、求道型よりも強靱な意志を持って自分の渴望を維持しなければならぬのだ。

創造について、千冬達に問い詰められたが一夏は束が仕込んだシステムだと説明した。

「今の所、展開時間が20秒前後、箒を加えると12秒が限界か……」

「はい……ですから、一夏さんのご教授を」

セシリアが一夏に聞くが

「生憎だが、お前は霸道型の創造だ。俺の求道型とは違う」

「霸道型？」

不思議そうに聞いてくるセシリアに説明をする。

「霸道型は周囲を変える物だ。多数を相手に向くが、渴望を強固に維持している必要がある。」

「求道型の方は何なんだ？」

箒も気になる様だった。

「求道型は自分を変化させる創造だ。一対一に向いている。渴望も自分のみに向けられるために霸道型よりは維持しやすい」

「では、求道型の方が良いのか？」

「いや、そういう訳でも無い・要は使い方だ。」

そう言って、簡潔に纏める一夏

「織斑君、頑張ってね！」

「フリーパスの為に！」

クラスメイト達も応援してくれるのは良いが、少しは欲望を隠したらどうか？と思う一夏

「今の所、専用機持ちは一組と四組だけだから余裕だよ。」

クラスメイトの鷹月静寂がそう言った直後に

「その情報、古いよ」

教室の入り口から聞こえてきた声に全員が眼をやると

先程思い出していた小柄なツインテールの少女が、そこに立っていた。

「二組のクラス代表も専用機持ちになったの、そう簡単には優勝出来ないから！」

「お前・・・鈴か？」

「一夏は何と云うご都合主義の展開か・・・と思いながらも、久しぶりの友に話しかける。」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たって訳」
「ビシィ！」と指を指してきた彼女を見て、一夏は・・・

「・・・似合わんぞ」

「んなつ！？何てこと言うのよ、アンタは！！！」

いきり立つ彼女の後頭部から、ゴスツと言う音がした。

「痛あく、何すんの・・・ふえ！？」

彼女が振りかえれば、千冬が立っていた。

「もうSHRの時間だぞ？」

「ち、千冬さん・・・」

流石の彼女も千冬の登場にたじろぐ

「織斑先生だ。早く行け、馬鹿者」

「す、すみません・・・また後で来るからね！逃げないでよね、一夏
！！！」

そう言っつて自分のクラスに戻つてゆく鈴

“まさか、代表候補生になつてゐるとは……”

二年前に別れた彼女からは想像も出来ない事だつた。

午前中の授業が終わつた後、昼食を食べる為に鈴と共に食堂に来ていた。

一夏は日替わり定食、鈴はラーメンを食べていた。

「しかし、驚いたぞ。お前が二組の転入生で代表候補生になつてゐるとはな」

「こつちだつてテレビ見て吃驚したわよ。なんでIS動かして、ここに居るのよ？」

「会場間違えて、触つたら起動した。」

「何それ……あいつ等は騒がなかつた？」

「ああ、騒いだ。」

思い出すのは自分を慕い、兄貴と呼んでくれた中学時代の舎弟達の事だ。

彼等は一夏の為なら何でもすると言つていた彼等は、マスコミの取

材を交代交代でシャットアウトしてくれていた。

劣ってやったら“兄貴にそう言っただけなら何でもしますぜ”と言っただけ切っていた。

彼等の事は後に語るとして・・・

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが？」

「そうですね、一夏さん。もしかして、此方の方と・・・っ、付き合っただけじゃないですか!？」

テーブルを叩いて、箒とセシリアが厳しい表情で問い詰めてくる。

「べ、べべべ別に私は・・・」

「違う、二人目の幼馴染だ。」

慌てふためく鈴の代わりに、至極冷静に一夏は言った。

「二人目・・・？」

「お前が小学4年まで、鈴が小学5年から中学2年までだ。」

箒に説明する一夏、その様子を見て鈴は溜息をついた。

「はぁ・・・アンタは相変わらずのハードボイルドね。」

「む?・・・彼女が箒、前に話した道場の娘だ。」

「ふうん、そうなんだ・・・」

鈴は箒を見定める様にジロジロと見る。負けじと箒も見返している。鈴の視線が彼女の一部に来た時、一瞬だけ頬が引き攣った気がしたが気にしないで置く

「初めまして。これから宜しくね。」

「ああ、此方こそ・・・」

お互いの背後に相對する龍虎が見えるのは気のせいだろうか？

「んんっ！私の事も忘れて貰っては困りますわ。」

私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですわ。」

「ごめん、アタシ・・・他の代表に興味ないから」

「なッ!？」

そう言つて一夏の方を向く、鈴

「ねえ、アタシがISの操縦見てあげようか？」

「一夏と訓練するのは私の役目だ!!!」

「そうですね！貴方は二組でしょう!?!敵の施しは受けませんわ」

「アタシは一夏と話をしてんの、部外者は引ッ込んでよ」

「むう………」

不敵に微笑む鈴と彼女を睨む箒とセシリア

「貴方こそ、後から出てきて何を仰ってますの!？」

「後からじゃ無いんだけどね。アタシの方が付き合い長いんだし」

「それを言うなら、私の方が早い!！」

お互いに牽制しあう乙女達、その様子を興味深そうに見ている生徒達

そして修羅場の真っ只中にいる一夏は……

「……ふう」

のんびりと茶を飲んでいた。

「『一夏』さん!！」

「………?」

怒ったように箒とセシリアが一夏に迫る。

が、当の一夏はそんな事構わずに鈴を見る。

「お前の父親は元気か？」

「う、うん、元気……だと、思う」

「……………そうか」

どこか暗い調子で返した鈴に何かあったと察する一夏

そこで昼休み終了のチャイムが鳴る。

「じゃ、じゃあね、一夏。また後で」

「ああ……………」

何か誤魔化すような様子で去って行く鈴

それを見て、一夏は

“一度、話を聞く必要があるか……………”

またお父さんの事を思うのだった。

放課後、第三アリーナでは一夏が箒とセシリア相手に訓練していた。

「ハアアアアツ!!」

やっとISの使用申請が通った箒は打鉄を纏って、一夏に切りかかっていた。

「ふん!!」

ガギイン！と彼女の持つブレードを雪片式型で受け止める。

「そこっ！！」

そこへセシリアがレーザーライフルを撃ちこんでくるが

「っ！！」

「ぐうっ！？」

箒を凄まじい脚力で蹴り飛ばし、一回転して剣でレーザーを切り裂く

「まだまだ甘いぞ・来い、セシリア」

「はい！」

一夏と距離を置き、攻撃を躲しながら詠唱をするセシリア。

箒もすぐに持ち直し一夏をセシリアに近づけまいとする。

—— Creu —— 創造

S e r e n g o l a u d y d d t e i m l a d s y r t h
i o m e w n c a r i a d —— 星光降り注ぐ、恋慕心情

異空間が展開され、雨粒の如き弾幕が一夏に襲い掛かるが

「おおおオオオっ！！」

零落白夜を使用して弾幕を薙ぎ払い、彼女への道を切り開く一夏

そこへ箒が切りかかってくる。

「ハアアアッ!!」

「くっ・・・」

「まだですわよ!」

消し切れ無かったレーザーの雨粒が四方八方から襲い掛かる。

が、一夏の寸前でレーザーが霧散した。

すると一夏は一旦訓練を止めて、セシリアに近寄る。

「・・・25秒、記録更新だな。」

「はあ、はあ・・・そうですね・・・まだまだの様ですわね・・・」

「ああ、だが箒も加えた状態では大幅に長持ちしている。」

「そう言って頂けると、幸いですわ・・・」

喋るのも億劫なのか、荒く息を吐きながらへたり込むセシリア

「今日はここまでだ。箒も良いな?」

「・・・私はまだ行けるぞ」

遊び足りないような子供の様な表情をする箒に一夏は言う

「創造を加えた訓練は相当消耗する。ある程度の余裕を持たんと明日に響く」

あの弾幕を躲すのに箒も一夏と同じ様に挑んでみたが、かなり複雑かつ高速の機動で回避しないといけないので、見た目以上に体力を消耗するのである。

創造を展開するならば尚更だ。

「セシリア、立てるか？」

「ええ・・・何とか・・・」

一夏は彼女の手を取って立ち上がらせる。

すると、一夏は二人を抱え上げた。

「な、何をする!?!」

「い、一夏さん!?!」

二人が驚いた様に声を上げるが、一夏は気にも留めない

二人は一夏の腕を椅子代わりに、彼の首に腕を回している状況だ。

「余り無理をするな。箒も結構、疲れているだろう?」

「だからと言って、この体制は・・・」

第が最後まで言わなかったのは、脳内軍師モッピーが何か助言したからだろう・・・

「一夏さん。その・・・重くないですか？」

ゼシリアの質問は、乙女にとって結構気になる質問である。

ここで原作の一夏なら、二人を比べたりして失礼な事を言ったりするだろうが

この一夏はそんな真似はしない

「大した事は無い・・・」

そう言ってマキナ一夏はアリーナから彼女等を抱えたまま出て行くのだった。

二人を反対側のピットに運んだ後、一夏は自分が出てきたピットに戻って来ていた。

そこへ鈴がタオルとペットボトルを持ってやって来た。

「お疲れ、一夏。飲み物はスポーツドリンクでいいよね？」

「ああ、待っていたのか？」

「えへへ、まあね・・・」

どこか嬉しそくに答える鈴からタオルを受け取り、汗を拭う一夏

「ね、ねえ、一夏。」

「何だ？」

「やっぱり、アタシがいないと寂しかった？」

「……そうだな」

「や、やっぱり、一夏はアタシが居ないとダメみたいね！」

何か凄く嬉しそうな顔をして言う鈴

だが、どこか空虚さや寂しさを感じさせる何かがあった。

「……鈴」

「何？いち——ッ！！？」

突然、一夏に抱き寄せられた鈴は一気に顔が真っ赤になる。

「iiiiiiiiii、一夏！？」

混乱する鈴に一夏は語りかける。

「何があった？」

「ッ！？…な、何を」

彼女の体が強張り震えた声で一夏に返す。

一夏は鈴を優しく抱きしめると、耳元で囁く様に言った。

「無理をするな．．お前に何があったのかは知らん。だが、お前は一人じゃない」

「い、いちかあ．．．」

そのまま鈴は一夏の胸の中で泣き出す。

一夏は胸の中の彼女が泣き止むまで、優しく撫で続けていたのだ。た．．

「ごめんね、一夏。カツコ悪い所、見せちゃったね．．」

「気にするな。お前が笑顔になるなら構わん」

「一夏．．．」

ある程度、泣いて落ち着いた鈴は様々な事を一夏に話してくれた。

両親が些細な事で喧嘩して離婚し、母親の方へと引き取られた事

寂しさを紛らわす為に必死で努力して代表候補生になった事

「鈴、別れる前に俺が言った事を覚えているか？」

「うん、覚えてる。」

“例え別れる事になっても、お前がまた会いたいと願えば、いつかまた会える。”

彼女との別れる時に言った一夏の言葉である。

「私ね、あの言葉があったから今まで頑張ってこれたんだよ……？」

「そうか……」

「うん、そうして一夏とまた会えた。」

「ああ……」

すると、鈴は一夏に抱きついて来た。

「会いたかった……会いたかったよ、いちかあ……」

「鈴……」

そんな彼女を一夏は抱き返すのだった……

「俺は部屋に戻る。また明日だ。」

「うん・・・そういえばさ」

「何だ？」

「一夏は誰かと一緒の部屋なの？」

その質問が引き金となってしまった。

「ああ、筈とだ。」

「それって、どついう事・・・？」

先程のしおらしさは何処へ行ったのやら・・・

妙に冷たく低い声で聞いてくる鈴の眼はハイライトが消えていた。

一夏は事情を説明した。

「ねえ・・・それって、あの子と寝食を共にしているって事？」

「そつだ、幼馴染と同室で助かった。」

俯いた鈴からは何か黒いオーラの様な物が出ており、ブツブツと何か呟いている。

「—————つたら、いいわけね・・・」

「何だ？」

「だから！幼馴染だったら良い訳ね！！？」

「ッ!？」

凄まじい鈴の気迫に思わず、一歩下がってしまう一夏

“この俺を退かせるとは……”

女とは時に神すらも超える恐ろしさを発揮するのだ。

「一夏!！」

「……何だ？」

「幼馴染は二人いるって事、覚えておきなさいよ……」

そう言い残し、鈴はピットを去って行った。

「と、言う訳だから部屋代わって?」

突然、部屋にやって来た鈴が言った言葉である

「ふざけるな!何故私が!！」

寝巻に着替えた篤が鈴に怒る。

「いやあ、篠ノ之さんも男子と同室なんて嫌でしょう?」

「べ、別に嫌とは言っていない!!」

女の争いを遠巻きに見ている一夏は、下らんと書いた様子でいた。

「とにかく、私もここで暮らすから」

「ふざけるな、ここは私の部屋だ!!出て行け!!」

「ところでさ、一夏。約束を覚えてる？」

「無視するな!こうなったら力づくで・・・」

部屋に立てかけてあった竹刀を取り、鈴に振り下ろそうとした筈の腕が一夏に掴まれていた。

「落ち着け、筈。鈴も無駄に煽るな」

「う・・・」

二人共しょんぼりするのを見て、一夏は話す。

「筈、お前は頭に血が上ると、すぐに竹刀を振るうのは止める・・・」

“分かったな?”と目で叱りつける一夏

「分かった・・・」

今度は鈴の方へと向く

「約束の事だったな・・・料理が上達したら毎日酢豚を食べてくれる。

だったか・・・」

「そう、そうよー!!」

その言葉に篤は目を見開き、鈴は賭け事で逆転リーチが来た時みたいな調子になる。

「もしかして、あれはプロポーズか？」

「え、えええええつと・・・その・・・」

ここまでストレートに聞かれるとは思ってなかった鈴は混乱してしまった。

「そそそそそ、そんな訳無いじゃない!!か、勘違いしないでよね!ただの味見係なんだからね!!」

ああ・・・悲しきかな、ツンデレの性・・・

「一夏の馬鹿!アタシの馬鹿あああああつ!!!!」

そう言って泣きながら部屋から出て行く鈴であった。

「・・・何だったんだ？」

「馬鹿者が・・・」

流石の篤も鈴の哀れさに涙を流すのだった・・・

翌日、生徒玄関前に張り出された『クラス対抗戦日程表』

そこに書かれていた一夏の相手は二組の代表となった鈴だった。

第七話（後書き）

あゝあゝ、やっちゃったよ・・

途中までいい雰囲気だったのに・・・

鈴ファンの方すいません

でも結局、一夏は父親的な感情しかない訳です。

鈴に対してもです。

一夏の中学時代の話、兄貴伝説は少し先で語られます。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら（前書き）

はい、突発的に書きたくなって書きましたが、少し雑な感じがします。

そしてまさかの二ト一夏、メルクリウス一夏、水銀一夏です。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら

「織斑一夏と言う・・・私は人前で話すのは苦手ですね・・・これ以上は勘弁して頂きたい」

IS学園に転入してきた男子は、無造作に膝裏まで伸ばした黒髪に蒼い瞳

そして芝居がかった口調で口元に薄い笑いを浮かべた少年だった・・・

外伝、もしも一夏が・・・シリーズ第二話〜水銀の場合〜

「お前はろくに挨拶もこなせんのか？」

「誰かと思えば貴方でしたか、我が姉よ。この様な形で再会するとは・・・」

「その芝居がかった口調は止める。鬱陶しい」

「ああ、申し訳ない・・・しかし、これが私の素なのですよ・・・故にご容赦召されよ。姉上殿？」

「織斑先生と呼べ・・・お前に構っていると時間が足りなくなる。

「おや、それは申し訳ない。」

そう言って水銀は席に座った。

その後、幼馴染の筈に連れて来られた水銀は屋上にいた。

「久しぶりだな、一夏」

「ああ・・・そうだな、筈。君と六年振り再会したのも、何かの縁と
言うものか」

「・・・芝居がかった口調は変わらないんだな。」

はあ・・・と、疲れたように溜息を吐きながら筈は言った。

「ああ、これが私なのでね・・・」

「そうか・・・」

「ふ、実に数奇だとは思わないかな？姉によって離れ離れになり、

その原因によって再び出会う事になると言うのも」

「間違い無く、お前だな・・・」

そう言った筈の表情は疲れていた。

「ちょっと宜しくて？」

英国の淑女が水銀に話しかける。

「何かね？お嬢さん（フロイライン）」

「くっ・・・人を馬鹿にしたような言い方ですわね。」

「すまないね。この喋り方が私なのだよ」

「まあ、良いですわ。英国代表候補生である私、セシリア・オルコットがこの様な道化師の様な男の言葉を気にする必要はありませんもの。」

傲慢な言い方であるが、その様子を見て水銀は晒っていた。

「ふふ・・・」

「な、何が可笑しいんですの!？」

「いや、失敬。君の様に振る舞う女性は、私の周りではいなかったものでね。」

「まあ、良いですわ。何か分からない事が有ったのであれば

泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ!

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!！」

「生憎、私も倒したがね・・・」

「わ、私だけと聞きましたか・・・」

「女子の中では、の話では無いのかな？」

ニヤニヤと嘲るように言う水銀

「なッ！あ、貴方も教官を倒したのですか！？」

「ああ・・・と言っても勝手に自滅しただけに過ぎんよ」

「どづいつ事ですよ！？」

「さて・・・君が知り得た所で何も変わりはないよ」

そのまま、休み時間が終わってしまう

クラスの女子達が水銀を代表にする事に同意して、それに納得しないものが居た。

「待って下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！」

私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言つのですか！？」

更に彼女は捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！」

それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります!!

大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛で――」

彼女の声が水銀の晒う声によって遮られる。

「何が可笑しいのですか!?!」

「くくく、まさか代表候補生ともあるう者が他国を貶す発言をするとは・・・蒙昧無知とは正にこの事か・・・」

「何ですって!!」

「君の一人の劇はつまらないのだよ。一人だけの演劇など滑稽にしか為らんよ。」

暗にお前ではつまらないと言う水銀

「決闘ですわ!!」

そして彼女は彼の用意した舞台へと上がる事になる。

「では、最初の恐怖劇グランギニョルを始めるとしよう・・・」

セシリアの攻撃がまるで幻惑されているかの如く当たらない

「な、何故当たらないんですの!？」

「さて、何故かな?・・・言うておくが“私は何もしていない”」
水銀の掌で踊らされている彼女は、それに気づかない

「さて、幕引きにしよう・・・」

次の瞬間、セシリアのIS、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが0になった。

「な、何が・・・」

「さて、もう一度言うておくが“私は何もしていない”」

ゆらりと消えて行く水銀が、セシリアには分からなかった。

「本当にアレは何でしたの?」

全く理解が出来ない事態にセシリアはその場に立ち尽くしていた。

そこには不気味なほどの静寂だけが残されていた・・・

「久しぶりね、一夏。」

「ああ、今度は君に巡り合うとは・・・私も中々に数奇な運命に恵まれている様だ。」

「相変わらず、胡散臭いわね・・・」

「ふつ、他人に嫌われる事など慣れているよ」

「いや、それもどうかと思う」

水銀の仕業でツツコミに回らざるを得ない鈴

「約束、覚えているわよね？」

「ああ、君が私に申し込んだ婚姻の約束かね？」

「ふえっ！！？」

「私としては、物事には順序と云うものが大事だと思うのだがね・・・」

「にゃあああああッ！！？」

水銀に良い様に弄ばれる鈴

「乙女の純情、返せえええッ！！」

「おや、君が勝手に思い込みに過ぎんだらうっ？」

「うるさあああいつ！！！！」

「やれやれ・・・怖いものだな、乙女の怒りとは」

そこへ予想外の襲撃が来る。

「ほう……まさか、舞台に乱入してくるとは……これもまた面白い」

もの言わぬ鋼鉄の騎兵は彼の舞台で踊る。

「はははは、どうした？この程度では私の劇を超える事など出来んよ」

鋼鉄の騎兵に彼の纏う白銀の機体から凄まじい重力が襲い掛かる。

いくなれば、グレートアトラクター、ブラックホールである。

重力の渦に飲み込まれた騎兵はその力に耐え切れずに圧潰してゆく

「ふむ、この程度では足りぬ。もっと私に未知を見せてくれよ？篠ノ之束……」

ニヤリ、と何処かに向かって言う水銀

「助けてよ、一夏ぁ……」

「ああ、君の境遇は確かに不幸だ……ならば私は救いの手を差し伸べ、大団円にして見るのも一興か」

水銀はシャルロットにどこか恋い焦がれた歌姫の姿を見た。

「一夏のえっち……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？一夏・・・鼻血が・・・鼻血がすごい事になってるよ！！」
「？」

「・・・・・・・・」

「ちよつと・・・一夏？・・・一夏！？」

「あ、ああ・・・すまなかつたね。少しのぼせてしまった様だ。もう大丈夫だ。問題ない」

「凄い勢いで鼻血が出てるけど!？」

「この位で私は死なんよ・・・」

「よかつた・・・」

そういつて水銀に抱き着くシャル

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐふっ」

「一夏あああッ!!?」

血の海に沈む水銀

「認める物か・・・貴様が教官の弟であるなど・・・」

「くくく、ならば君は何であると言つのかな？」

銀の少女がどうやっても応えた様子が無い水銀

「どうした、私はここだが？」

「このっ！！」

「そう、いきり立っていても獣と変わらないモノだぞ？」

「黙れエエエツ！！！」

水銀の舞台上で弄ばれる銀の少女、ラウラ

「成程、VTシステムか・他人の模倣など無粋な物でしかないのだがね……」

水銀は必滅の審判を模造品に叩き込む。

「粗悪な模造品など存在だけ無駄だ。」

そしてラウラは水銀に宣言する。

「お前を私の嫁にする！！！」

「……まさか、この私が驚きで固まる事があったとは」

臨海学校にて

「ふむ、この恰好が落ち着く」

「『『『露出狂かよ！！？』』』」

裸にボロ布一枚の格好にツッコミ所が満載だ。

そして出会うは水銀と天災

「久しぶりだ。束殿」

「はろっいっくん。相変わらず暗いね」

「ふっ、貴方はいつも子供の様だ。」

お互い不思議な関係で繋がっている水銀と天災

「さて、貴方は私に何を見せてくれるのかな？」

これは水銀のメルクリウスが送る、ニート的な愛が詰まった劇場である。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら(後書き)

さて本編のゴーストはとうとうか・・・

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら(前書き)

はい、第八話の中身が中々まとまらないので時間稼ぎの為の外伝です。

今回はヒロイ입니다。

すごいねシュライバー

では、ごきげん

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら

「僕の名前は織斑一夏って言っただ。よろしくね。」

IS学園に入学した男子は銀髪で片目に眼帯をした男の娘であった。

外伝、もしも一夏が・・・シリーズ第三話〜白騎士の場合〜

「「「きゃあああああああ!」「「「「

「まさかのシヨタっ子!!」

「可愛い!食べちゃいたい!!」

「ぐふふふ・・・じゅるり・・・」

可愛い男の娘に色めき立つクラスメイト達、すると・・・

「騒がしいな、このクラスは変態を集めたのか?」

そう言って、一夏の姉である千冬がやって来たのを確認した一夏は

「お姉ちゃあああああん!!--!!」

「うおっ！！？」

神速の速さで即座に抱き着いた。

そして姉の胸の中で頬ずりをする一夏

「えへへ・・・お姉ちゃん・・・」

「こら、離れないか」

「・・・ダメ？」

「ブフ　　ッ！！！！！！」

ウルウルした瞳で見上げられた千冬の鼻から大量の愛が溢れる。

「きゃああああっ！！？大丈夫ですか、織斑先生！！？」

「はぁ・・・はぁ・・・大丈夫だ。むしろ元気になった。」

「現在進行形で鼻血がヤバい事になってますけど！！！！？」

そう言う真耶を無視して千冬はクラスに言い放つ。一夏を胸に張りつけたまま

「諸君、私がこのクラスの担任になる織斑千冬だ。そして、この可愛らしい弟は私のだ。
良く覚えておけ」

「『『『『『何イイイイイイツ！！！！？』』』』』」

その宣言に衝撃を受ける全員

そして、その宣言を一夏に恋する乙女が許す筈がない

「ちよ、千冬さん。何を言っているんですか！？一夏は私のです！
！」

「ここでは織斑先生と呼べ、篠ノ之。こいつは最初から私のだ。」

何か二人の間で妙な争いが勃発し始めた。

それを真耶はおろおろしながら見ているだけだし、クラスの女子は面白そうに観戦しているだけだった。

そして、未だ千冬の胸に張りついている一夏は・・・

「・・・んう？」

千冬の胸から顔を離して箒の方を見ると・・・

「ほ~~~~う~~~~き~~~~い

物凄く甘ったるい声を出して飛びついた。

「のあああつ！！？い、一夏！？」

「ん~~~~？ 久しぶりだねえ、箒」

箒の胸にすりすり顔と顔を埋めながら嬉しそうに表情で箒を見上げる

一夏

「ブハアツ!!!!」

箒も千冬と同様に鼻から愛を噴きだした。

そして阿鼻叫喚の場へと化した教室でのSHRは二人の負傷者を出しつつも、終わったのだった・・・

そして屋上で改めて再会の挨拶をする一夏と箒

「久しぶりだね、箒。六年振り!!!」

「ああ、お前は相変わらず、そのままなんだな」

箒の言うとおり、一夏の身長は140後半で止まっていた。

「うん、何か成長が止まっちゃったみたいなんだ。箒は大きくなっ
たねえ」

そう言って、箒の胸を見る一夏

「ど、どこを見て言っている!!!」

恥ずかしそうに箒は腕で胸を隠す。

「ねえ、箒・・・」

「何だ？」

「また、抱きしめて？」

「ッ!？」

思わず、鼻を抑えて愛が噴き出さないようにする筈

久しぶりの幼馴染の無垢な懇願は相当効いた。

「あ、ああ・・・良いぞ。」

「うわぁい!!」

物凄く嬉しそうに抱き着いてくる一夏はとにかく可愛かった。

「ふふ・・・何時まで経っても抱きしめられるのが好きなんだな・・・」

「僕はいっぱい愛して欲しいんだ。だから・・・」

「ああ、分かってる。好きなだけ抱きしめてやる。」

「やったぁ！大好きだよ筈」

「ブファッ!!!!」

流石にこれには耐えきれ無かった筈でした。

すると・・・

「お前達何をしている?」

千冬が屋上へとやって来た。

「ち、千冬さん!？」

「織斑先生だ。・・・言った筈だ、一夏は私の物だとな。」

「ここまで来るとは・・・貴方に一夏を渡しはしない!!」

「ふっ、小娘が・・・私から一夏を奪えるところでも思ったか!!」

直後、チャイムが鳴った。

「む、行くぞ。一夏」

「うん。」

「えっ?・・・あっ!？」

いつの間にか筈から一夏を奪取していた千冬が、彼を抱えて教室へと戻って行った。

「くっ、待てえええええッ!!!!」

必死でそれに追いつがる筈の姿があった。

二限目の休み時間

「ちょっと、よろしくて?」

「ん?なあに?」

「なんですの!そのお返事。私に話しかけられるのも光栄なので、
からそれ、相応の態度と言つ物があるのでは無いかしら?」

「ごめんね?君が誰だか知らないや」

「な、何ですつて!?英国代表候補生にして、入試主席である。こ
のセシリア・オルコットを知らないですつて!」

「だって、お姉ちゃんと筈しか覚えてないから」

「なあ……!」

予想外の事態に硬直してしまうセシリア

すると、一夏は彼女を見てから

「えいつ!」

おもむろに抱き着いた。

「なああああああッ!?!」

突然抱き着かれて混乱するセシリア

彼女のそんな様子に構わず、一夏は彼女の胸をすりすりする。

「んんんんいい匂いがする・・・」

「なっ、嗅がないで下さい!!--」

「だって、セシリアからいい匂いがするんだもの・・・」

「ちょ、止め、あふうん・・・」

彼女の体を弄りだす一夏

「んんここかなあ?」

「ひあああツ!!!?」

むにむに、と彼女の形の良い尻に手を這わせて揉む一夏

いきなり始まった耽美な劇場に、鼻息荒くして見守るクラスメイト達

「うん、手はここがいいかな」

そう言っただけ彼女の尻を揉みまくる一夏

「は・・・あ・・・ああ・・・」

セシリアは結構トリップした表情になっていた・・・

しかも、顔が真っ赤に染まり、目は蕩けて、全身を震わせている。

このまま最後まで行くかとクラスの全員が思っていたら、無粋にもチャイムが鳴るのだった。

「はふう……」

荒い息を吐いてへたり込むセシリアを抱っこして、彼女の席に戻してあげるよ

一夏も自分の席に戻るのだった。

その姿を恨めしそうに見る筈に気づかず……

まあ、原作通りにクラス代表が一夏になりそうになって、セシリアが納得せずに立ち上がった。

しかし、文句をいう事は無く、ただ立候補しただけであった。

まあ、ウォルフガング・一夏・シュライバーにキラキラした目でジイイイと凝視されたからであるが……

多分、彼女は彼に苦手意識を持ったか、どこそのエロ漫画の如く、見られて快感がフラッシュバックしたか

彼女の表情からして、本当に前者だろうか……？

どうやら一夏は無自覚でセシリアを調教してしまったらしい

恐るべし、ウォルフガング・一夏・シュライバー

そして決闘することになった。

その際、千冬が一夏に向けて言った。

「殺すなよ？・・・分かっているな？」

「うん・・・頑張ってみる・・・」

“本当に彼女も災難だな”とセシリアに同情する筈であった。

昼、食堂に来ていた一夏と筈は適当な席に座っていた。

「お前は弁当なんだな」

「うん、料理するのは嫌いじゃないしね」

彼の弁当は何故にかドイツの家庭料理が多かったが、それ以外にも種類が豊富にあつて

彩りも豊か。そして味は抜群だった。

そのことは良いとして・・・

「何故いるんですか？」

「うん？ここは食堂だ。教師が利用していても、おかしくは無いだろ」

そう言つて一夏の隣にいる千冬はラム肉のローストを口に運ぶ

「美味しいぞ、一夏。」

「良かった。お姉ちゃんに褒めてもらつと嬉しいな」

このバカカップル姉弟はご満悦の様子だった・

「一夏、私にも一口くれないか？」

「いいよ。あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

一夏は筍にあ〜んしてグラタンを食べさせた。

「美味しいな・・・」

「そう？なら良かった。」

ニッコリ笑顔の一夏に筍もご満悦だった。

「ずるいぞ、一夏。私にもあ〜んして食べさせる」

「うん、いいよ」

「わ、私も」

結局、三人であ〜んしながら昼食を食べ終えたのだった。

放課後、千冬に連れられてきた部屋は寮長室だった。

「今日からお前は私とここで暮らすんだ。」

「分かった。で、荷物は？」

「もう、運んである。」

そう言って二人はベッドに腰掛ける。

「あれ？ベッドが一つしかないよ？」

「問題ない、お前と私が一緒に寝ればいい。お前は私専用の抱き枕だからな」

その言葉を聞いて喜ぶ一夏

「やった、お姉ちゃんと一緒だ。」

どうやら彼もダメコンである。

「一緒にシャワーでも浴びよう」

「うん！！」

一緒にシャワーを浴びて、一緒にベッドで抱き合って寝る。

もう手遅れなレベルだった・・・

元から彼は愛されなかった前世だった為に愛して欲しいと言う思いが強く

幼い頃からひたすらに愛を求めた。

くした。

そこへ迎えに来た千冬を見て、棄権した事を知ると泣きながら必死に謝り続けた。

千冬は優しく抱きしめてくれた。栄光よりも自分を選んでくれた。

その事に一夏は歓喜した。

“ならば自分は彼女の為の牙だ。この力の全てを彼女が愛する者の為に使おう”

これがウォルフガング・シュライバーが織斑一夏として生まれて、誓った事である。

そして決闘当日

「はははははッ、織斑一夏、総てに於いて我が姉に愛と忠誠を誓った。不死の白騎士!!」

「——ッ!!!?!」

一夏から凄まじい殺気が溢れ出す。

「泣き叫べ、劣等。此処に、神はいない」

そしてスラスターを全力にして突っ込んでゆく。

「僕が一番最初の姉の牙だアアアッ!!!!!!」

「くっ!!」

セシリアの持つ、スターライトMk-?からレーザーが放たれるがそれを総て躲しきる

「くっ、早すぎますわね・・・」

これでは当たらないと即座に判断したセシリアは切り札を出した。

「お行きなさい!ブルーティアーズ!!」

彼女のISの名を冠するビットが放たれ、それぞれが独立機動で彼にレーザーを放つ

「ああああああアッ!!!」

それすらも躲してゆくが未調整の機体である為、手一杯だった。

“負けてたまるか、負けたらお姉ちゃんにまた恥をかかせる・・・それだけは許せない”

その狂おしいまでの渴望はISである白式に

彼の聖遺物であり、今は力を失いしツェンダップが融合する。

その光りの中から生まれたのは、純白にして禍々しい騎士だった。

「なっ、一次移行ですって!?!まさか貴方、今まで初期設定で戦っ

ていたのですか!？」

セシリアの背に冷たい物が流れるのを感じた。

初期設定ですら、あの機動なら彼に合った状態の今ならどうだ？

白騎士を縛る枷は外れた。

今ここに最速の騎士が復活した。

F a h r ' h i n , W a i h a l l s l e n c h t e n d e
W e l t

——さらば ヴアルハラ 光輝に満ちた世界

Z a r f a l l ' i n S t a u b d e i n e s t o l z e
B u r g 聳え立つその城も —— 微塵となって砕けるがいい

L e b ' w o h l , p r a n g e n d e G o t t e r p r a c
h t

——さらば 栄華を誇る神々の栄光

E n d ' i n W o n n e , d u e w i g G e s c h l e c
h t

——神々の一族も 歓びのうちに滅ぶがいい

—— B r i a h

—— 創造

N i f l h e i m r F e n r i s w o l f

—— 死世界・凶獣変生

素っ裸のまま抱きしめられ撫でまわされるシャル。ご馳走様です。
どうやら触り癖や弄り癖がついたらしい

「久しぶりだな、嫁」

「うん、クラツリサは元気？」

「ああ、いつも通りだ。お前の写真を見て鼻血を噴き出していた。」
ラウラと一夏は仲が良いらしい

「許せないなあ・・・ラウラにこんな事して・・・ああ、許せないなあ・・・」

VＴシステムに取り込まれたラウラを救うべく白騎士は突撃する。

「う~~~~~み~~~~~だ~~~~~ああああああああ！~!」

物凄い速度で走り回る一夏

「織斑キュンの裸・・・ハアハア」

「ああ、食べたい・・・」

「ってか、あれ水の上を走ってない？」

「~~~~~まあ、織斑君だし~~~~~」

そんなんでいいのか！？どうやら一組は常識が永劫破壊されてしまった様だ。

「一夏さん。サンオイルを塗ってくださいまし」

「いいよ、それじゃあ塗るよ」

「ああん！一夏さん。そこはああああ！！！！」

なんでもピンク色のイベントにする一夏

「一夏、どうだ？」

「似合っているよ、お姉ちゃん」

「そうか。選んでくれた褒美だ。一緒に風呂に入ってやる」

「やったあッ！！」

「「「「私も！！」」」」

もう駄目っぽいな・・・

「みんなとお風呂だ〜！！」

クラスの全員と入る事になった風呂

「ちょ、止め！ああん！！」

「やあああん！！」

「うわ~~~~い!!」

風呂場でもう好き放題やっちゃうー夏

「久しぶり、いつくん」

「東お姉ちゃん!!」

「ふあああああつ!!」

天災でも一夏の前では意味が無い

「クラフトオオオオオツ!!!!」

水銀の手がけた舞台で墜ちる白騎士

Vor?ber, ach, vor?ber! geh, wiler knochenmann!

——ああ わたしは願う どうか遠くへ 死神よどうか遠くへ行つてほしい

Ich bin noch jung, geh, Lieber! Undr?hre mich nicht an.

——わたしはまだ老いていない 生に溢れているのだからどうかお願い 触らないで

Gib deine Hand, du sch?n und zart Gebild!

——美しく繊細な者よ 恐れることはない 手を伸ばせ

B i n F r e u n d u n d k o m m e n i c h t z u
s t r a f e n .

―― 我は汝の友であり 奪うために来たのではないのだから

S e i g u t e n M u t s ! l c h b i n n i c h t
w i l d ,

―― ああ 恐れるな怖がるな 誰も汝を傷つけない

s o l l s t s a n f t i n m e i n e n A r m e n s
c h l a f e n !

―― 我が腕の中で愛しい者よ 永劫安らかに眠るがいい

―― B r i a h

―― 創造

N i f l h e i m r F e n r i s w o l f

―― 死世界・凶獣変生

そして発動する真の詠唱による創造

「お姉さんに興味はある？」

「うん!!」

「ちょ!きゃあああああ!」

「生徒会長のおっぱいも大きいな〜」

「いやあ、ダメEEEEEEE!!」

学園の生徒最強だろうが一夏の前では意味が無い。

これはウォルフガング・シュライバーが新たな人生で得た愛の物語である。

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら（後書き）

千冬姉のプラコンが酷い事になってます。

一夏くん、もう女相手に無双です。

第八話（前書き）

今回もまた創造が出ます。

そしてまさかの事も・・・

とりあえずお楽しみください、どうぞ

第八話

クラス対抗戦の初戦で鈴と当たった一夏は考え込んでいた。

わずか二年の間で一般人だった鈴が代表候補生になったのだから

その実力はセシリアと同等か、それ以上か

「む・・・？」

すると廊下の曲がり角から鈴がやって来た。

「おはよう、鈴」

「っ！」

何故にか紅くなってプイと顔を背けられてしまった。

「・・・・・・？」

“何故だ？・・・嫌われたのか？”

さっぱり理由が分からない一夏

それが彼たる所以だろう

「直接、聞いてみるか・・・？」

そう考えたが彼女の問題だと思い、止めておいた。

第八話

それから数週間が過ぎたが、鈴の機嫌はよく分からない状態のままだ。

とりあえず一夏は“女はよく分からん”と言う結論に至った。

クラス対抗戦を一週間後に控えた日の放課後、箒とセシリアを連れてアリーナに向かっていた。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だ。」

「ああ・・・だが、箒も上達したな」

「そ、そうか？」

その言葉に少し照れる箒

“後は渴望を理解さえすれば、創造も使えると思うが・・・”

創造は専用機の特権みたいなものである。

誰もが使用する量産機では上手く発動はしない

一次移行する事で創造は使用することが可能になるのだから

「一夏さんも上達してますわ。動きに無駄が無くなってきてますもの」

「要は慣れ、と言う事なのだろうな・・・」

二人の相手をしながら、アリーナのピットへと向かう

重厚なドアが開くと中には鈴が居た。

「待っていたわよ、一夏！！」

腕組みして不敵な表情を浮かべながら立っている。

「貴様、どうやってここに！！」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！！」

「はん！私は関係者よ。一夏の関係者。だから問題無しね」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ三人を余所に一夏は

「こづいっ騒がしさも悪くは無いか・・・」

と、しんみりしていた。

粗方口論が終わった後、一夏は鈴に話しかけた。

「鈴、大丈夫か？」

「えっ？」

「もう無理はしてないな？」

一夏としては彼女の心の傷が心配だった。

「うん、大丈夫・・・ありがとう」

「なら、良い・・・」

「鈴・・・」

「何？」

一夏は戦士の表情で鈴に言う

「お互いに有意義な試合をしよう」

「ええ、アタシの強さを見せてあげるわ」

「それは楽しみだ。」

鈴の自信満々な表情を見て、やっと調子が戻ったなと実感する一夏

「なら、ここで戦って手の内を晒すのは面白くない」

「そうね、楽しみは当日だね。」

そう言っつて鈴は去って行く

「セシリア、第・・・」

「何だ？」

「何ですか？」

一夏は二人に言う

「俺たちの強さ、見せるぞ」

「ああ！」

「ええ！！！」

三人はしっかりと決意した。

試合当日

第二アリーナ第一試合、織斑一夏と凰鈴音の試合は注目度も高く、観客席は満員だった。

この試合は各国の要人からも注目されている試合だ。

一夏は腕を組みながら、その時を待っていた。

その視線の先に居るのは、中国第三世代のIS『シエンロン甲龍』を纏った鈴赤紫の機体色にゴツイ装甲、明らかにパワー型な外見である。

肩の所に浮いた非固定浮遊ユニットが気になるが・

“そろそろか……”

一夏が腕を降ろし、拳を握りしめる。

『それでは両者、既定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに従って、両者とも地上5メートル程上空に飛び、向かい合う。

「一夏、代表候補生の實力見せてあげるわ」

「ああ……見せてみる。お前の力を」

『それでは両者、試合を開始して下さい』

アナウンスが聞こえたと同時に動いたのは、どちらだったか……

二人は一気に己の得物を展開して切りかかり、鏝迫り合いになるのを避けるため。

力を上手く利用して、後ろへと下がり宙返りして体制を整える。

「へえ・・・流石、一夏ね。その化け物じみた強さはISでも変わり
は無いのね。」

でも・・・と鈴は両手の青龍刀、双天牙月をバトンの様に回して、あ
らゆる方向から切りかかってくる。

「くっ・・・」

その変幻自在な斬撃の嵐に流石の一夏も捌ききるので手一杯だった。

“接近戦は不利か・・・この俺が防戦一方とは・・・”

一夏の判断は素早かった。

—— B r i a h

—— 創造

I c h g e b e e i g e n e n W e g D i e W e l t
d e s B r u d e r s

—— 我捧ぐ・姉弟世界

即座に高速詠唱で創造を発動して技量を上げ、彼女の斬撃をいなし
て隙を作る。

「ッおおお!!」

片方の双天牙月をいなし、もう片方を足で刀身を横から蹴り飛ばす。

「ッ!!!」

突然、一夏の技術が上昇し、二振りの青龍刀が弾かれてしまい、隙を見せてしまった鈴。

しかし、その表情に焦りは無い

気が付けば、甲龍の肩アーマーがスライドし、そこから出てきた球体が光った直後

一夏は見えない拳に殴られたかのような衝撃に吹き飛ばされた。

「ぬう・・・!!!?」

そのまま、鈴との距離が引き離されてしまう

更に目に見えない衝撃が次々と一夏に襲い掛かる。

が、一夏は持ち前の勘で次々と回避して行く

「良く躲したわね。この“龍砲”は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに・・・」

“成程、確かに厄介だ・・・しかし、まだ未熟だ”

確かに見えないのは厄介だ。

ならば、撃つ人間を見れば良い

人間には必ず予備動作が存在する。

そして、この場合は・・・

「視線だ。」

彼女の視線が自分を捉えている瞬間を測って躲す。

「嘘、もう対応したって言うの!!!??」

「・・・射撃武装を使うのならば、視線無しで狙うんだな」

そう言つて砲撃の合間を勘と視線だけで掻い潜つて一気に距離を詰めて行く。

「この!!!」

それを迎撃せんと龍砲を最大チャージで放とうとするも

「甘いな」

彼女の視界から一夏が消える。

「——ッ!!!??」

一夏は瞬間加速イグニッションブーストを使用して彼女の上へと飛び上がったのだ。

そのまま“零落白夜”の刃を振り下ろす。

「オオオツ!!!」

その刃が彼女を捉える直前

閃光が彼等の戦いに割って入った。

「何・・・!?!?」

一夏は口元を歪ませて、それを見る。

それは異形の姿だった。

巨大で異形、それからは人の気配は感じられない

しかし、それから感じるモノを一夏は知っている。

「何故・・・貴様が・・・」

ソレは自分たちを嘲笑うかの如く、腕から強力なビームを放ってきた。

「試合は中止よ!一夏、アンタ狙われている!!」

「分かっている!!」

一夏がいつもよりも声を荒げている。

その表情もいつもの無表情では無く、口元を歪ませて腹立たしげな表情である。

「どつしたのよ!?!アンタがそんな顔をするなんて・・・」

鈴の言葉など耳にも入らない

「何故だ・・・何故貴様がここに居る!!」

カール・クラフト 〃 メルクリウス!!

“ふふふふ、さて・・・何故かな?”

頭の中に直接響いてくる声を不快気に聞く一夏

「何故ここに居るかなど聞く必要は無かったな・・・お前は殺す。」

“やってみるがいい・・・”

「オオオオオオオオツ!!!」

咆哮を上げながら一夏は異形のISに切りかかる。

対する相手も腕からビームを連射して寄せ付けない

が、しかし一夏は全てのビームを躲して突撃する。

“やはり、元々の性能では歯が立たないか・・・では、これはどうかな?”

次の瞬間、敵の姿が消えた。

「——ツ!!!??」

その感覚は覚えている。

これは・・・

「一夏、後ろ!!」

自分の後ろでは奴の腕が光っている。

しかし、対応しようにも体が重く動いてくれない

“不味い・・・”

その光が放たれる瞬間、それは聞こえた。

——創造

鈴には何が何だかよく分からなかった。

あの無表情な一夏が怒りの表情で異形のISに切りかかって行く。

「一夏!!!?」

敵の腕から放たれる高出力のビームの隙間を掻い潜るようにして突撃してゆく一夏

しかし、そこで異変は起きた。

敵のISの雰囲気が変わったと思ったら、一瞬にして一夏の後ろに回り込んでいたのだ。

「一夏、後ろ!!」

思わず声を上げるが、一夏はまるで重力に縛られているかの如く動かなかった。

敵の腕が光、至近距離でビームが放たれようとしている。

それを見た瞬間、ありとあらゆる物が彼女の中で停止した。

“一夏が死ぬ？・・・また別れるの？・・・二度と会えなくなるの？・・・”

彼女は恐怖する。織斑一夏との別れを

“嫌だ！もう別れたくない！！また会えたのに今度は二度と会えなくなると言っのか！？”

彼ともう一度別れる事など耐えられない

故に彼女は渴望する。“彼と別れたくない”と

そして、彼女の創造は完成する。

好花不常開

——よき花常には咲かず

好景不常在

——よき運命常にはあらず

愁堆解笑眉

——愁い重なれど面に微笑み浮かべ

淚洒相思帶

淚溢れてひかれる想い濡らす

今宵離別後

今宵別れてのち

何日君再来

いつの日君また帰る

喝完了這杯

乾しませこの杯を

請進点小菜

召しませこの小皿

人生難得幾回醉

人生幾度酔う日有らんや

不歡更何待

ためらうことなく歡びつくさん

来来来、喝完了這杯再説？

さささ、この杯乾して　いまひとたび語りましょう

今宵離別後

今宵別れてのち

何日君再来

いつの日君また帰る

創造

—— 創造

告別無永恆世界

—— 告別無き永遠世界

次の瞬間、一夏は敵の動きが停止している事が分かった。

それは・・・

「鈴！」

「一夏と、また別れるなんて許せないんだからぁ・・・」

甲龍の龍砲から不可視の糸が伸びており、それが敵の動きを停止させていた。

“成程、やはり面白いな・・・”

「ッ!!!?!?」

どうやら、その声は鈴にも聞こえたらしい

彼女の“別れたくない”という渴望から生まれた創造の効果は停滞と引き寄せる事だ。

「うああアアアアッ!?!?!」

一気にその糸で敵の機体を引き寄せた鈴は、そのまま双天牙月で切り裂いた。

胴体から両断される敵のIS

しかし、その銃口から光は消えていなかった。

「鈴!!」

一夏は真の創造を発動する。

発動、単一使用能力：零落白夜

そして彼は詠唱する。

彼の嘗ての創造を発動するために

BGM：Einherrjar Nigredo

Tod! Sterben Einzige Gnade!

死よ 死の幕引きこそ唯一の救い

Die erschreckliche Wunde, das Gift, ersterbe,

この毒に穢れ蝕まれた心臓が動きを止め

das es zernagt, erstarrte das Herz!

忌まわしき毒も傷も跡形もなく消え去るよつに

Hire bin ich, die of 'ne Wund
e hier!

——この開いた傷口 癒えぬ病巣を見るがいい

Das mich vergiftet, hier flies
st mein Blut:

——滴り落ちる血のしずくを 全身に巡る呪詛の毒を

Heraus die Waffe! Taucht eure
Schwerte.

——武器を執れ 剣を突き刺せ

tief, tief bis ans Heft!

——深く 深く 柄まで通れと

Auf! Ihr Helden:

——さあ 騎士達よ

Totet den Sunder mit seiner Qu
al,

——罪人にその苦惱もろとも止めを刺せば

Von selbst dann leuchtet euch
wohl der Gral!

——至高の光はおのずからその上に照り輝いて降りるだろう

Briah

——創造

Mi?gar?r V?lsunga Saga

一夏の両腕が雪片式型と一体化する。

そして輝くは彼の両腕

「オオオオオオオッ!!!」

凄まじい速度と共に一夏が鈴の命を狙う敵へと幕引きの一撃を放つ

“ふっ、見事だ・・・黒騎士・・・また会おう”

そう言っつて水銀の気配は異形から消えて行くのだった。

「う・・・」

久しぶりにこの創造を使った反動が猛烈な疲労感が彼を襲った。

そこで一夏は気を失うのだった。

「む・・・?」

「ようやく気が付いたか・・・」

気が付けば、自分は保健室で寝ており、近くに千冬が居た。

「それと・・・お前は言ったな・・・カール・クラフト 〓 メルクリ
ウス・・・」

「・・・・・・・・」

「誰の事だ？」

「篠ノ之束に協力し、創造を付けた張本人だ。」

「成程・・・束の関係者か・・・だが、お前と何の関係がある？」

「・・・・・・・・」

その言葉に一夏は目を逸らす。

「お前があれ程、怒った所は見たことが無い・・・」

「・・・いつか、話せるときが来たら話す。」

そう答えるのが精一杯だった。

「・・・まあ、良い・・・お前が無事ならな」

すると、直後に三人が保健室に飛び込んできた。

「一夏、無事か！！？」

「一夏さん、お身体の方は！？」

「一夏、大丈夫なの！？」

騒がしくやって来た三人に拳骨を喰らわせた千冬は

「一夏、休めよ」

そう言って、三人を連れて出ていくのだった。

ベッドに横になりながら考える一夏

“まさか、あの男がやって来るとは・・・何が目的だ？”

そう考えている内に一夏は眠りに就くのだった……………

その翌日

「織斑君、お引越しです。」

真耶にそう言われて、一夏は一人部屋に来ていた。

すると、ドアがノックされた。

「私だ。一夏。」

「どうした？ 筈、入るか？」

ドアを開けて彼女を中に入れようとする

「いや、ここがいい……………」

「一夏!!」

「何だ？」

「ええと、だな・・その・」

珍しく篤が言い淀んでいる。

「何だ？」

「ら、来月の学年別のトーナメントだな・」

「ああ・・それがどうかしたか？」

「わ、私が優勝したら――」

「？」

「付き合ってもらっつッ!?!?!」

その言葉を理解するのに一夏はしばしの時間を必要とした。

「は？」

「で、ではな!?!」

そう言い残して篤は自分の部屋にすっ飛んで行った。

残された一夏は・・・

「・・・・・・・・何処にだ？」

全く意味を理解してなかった。

駄目だこりゃ・・・

しかも・・・

「ふ~~~~ん、これは良い事聞いちゃった〜」

着ぐるみの様なパジャマを着た少女に聞かれていた。

第八話（後書き）

出てきました。人世界・終焉変生

これは単一使用能力と創造を合わせる事で発動が可能です。
しかし、やっぱりエネルギーは食います。

鈴の創造の詩は 黄嘉謨の詩、何日君再来です。
これは結構有名な詩で歌われてもいます。

閑話（前書き）

この話は一夏達とは別の所の話です。

色々と本編に絡んでくるキャラクターが出てきます。

閑話

とある基地の執務室である映像が再生されていた。

それは世界唯一のIS操縦者である織斑一夏と中国代表候補生、鳳鈴音との試合の映像だった。

そして乱入する謎の大型IS

発動する鈴の創造、そして一夏の創造

閑話 黒円卓の部隊

それを見ていた男は一緒に映像を見ていた女性に聞く

「ふむ、どう思うかね？」

「この織斑一夏は確実にマキナだと思います。この創造は奴以外にあり得ません。」

「やはりか・・・しかし妙な物だ・・・」

男は呟く

「私もこの世界に来てから既知を感じる事は無くなった。しかし力

「ルは何故、ISの
コアに永劫破壊の術式を組み込んだのか・・・」

女は答える

「さあ、それは分かりません。ですが、あの男の事です。碌でも無い事でしょう・・・」

男は聞く

「それと、亡国企業の方はどうなっている？」

「申し訳ありません。我が軍の内通者を未だ見つける事は出来ておりません・・・」

女は申し訳なさそうに言う

「そうか・・・」

男は座っている椅子に腰掛け直すと言った。

「たしか黒兎の部隊の隊長がIS学園に転入する事になっていたな・・・」

「その通りです。ラウラ・ボーデウィツヒ、私の教え子でもありません。」

「ふむ、そうか・・・ならば卿等にもIS学園へ行つて貰いたい」

その言葉に女はビシッと敬礼を返した。

「ハッ、了解しました。命令の内容は？」

「ラウラ・ボーデウィツヒ少佐の御目付役だ。」

「彼女は軍人ですが・・・」

その言葉に男は言う

「彼女は軍人であれ、未成年だ。それに彼女の周りが何やら怪しい」

「成程、内通者が彼女にちよっかいを出す可能性がある・・・」

「ああ、それにマキナとも再会してくるがいい」

「ハッ、了解しました。ハイドリヒ中将閣下」

「うむ、頼んだぞ。ヴィツテンブルグ大佐」

嘗ての黒騎士の同僚は再会の運命を辿る。

「と言う訳だ。貴様等も準備をしておけ」

「大佐、いきなり過ぎて酷いですよ。」

エレオノーレ・フォン・ヴィツテンブルグ大佐は

己の副官であるベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン中佐に文句を言われた。

「ほう・・・口答えとは随分と偉くなった物だな？キルヒアイゼン・・・」

ギロリと副官を睨みつけるエレオノーレ

「ヒイヒイッ！！？ち、違いますよ！話が急すぎるっただけで・・・」

「やかましい、とつとと用意しておけい！！」

「はいヒイッ！！」

脱兎のごとく走ってゆくベアトリス

「お前もだ。シュライバー」

「えっ？ボクも・・・？」

銀髪ショートヘアで右目に眼帯をしたボーイツシュな少女が聞く

「お前はボーデウィツヒと知り合いだろう？」

「ああ・・・ボクも代表候補生だから行けと？」

「まあ、そういう事だ。どうやら、あの忌々しいニートも絡んでいる様だしな」

その言葉にシュライバーが反応する。

「やっぱり、ISコアにエイヴィヒカイトを仕込んだのって」

「ああ、十中八九アイツだろうな・・・」

二人とも苦々しい思いで言う

「でも、豪華すぎやしないかい？代表候補生が二人、更にはドイツ国家代表で第二回モンド・グロツソ優勝者のザミエルがIS学園に行くなんて、上が黙ってないんじゃない？」

「いや、ハイドリヒ卿が上手く抑えてくれるそうだ。」

「でも、此処の事は良いの？亡国企業の動きは分かってないよ？」

すると、エレオノーレは晒って言う

「フツ、此処が襲われて易々と落ちると思うか？」

「ん〜あり得ないね。いざとなったら、ハイドリヒ卿が動くし」

アンナ・シュライバーは絶対の自信を持って言う。

「それに・・・あの女と久しぶりに会う事が出来るからな・・・」

「ああ・・・ブリュンヒルデの事が・・・」

彼女とは決勝戦で戦う予定だったのに、彼女が棄権した結果、不戦勝で優勝

この時、エレオノーレのプライドが大きく傷つけられた。

非公式でその後、決着をつけたが結局負けた。

しかし中々の名勝負だったとラインハルトは述べている。

「後、ハイドリヒ卿と昔……」

「それ以上言ったら殺すぞ？」

うわぁ……明らかに嫉妬してるよ……でも、これを忠誠心って言ってるから、他の女にとられるんだよ……

と、シュライバーは思ったが口には出さない。

彼女等はラインハルト・ハイドリヒ中将直轄部隊・聖槍十三騎士団

男の身でありながら、そのカリスマと天才振りに二十代後半で中将まで上り詰めたラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒが創り上げた部隊である。

そして世界最強クラスのIS部隊としても有名である。

隊長にドイツ国家代表エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ大佐

副官にベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン中佐

副隊長にアンナ・シュライバー少佐、代表候補生

と、専用機持ちが三人いる部隊である。

おまけに創造まで持っている為、無敵である。

「さて、貴様等行くぞ。IS学園へ!!!」

「だから、早すぎますって大佐あゝ!!!」

「マキナと久しぶりに会うけど、おもしろい事になってるんだろうね……」

何というか、少々人格的に不安の残る面子だった……

そして、それを見送るラインハルト

「さて、カールよ。卿は未知溢れるこの世界で一体何を為すつもりなのか……」

そう言ったラインハルトの机に置いてある写真には二人の男女の姿があった。

一人はラインハルト、そして、もう一人は………織斑千冬だった。

閑話（後書き）

さて、獣殿と千冬は昔・・・何があったかは言いませんがわかりますよね？

外伝4 もしもシャルが断頭の歌姫だったら（前書き）

今回は短いです。

ではどうぞ

外伝4 もしもシャルが断頭の歌姫だったら

「シャルロット・デュノア・・・よろしくね!!」

IS学園に転入してきたのは長髪にほんわか天然さんだった・・・

もしもシリーズ 第四話 断頭の歌

姫の場合

「よろしくね。イチカ」

「お、おう・・・?」

何故にか一緒に部屋になっちゃってしまっ一夏とシャル

大浴場にて一夏が風呂に入っていると、ガラリと戸が開いた。

「のわっ!!?!?し、シャルロットさん!!?!?」

「イチカ・・・?」

慌てて前を隠す一夏だが、そんなことに構わずシャルは湯船に入る。

「あの・・・シャルロットさん？」

「シャルでいいよ？」

「えつと・・・じゃあシャル」

「なあに？」

純真無垢な瞳で一夏を見るシャル

「何で入って来たんだ？今は男子の使用時間だろ？」

「イチカと入りたかったから」

「んなあ！？」

余りの事に呆然としてしまう一夏

「いや、その・・・恥ずかしくないのか？」

「うん・・・恥ずかしくないよ？」

あっけらかんと返すシャルにため息を吐く一夏

仕方ないばかりに、そのまま一緒に入る事にした一夏

「・・・そういえばさ、シャルの家ってどんな感じなんだ？やっぱり豪華とか？」

「ううん、違うよ？」

彼女は今までの境遇を何事も無かった様に話す。

一夏は信じられなかった。彼女の境遇がでは無く

彼女から全く怒りや悲しみと言った負の感情を感じなかった事にだ。

正に純真無垢、何も知らないままに育った真つ白な少女。

「シャル……」

「なあに？」

「お前は本当にそれでいいのか？」

「……？」

だから一夏は彼女に愛情を教える。

「良くねえだろ！お前はもっと知るべきなんだ！愛情って奴を」

「愛情……？」

「ああ、優しくて温かい物だ……」

彼女は聞く

「どっやって知るのが？」

一夏は答える。

「俺が教えてやる。」

その答えに彼女は・

「うん、わかった。ありがとうイチカ」

「ああ・・・どういたしまして」

ここに断頭の歌姫と一夏の契約は成された。

「とりあえず、抱き着くのを止めてくれませんかね・・・？」

「どうして？なんか固くなってるよ？」

「ちよっ！？弄るな！ストップ！止めて！・・・あふう！！！」

「あ・・・動いた・・・おもしろい」

「やめてえええっ！！これ以上されたらナニカが終わっちゃうううッ！！！！！」

一夏の受難は始まったばかりだ・・・

これは織斑一夏と断頭の歌姫との成長劇である。

外伝5 もしも千冬が赤騎士だったら（前書き）

はい、皆さん大体は予想していたんじゃないかと思います。

千冬姉がさらに容赦無くなってます。

では、どうぞ

外伝5 もしも千冬が赤騎士だったら

第一回モンド・グロツソ

それはIS史に於いて、織斑千冬の名を世界に知らしめた大会である。

織斑千冬は幼き頃より厳しく遊びが無い性格だった。

両親が蒸発した時など、即座に弟の一夏を知り合いの家に預けて働き始め

仕事が終わったら迎えに行くといった生活をしていた。

原作では白騎士事件だが、この世界に於ける名は赤騎士事件

日本に迫るミサイルを全て長距離狙撃によって迎撃し、その直後に捕縛しようとして来た各国の軍を殲滅し尽くした事で有名だ。

そして、第一回モンド・グロツソに於いて織斑千冬の前に敵は無かった。

彼女を相手にして三分以上保っていられた選手は一人もいなかったのだ。

彼女のIS『魔操砲兵』の前に全てが消し飛ばされたのだ。

元々、彼女は剣道も極めていた達人ではあったが、それ以上に射

撃技術が恐るべきものだった。

彼女が生涯で外した射撃は十発に満たないと言われている。

そして彼女は女性である以前に戦士であり、軍人であった。

IS学園で教師をしているが、そのスパルタ振りにはハートマン軍曹以上と言われている。

もしもシリーズ 第五話 赤騎士の場合

「諸君、私が織斑千冬だ。貴様ら新人をこの一年で使い物になる操縦者に育て上げるのが私の仕事だ。私の言う事は良く聞き、良く理解しろ。出来ない劣等生は私が出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳の貴様らを優れた兵士に育て上げる事だ。私の言う事には何であっても“はい”と答える。いいな？」

すると、彼女の言葉を聞いたクラスメイト達は

「キヤ ！！千冬様！本物の千冬様よ！！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです。北九州から」

ミーハーなクラスメイト達の黄色い声が響くが・・・

「黙れ、馬鹿共」

千冬の殺気交じりの一言で教室が一気に黙りこくった。

「貴様らは勘違いしている様だが、ここはアイドルの事務所でも無ければ、楽しい場所などと思うなよ？ここはISの操縦者を育成する軍学校と同じだ。」

その発言に副担任も真耶が慌てる。

「お、織斑先生！？いくらなんでもその発言は不味いかと・・・」

そつという真耶を見て千冬は鼻で笑う

「ふん、下らんな。所詮ISは今はどうあれ、戦争になれば切り札として運用される。戦争が起これば、自分の隣にいる奴と殺し合いをする事もあり得るのだからな・・・」

その言葉にクラスの全員が凍り付く

「何だ？その表情は？まさか貴様らIS条約が有るからと言って戦争に駆り出されずに済むとでも思っていたか？そんな甘い考えなど捨てろ。ここに入学し、ISの操縦者となる以上、いつ貴様らは戦争で敵を殺し、殺されるか分からんのだ。だが貴様らは逃げる事もやめる事も許されん。その様な愚か者は私自らが殺してやる。」

余りの発言に何も言えなくなるクラス一同

「さて、静かになった所で・・・織斑、貴様も中々に面白い自己紹介だな・・・」

その台詞に一夏の表情が蒼褪め、ガタガタと小刻みに震えている。

「い、いいいいいや、千冬姉。俺は――がアツ!!?」

ゴツ!!という鈍い音と共に一夏が吹っ飛ぶ。

何人かのクラスメイト達と真耶が悲鳴を上げる。

「織斑先生だ。理解したか？」

「サー!! イエツサー!!」

即座に条件反射の如く答える一夏

どうやら幼い頃から姉に対する恐怖と服従が染みついている様だ。

「さあ、SHRは終わりだ。貴様らには、これからISの基礎知識を半月で覚えて貰う。その後は実習だが、基本動作は体で覚える。いいか、私が何か言ったら全て“はい”と答える。いいな？」

「……………はいッ!!!!」

入学早々、彼女達は生きて卒業できるかなあ・・・?と思うのだった。

「織斑、事前に渡した参考書は読んだか？」

「・・・一通りは読みました。ですが一か月では流石に厳しかったです。」

そう言った次の瞬間には、凄まじい衝撃と共に一夏は宙に舞っていた。

「グッ・・・ガハア・・・!？」

更に彼の頭を踵で踏みつける。

「ぐじゅじゅ!!」

千冬は冷酷に告げる。

「言った筈だ。一か月で理解しろとな。」

「ぐぐ・・・申し訳ありません・・・」

「次は容赦せんぞ？」

そう言って彼女は足を離して、元の場所に戻る。

「はぁ・・・はぁ・・・」

何とか立ち上がり席に座り直す一夏

「何を愚図愚図している？愚鈍が。さっさとしろ・・・」

余りの苛烈さにクラス全員が震えながら授業を受けるのだった・
・

そして、クラス対抗戦の最中に襲い来るゴーレム

「ほう・・・我が教え子に手を出すとはな」

「ち、千冬姉・・・」

「織斑先生だ・・・愚弟が。ここは私に任せろ。貴様ら半人前は引っ込んでおけ」

そう言って、少し本気をだす千冬

「Yetzirah」
『ザミエル・ツェンタウツァ
魔操砲兵』

纏うは赤騎士

「Der Freischütz」
『フライシエッツァミエル
現れるは巨大な列車砲』

そして放たれた砲弾が爆音と共にゴーレムをコア以外、跡形も無く消し飛ばす。

「貴方を倒す。織斑千冬！！」

対峙するのは自分のクローンに亡国企業のエージェント達

「くっ、はははははははははは！良いだろっ貴様らの蛮勇を称えて私も本気で相手になってやるっ」

Echter als erschwer keiner Eide;

—— 彼ほど真実に誓いを守った者はなく

treuer als er hielt keiner Verräter;

—— 彼ほど誠実に契約を守った者もなく

lauter als er liebte kein andrer:

—— 彼ほど純粋に人を愛した者はいない

und doch, alle Eide, alle Verräter,

—— だが彼ほど総ての誓いと全ての契約

die treueste Liebe trog keiner wie er

—— 総ての愛を裏切った者もまたいない

So werf ich den Brand in walhalls prangende Burg.

—— 我はこの莊嚴なるヴァルハラを燃やし尽くす者となる

Briah

—— 創造

M u s p e l l z h e i m r L ? v a t e i n n

焦熱世界・激痛の剣

そして展開されるは獄炎の砲身内部の世界

彼女の鬼教官振りに何とか、ついて来ていた一夏。

「し、死ぬ・・・流石、千冬姉・・・遊びなんて存在しねえ」

「そ、そうだな・・・昔から千冬さんは、手を抜くなどと言った事をしなかったからな」

「誰相手でも容赦なく殴りますし・・・」

セシリアも殴られてトラウマになっている。

「そうだね・・・い、嫌だ！もう的には！的にはなりたくないよ
おおお！・・・」

シャルが何かの折檻を思い出したのか発狂じみた事になっている。

「嫌あああつ！！弾幕があ！！爆発があ！！」

鈴も何か酷い事になっている。

「ふ・・・ふふ・・・あのころに比べれば・・・まだ温い・・・」

ラウラは何処か遠い目をしていた。

「貴様ら！いつまで遊んでいる！とつとと来んかあッ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「罰として貴様らには私が直々に指導してやるう・・・」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

これはエレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグの新しい人生と伝説の劇場である。

外伝5 もしも千冬が赤騎士だったら（後書き）

流石は少佐、弟相手でも容赦ないですね・

第九話（前書き）

はい、今回は戦闘は無しの日常、中学時代の事や一夏の凄さが分かります。

では、ごんぞ

第九話

「で？女の園って奴はどうなのよ？」

「何？」

一夏は久々に休日を利用して、中学生時代の悪友である五反田弾の家に来ていた。

第九話

「……………昔前のパンダの気分だ。」

「ああ……男が物珍しいのか」

どこか納得したような表情の弾だが、更に聞いてくる。

「でもさ、良い思いしているんだろ？」

「いや、そうでも無い。」

嘘だ！！と読者の心境を代弁しておこう。筈のフルヌード見た癖に、それは無い

「男なら肩身が狭い思いをするぞ・・・」

「でも、男なら一度は憧れるよな。自分以外は全員女子なんてシチュエーション」

「実際はそんなに甘いモノでは無いぞ?」

「はぁ・・・と一夏は羨ましそうに言う弾に溜息を吐きながら言う。

「お前の事だ。もしお前が俺の代わりに入学したのなら、ビクビクしながら生活する事になるだろうな・・・」

「なっ、そんな事ね〜よ!」

「中学時代に同級生の女子に告白されたのに、怖気づいて断ったのは誰だ?」

「ぎゃああああっ!! 黒歴史を言っなああっ!!」

頭を抱えて悶える悪友を見て一夏はやれやれだな・・・と思った。

普段スケベでお調子者な奴には、告白されると三種類のタイプに分かれる。

その一、いつもの様に軽いノリでOKする奴

その二、いざとなるとビビって怖気づく奴

その三、こっぴつこっぴつ時にはシリアスで真面目になる奴

どつやら弾は二番目だったらしい……

このタイプは自分が好きな奴以外に告白されると、どんなに美形でも勢いやテンパったりで断ってしまう事が多い

弾は例に漏れず、このパターンだった。

「彼女は俺たちの間でも一番人気だった。美形、清楚、器量良し、品行方正、文武両道」

学園のマドンナともいえる彼女を振ったなんて物凄く勿体無い。

実際にその後、級友達にフルボッコにされたのだ。

「すいません！俺が調子に乗ってました！！」

土下座までして頼み込む弾

かなりの黒歴史だったらしい

ちなみにその時の断った理由“俺が好きなのは蘭だ！！”

咄嗟に出たシスコン発言で彼女は泣き出した。

その後に一夏が彼女を慰めるために言った言葉“まだまだ人生は長い”

「鈴や箒に再会できて良かったが……」

「ああ、鈴と前に言っていた最初の幼馴染か……」

「彼女等には感謝している・・・」

そう言う彼の表情は何処と無く柔らかく、優しい目をしていた。

すると、いつの間にかカメラを持っていた弾が一夏の写真を撮っていた。

「何のつもりだ？」

「お前がそんな顔をするのは滅多に無いから・・・写真にして売る。」

「別に構わんが、俺の表情など買う奴などいないぞ？」

はあ・・・分かってないな。この鈍感は・・・と、思った弾

すると、突然ドアが蹴り開かれた。

「お兄、お昼出来たよ。さっさと食べに来なさ・・・」

「久しぶりだな。蘭」

「い、一夏さん!？」

弾の妹、五反田蘭

かなりの美少女で、名門のお嬢様学校に通っている。

しかし、今の恰好は一種の下着にも近いラフな格好だった。

彼女は慌てて陰に隠れると身なりを整えてから、彼の前に出てきた。

「い、いやっ……あの……来てたんですか……？」

「ああ……今日は家に物を回収するついでに寄ってみた。」

「そ、そうですか……」

「蘭、お前なあ……ノック位しろよ。恥知らずな女だと思われ
——っえっ!?!?」

蘭は拳を握りながら弾をギロリと睨む。

「何で言わないのよ!?!?」

「ああ……いや……言ってなかったか? そうか、そりゃ悪かった・
・アハ、アハハハハ……」

蘭に乾いた笑いを返す弾を見た一夏は

“彼女の方が強いか……これも女尊男卑……か?”

と、何か間違った方向に考えていた。

蘭はそそくさと部屋を出て行く

「あの……一夏さんも一緒にお昼どうぞ……まだ……でしたよ
ね?」

「ああ、頂こう。ありがとう」

久しぶりに彼らの実家、五反田食堂の食事が食べれる事もあってか滅多に表情を変える事の無い一夏が・・・

「えっ・・・・・・・・・・？」

「マジかよ・・・・・・・・」

優しく微笑んだのだ。

弾も思わず呆けてしまう程の衝撃だった。

それでもカメラのシャッターを切っていたのは奇跡であろう

「はづうづうづうづうづッ！！！！？」

一夏に恋する乙女である蘭には幕引きの一撃になってしまった様だった。

ポオオオオオオオオオオオッ！！！！と凄まじい勢いで蒸気噴射すると猛ダツシユで食堂の方に降りて行った。

「・・・・・・・・何だったんだ？」

「まさか、お前の微笑みをゲットできるとは・・・これ一枚で四桁・いや五桁行くかも・・・」

何が何だかよく分からなかった一夏は、とりあえず食堂に降りて行

った。

すると、着替えてきた蘭が待っていた。その表情は紅く、正に恋する乙女だ。

「あ、あの一夏さん。ゆっくりして行ってくださいね」

「ああ・・・いつ食べてもここの飯は美味しい」

「そ、そうですか？」

その言葉に蘭は嬉しそうにする。

「蘭の嫁に貰える男は幸せ者だな・・・」

「ふえっ!？」

一夏が何気なく言った言葉で真っ赤になる蘭

「それに、随分と綺麗になったな蘭」

「あう・・・ありがとうございます」

プシュシュと顔から蒸気を出しながら答える蘭は可愛らしかった。

「そう言えば、蘭もIS学園を受けるんだっただな・・・」

「はい!簡易適性検査ではAでした。」

「そうか・・・」

一夏は目の前の可愛らしい少女がISを纏い戦う様子を想像する。

しかし、その想像はネガティブな方へと向かって行く

“もし戦争が起これば蘭も戦う事になるのだろっな・・・人を殺し、殺されるかもしれない戦場へと・・・”

しかし彼女の人生に口出しする様な権利は無い、ならば自分は彼女が死んでしまわない様にするしか無い

そう考えた一夏は蘭に言った。

「もし、IS学園に合格できたのなら俺がしっかりと面倒を見てやる。」

「えっ!?!い、一夏さんが・・・?」

「ああ、手取り足取り教えてやる。幸い優秀な先輩もいるしな・・・」

「手取り足取り・・・一夏さんが・・・」

何か妄想をして赤くなっている蘭

「弾、蘭の事は任せておけ。俺がずっと面倒を見てやる。」

「ほ、本当ですか!?!?」

正にこの世の春だと言わんばかりにテンションが鰻登りになっている蘭

「ああ・・任せる」(IS的な意味と学園生活的な意味で)

「約束ですよ!？」(人生的な意味、婚約的な意味で)

明らかに何かが致命的に食い違っているが、それに弾が気づいたものの口に出したら人生が終わるので口には出さない

代わりに一夏に言う

「はあ・・お前って学校でもそんなんだろ？」

「ああ・・何故か、篝や鈴に怒られる。」

その言葉を聞いて弾は鈴の事を思う

“ 苦労してんだろうな、鈴の奴も・・・ ”

その後、一夏から聞かされた鈴のプロポーズ自爆話に、弾は男泣きするのだった・・・

さて、ここで一つ、過去の話をしよう

二年位前の織斑一夏と五反田蘭の話を・・・

蘭は今でこそ一夏に想いを寄せているが、出会った最初の頃は違っ

ていた。

彼と初めて会った蘭は、その雰囲気や口数の少ない寡黙な所から苦手意識を持っていた。

そんな彼に恋心を持つようになったのは蘭が不良に絡まれていた時だった。

彼女の近くを偶然通りがかった一夏は、不良共を成敗して蘭を助け出した。

緊張が抜けて泣き出した蘭を胸の中で泣かせた後、腰が抜けて立っていない蘭を背負い家まで送り届けたのだ。

ぶつきらぼうな言葉しか掛ける事が出来なかったが、逆に年上でハードボイルドな雰囲気と合わさって、蘭は安心する事が出来たのだ。彼女を送り届け、何も言わずに去ろうとした所、彼女の祖父である五反田巖に気に入られて、会う度に蘭を嫁にとか言ってくるのである。

一夏は幼い頃から相当有名で、女子に媚びず、堂々としており大人顔負けの正論と腕っぷしで男女間の問題を解決してきた。

今の時代には珍しい一匹の雄として威風堂々と女性の世の中に立っているのだ。

他にも説教や相談に乗って暴走族の更生を行ったり、虐められっ子を救ったり、人命救助を行ったりしていた。

その活躍ぶりと彼に救われたりした恩義などで、一夏を慕う集団が出来てしまったのだ。

といっても、彼らは一夏の舎弟みたいな者達で、彼を筆頭にして世の男たちを纏め上げて、男としての尊厳を守り、女性に負けない強い男を目指したり、虐げられている男を救い上げると言った行動をしている。

この活動は意外にも日本だけで無く、世界の各国にまで及んでおり織斑一夏は実質的に女尊男卑の世界に負けない男達の旗頭でもあるのだ。

彼がI Sを使えた事によって、更にその運動は活発になってきているが・・

どうも女尊男卑の世界によって甘い蜜を啜っていた政治家の一部による鎮圧行動もあつたらしい

名目としては“男性のみの団体を組織する事で女性に対する治安の悪化を防ぐ為”

つまり集団に女性が入ってないのは不平等だろうと言っているのだ。

これには流石の一夏も“こんな時だけ男女平等を謳うか”と呆れた。

それでも彼らは一夏を尊敬し、日々男を磨き、尊厳の回復に努力している。

マキナー夏は原作の一夏とは比べ物にならない程の影響力を持って

いるのだ。

これも彼の人徳や性格や生き様のお蔭なのだが・・・

その日、一夏が帰ってからの五反田家は、大騒ぎの盛り上がり様で、舎弟達が彼に会えなかったことに悔んだり“俺たちの蘭ちゃんと兄貴の婚約記念パーティー”とかが開かれていたりした。

当の本人一夏が知らぬ間に、フラグがとんでもない発展を遂げるのだった・・・

月曜の朝、いつもの様に賑やかな教室に入ると、クラスメイト達がISスーツのデザインについて話し合っていた。

真耶がISスーツについて説明して、クラスメイトに弄られていると千冬がやって来てHRが始まった。

「では、山田先生。ホームルームを・・・」

「は、はいっ！ええつとですね、今日はなんと転入生を紹介しますッ！しかも三名です！」

「『『『『『ええええええっ！！？』』』』』」

驚きの声が上がった直後、クラスの戸が開いて三人の外国人が入っ

て来た。

その姿を見た途端、静粛になる教室

何故なら、その内の一人は男だったのだから・・・

しかし、一夏が見ているのはそっちでは無く三人目の方だった。

ニヤニヤと小悪魔の様な笑顔で一夏を見る少女

一夏はこれからの生活に多少の不安を抱くのだった・・・

第九話（後書き）

マキナは最早、世界のマキナとなっております。

本人も意図していた訳では無いのに、彼の人望が起こした事なんです。

マキナの何気ない行動が世界の男たちの希望になっています。

そして、ここに来てブラックホースの蘭が周りの土台を盤石なものにしました。

初登場で箒や鈴以上にフラグを発展進化させてしまいました。

周囲公認の婚約に持つていきました。

このままでは蘭が一夏をゲットしちゃうか？

でも、一夏本人に自覚なし

第十話（前書き）

遅くなってすみません。

書く気力が湧いてこなかったなので苦戦しました。

では、どうぞ

第十話

「初めましてフランスから来ました。シャルル・デュノアです。
この国では不慣れな事が多いと思いますが、よろしくお願いします。」

第十話

転校生の一人、金髪ブロンドヘアを後ろで三つ編みにした転校生が自己紹介をした。

「・・・男？」

「はい、此方に僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
」

クラスの誰かが呟いた言葉を律儀に返すシャルルは貴公子の様なイメージだった。

「きや・・・」

「はい・・・？」

「きゃあああああー!!」

教室が揺れる程の歓声が響いた。

「男子!二人目の男子!!」

「しかもウチのクラス!!」

「美形!守ってあげたくなる系!!」

「地球に生まれて良かった~~~~!!」

そんな中、一夏はシャルルの事など見ていなかった。

「あー騒ぐな。静かにしろ!」

千冬が一喝すると、騒がしかったクラスが静かになる。

「そ、それじゃ、次の人お願いします。」

真耶がそう言うが、左目に眼帯をした銀髪ストレートの少女は無言のままだった。

「.....」

「えつと.....」

「挨拶をしろ。ボーデウィツヒ」

「はい、教官」

千冬が言うと彼女は従った。

「ラウラ・ボーデウィツヒだ。」

「あの・・・以上ですか？」

「以上だ。」

ラウラは一夏の方を見て、彼に近づいた。

「・・・何だ？」

「貴様が・・・」

彼女が手を振り上げようとした途端、もう一人がその手を掴んだ。

「っ！放せ、シュライバー」

「落ち着きなよ。キミがどこで誰と戦おうが構わないけど、ここでは止めてほしいな。ボクが挨拶してないからさ。」

“それにザミエルが黙ってないよ？”

シュライバーがそう言うとラウラは舌打ちしながらも下がった。

「じゃ、僕の番だね。僕はアンナ・シュライバー。聖槍十三騎士
団黒円卓第十二位『フロースヴァイトマルス悪名高き狼』の白騎士」

その言葉に数名のクラスメイトは凍り付く

IS部隊で世界最強と噂される聖槍十三騎士団の事は世界中で有名だからだ。

「ふん、どうやら抑えきれ無かった様だな。」

そう言っつて教室に二人の女性が入って来た。

一夏は彼女等の姿を見た途端、驚愕の表情をした。

「大佐殿！中佐殿！」

ビシッとラウラが敬礼する。

「お前は・・・」

「久しぶりだな。ブリュンヒルデ」

彼女こそドイツ国家代表、第二回モンド・グロツソ優勝者にして織斑千冬のライバル

「エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグだ。ボーデウィツヒの御目付役としてきた。」

「「「「きゃあああああああ！！！」「」「」

途端にクラスが騒ぎ出す・・・が

「黙れ、小娘共！！」

彼女の一喝で終わった。

「大佐・・・」

やれやれと疲れたような表情してもう一人の女性、ベアトリスは言った。

「ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン少佐です。強引な大佐の副官をしていますので苦勞が絶えません。」

ベアトリスがそう言った途端

「ほう・・・どうやら上官に対する敬意と云うものが無い様だな。キルヒアイゼン？」

「ヒイイッ！！？ち、違ってますよ大佐！時たま強引すぎる大佐に苦勞させられているって言うか、常識人の私が苦勞させられているって言うか・・・」

墓穴を掘るベアトリス

「私が非常識だと言いたいのだな。貴様は・・・」

「ち、違いますよ！大佐が恋心を忠誠って言うてるから他の女に獲られるなんて・・・」

・・・あ、死んだ。

テンパって言ったベアトリスの言葉とエレオノーレから立ち昇る黒

い瘴気にクラス全員がそう思った。

「キルヒアイゼエエエエエエエーン!!!!!!!!!!」

「ヒイイイイイイイイイツ!!!!!!!!!!??????」

瞬間、脱兎の如く逃げ出したベアトリスと、悪鬼羅刹の様な形相で追いかけるエレオノーレ

Dead or Aliveな鬼ごっこが始まったのであった。

頭を片手で抑えている千冬

ポカーンとしているクラスメイト達と不思議そうにしているラウラ

「何故、大佐殿はあんなに怒っていたのだろうか？」

「それ、本気で言ってるの？」

ラウラに突っ込むシュライバー。

「皆、気にしないでね？いつもの事だから」

シュライバーはクラスメイトをそう言うのだった。

「あー、んんっ・・・ではHRを終わる。各人はすぐに着替えてグラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！」

準備しようとして、一夏は千冬に呼ばれる。

「織斑、お前はデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。」

「・・・了解」

千冬はさっさと教室を出て行った。

「君が織斑君？初めまして、僕は・・・」

「後にしておけ。時間が無い。急ぐぞ」

「それもそうだね。」

シャルルの手を取り、一夏は走り出す。

“柔らかいな・・・これで男子か・・・無理がありすぎるぞ”

ちらりとシャルルを見ながら、一夏はそう思うのだった。

「シャルル、身構えている・・・」

「え、どうしたの？」

すると

「あ、転校生と織斑君発見!!!」

「金髪で緑の瞳もいいね・・・」

「織斑君と手を繋いでる!!!」

女子生徒達が至る所から出現し、二人を取り囲もうとする。

「くっ、こっちだ。」

横の通路に逃げ込む二人

「逃がすな!!」

「者共!であえ!であえ!」

女子が更に増える。

「捕まってる」

「えっ!?!ちよっ、うわああッ!?!?」

シャルルを抱えると壁を蹴っての移動で包囲網を突破する一夏

何とか更衣室までたどり着くと、急いで着替えを始める。

「急げ、時間は余り無い。」

「う、うん。」

一夏は一気に上着を脱いだ。

すると鍛え上げられ、バランスのとれた無駄の無い肉体が露わとなる。

「わあっ!?!?」

シャルルが変な声を上げるが一夏は気にしない

「……………どうした？」

「いや、なんでもないよ？ちょっとあっち向いてて…」

そう言うシャルルに一夏は

「……………別にお前が女であろうと気にしないが？」

「——ッ！！！！！！？」

その言葉に固まるシャルル

一夏はシャルルの様子を気にもせず続ける。

「お前にも事情がある様だが……………辛いのであれば助けを求めろ。手を差し出せ、少なくとも俺は見捨てない。後、一夏でいい」

そう言うって着替えを続ける。

「……………ありがとう」

シャルルは一言言って着替えるのだった……………

何とかグラウンドに到着した二人の前に千冬が仁王立ちしながら待っていた。

「遅い、もう少し早く来れる様にしろ」

「了解」

「では、今日から格闘訓練及び射撃訓練を実施する。」

「はい。」

皆、本格的な格闘訓練ともあつてか気合が入っている。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど血気盛んな十代女子もいる事だしな・・・鳳、オルコット!!」

「うえっ!？」

「な、何故私まで!？」

「お前等、少しはやる気を出せ。アイツに良い所を見せられるぞ?」

その言葉に二人はやる気を見せる。

「やはりここはイギリス代表候補生である私の出番ですわね!!」

「まあ、代表候補生の实力を見せるいい機会よね!!」

やる気が一気に上がっている。

「二人の相手をするのは――」

するとキィィィンという音と共が聞こえたので上を見ると

「あああああ！ど、退いてください~~~~~！！」

ISを纏った真耶が落下してきている。

そして一夏に激突……せずに一夏がズンッ！！という音と共に真耶をお姫様抱っこでキャッチしていた。

グラウンドの大地がひび割れている事から、相当な衝撃がかかった事が分かる。

「……っ」

「あ、ありがとうございます。……って織斑君大丈夫ですか！？」

キャッチした一夏が僅かに表情を歪めている事に気が付いた真耶が心配そうな声を上げる。

「問題ない、足が痺れただけだ。」

そう言っつて真耶を降ろして、脛脛をマッサージする。

「無茶をするな……」

「問題無い。」

千冬が一夏に声をかけるが気にした様子が無かった。

「さて、お前達二人の相手は山田先生だ。」

「えっ!?!」

「流石に二対一では・・・ちょっと・・・」

少し戸惑ったように言う二人に、千冬は不敵に笑い

「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける。」

そう言われてムツと来たのか、二人は戦闘態勢に入る。

「手加減しませんわ!」

「行くわよ!!!」

「い、行きます!!!」

一夏は目つきが変わった真耶を見て

“・・・戦士の眼をしているな”

普段は頼りない先生であるが、流石はIS学園の教師。

“教師足り得る実力は有ると言う事か・・・”

そう考えていると、千冬がシャルルに真耶の纏っているISの説明をさせていた。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製「ラファール・リヴァイヴ」です。第2世代開発最後の機体ですが、そのスペック

は初期第3世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。

現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七ヶ国でライセンス生産、十二ヶ国で制式採用されています。

特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。

装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で参加サードパーティーが多いことでも知られています」

シャルルが説明していると千冬が説明を止めさせた。

「ああ、もういいぞ。もう終わる。」

上空では爆発が起きて、セシリアと鈴が地面に落ちた。

「くう・・・まさか、この私が・・・」

「あんだねえ！何面白い様に回避先を読まれているのよ！」

「鈴さんこそ、無駄にバカスカと衝撃砲を撃つのがいけないんですわー！」

「それはごっちの台詞よ！！何ですぐビット出すのよ。しかもすぐにエネルギー切れるし！！」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ！！」

「おおおおおおおおお！！」

睨み合っつて文句を言いあう二人を無視して千冬が言う

「さて、これで諸君らにもIS学園教員の実力が理解できただろう。以後は敬意をもって接するように!!」

そしてパンパンと手を叩き続ける。

「専用機持ちは織斑、オルコット、鳳、デュノア、ボーデウィツヒ、シュライバーだな!では六グループに分かれて実習を行う!各グループリーダーは専用機持ちがやる事。良いな?では、別れる。」

「織斑君!!お願いします!!」

一夏の元に女子が殺到したので千冬が一喝してグループ分けをしてくれた。

取り敢えず、マキナ一夏はやるべき事をやったと言っておこう

・・・お姫様抱っつことか、良く出来ましたのキスとか

昼休み、鈴に誘われて屋上で一緒にランチタイムを過ごしている。

そこにはセシリアや鈴、シャルルまでもが居た。

なんやかんや言い合っていたが、時間が無くなると言う事で一緒に食事をする事にした。

「一夏、はい。これ」

「む……これは……」

「時間が無かったから、急いで作った物なだけどさ……」

「一夏は無無を言わずにその弁当を食べる。」

「美味しい、上達したな鈴。いつ嫁に行っても問題ないな。」

「は、はあ！？と、とと当然でしょ！！」

顔を紅くして言う鈴を可愛らしいなと思いながらシャルルの口元にも運ぶ

「ふえ！？い、一夏！？」

「美味しいぞ？」

しどろもどろになりながらも、シャルルは鈴に申し訳なさそうな目を向けてから食べる。

「あ、あ〜ん」

パクンとシャルル食べる。

「う、うん。美味しいね。」

「だろう？」

シャルルは顔を紅くしている。

「む・・・・・・・・・・」

「むうううう~~~~」

「ぐぐぐぐぐ・・・・・・」

箒、セシリア、鈴は女の直感で何かを察知したのだろう。

「一夏さん。私のも召し上がってくださいな」

そう言っつてサンドイッチを取り出したセシリア

受け取りそれを食べる一夏。

「甘い・・・デザートサンドイッチか？」

「えっ！？そんな・・・・」

セシリアも食べてみるが・・・

「甘いですわ・・・・」

どうやら味見をしていなかったらしい

「では、私のも・・・」

箒が弁当箱を差し出してくる。

とりあえず唐揚げを食べてみると

「シュライバー……」

嘗ての同僚がやって来た。

「久しぶりだね……いや、此方では初めましてと言った方が正しいかな？」

「どちらでも構わん。」

二人が話すと黙っていないのが乙女達。

「一夏、この女とはどういう関係だ!？」

「そうよ!何か仲良さ気だし!！」

「まさか……」

口々に言う彼女等にシュライバーはニヤリと笑つと

「そうだなあ……何度やりあつた仲間かな?……色々」

「ビシリッ!！」と空気が凍り付いた。

「待て、何かを勘違いしているぞ。」

「」「死ね!！」」「」

「——ッ!——!？」

嫉妬に駆られた女は時に何物にも勝る。

ボロボロにされた一夏はシュライバーに連れられてある部屋に来ていた。

中に入るとエレオノーレとベアトリスが居た。

「久しぶりだな。マキナ」

「お久しぶりです。マキナ卿」

「ああ・・・久しぶりだな。」

取り敢えず用意された椅子に座る。

「まさか貴様が織斑一夏だとはな・・・」

「ホント、不思議ですよね。」

口々に言う二人に一夏はむっ・・・と唸る。

「まあ、世間話の良いとして、この世界にニートが現れた・・・しかし永劫回帰の世界では無い。ESコアにエイヴィヒカイトがある。貴様はどう考える？」

エレオノーレが一夏・・・マキナに問う

「俺にもわからん。奴がISコアに仕組んだ理由も、乱入した理由もな・・・」

「そうか・・・ハイドリヒ卿は今、亡国企業の調査をしている。」

「亡国企業？」

初めて聞く言葉にマキナが聞き返す。

「ええ、何十年も昔から存在すると言われている犯罪組織です。目的は不明、未だに手がかりも掴めていないのが現状です。」

ベアトリスの説明を聞き、マキナは言う。

「昔の俺達みたいだな」

「ああ・・・だが、奴らの好きにはさせん。その為に此方に来たのだからな。」

「成程、俺か。」

「その通りだ。世界でただ一人の男性操縦者だ。サンプルやISは欲しいだろうよ。」

「・・・男は二人だが？」

その言葉にエレオノーレは本気で言っているのか？と言う目をした。

「まさか、あんな奴が本気で男だとも思っているのか？」

「いや・・・それは無い」

するとベアトリスが資料を開いて読み上げる。

「本名はシャルロット・デュノア、デュノア社社長と妻との子供です。母親が死んでから父方の方に引き取られたようですが、この報告から見ると道具扱いらしいですね。フランス政府も一枚かんでいきますね。失敗してもトカゲの尻尾切りをすれば良いだけですから・・・」

そう言うベアトリスの表情は不愉快そうだった。

「ふん、お前がどうするかは勝手だが、やるからには最後まで面倒を見るよ?」

「ああ・・・情報感謝する。」

そう言って、また後日に話し合いをする約束をしてマキナは一夏に戻る。

「ハイドリヒ、お前はこの世界をどう見る?」

そう呟くと一夏は授業を受けるべく教室にと向かうのだった・・・

第十話（後書き）

マキナ卿に隠し事は通じません。

そして天然女キラーです。

そういえば、今まで書き忘れていましたがEDはアニメ通りですが、走っている一夏が途中でメルクリウスに遮られるとマキナの姿になつて走つてます。そして今度はラインハルトが遮ると一夏に戻つて飛び降りて白式を纏います。

第十一話（前書き）

今回は短めです。

大学の課題が難しいよ〜

これから更新がかなり遅くなると思います。

まあ、ネタが思いついたら更新できますが・・

第十一話

シャルルと一夏はベッドに座っていた。

しかし何も語らずにお互い沈黙したままだった。

「シャルル・・・いや、シャルロットと呼んでおこつか」

ビクリとシャルル・・・否、シャルロットの体が震える。

先に切り出したのは一夏であつた。

「お前の大まかな事情は把握している・・・」

「そつか・・・仕方ないよね・・・僕はもう」お前はどうしたい？」

「え？」

諦めたように言うシャルロットの言葉を遮るように一夏は問う。

「俺はデュノア社のシャルルでは無く、お前自身『シャルロット』に聞いている。」

一夏はシャルロットの眼を見て続ける。

「お前は『シャルル』では無く『シャルロット』だ。誰が如何言おうとも俺が認める。」

「僕の事・・・認めてくれるの・・・？」

シャルロットの声は震えていた。

「お前は誰かはお前が決める・・・やりたい事もな。安心しろ、お前の事は俺が守ってやる。」

シャルロットを抱き寄せながら、一夏は言う。

「ありがとう・・・一夏・・・僕は一夏と一緒に居たい、もっと沢山やりたい事だつてあるよ。だから・・・助けて」

「ああ・・・お前は俺が守る。」

泣きながら一夏に縋るシャルロットを抱きしめたまま、黒騎士は彼女を守り抜くと誓う。

そのまま、シャルロットは彼の胸の中でしばらく泣いていた。

第十一話

「これからの事だが・・・」

「うん・・・」

一夏はシャルロットに告げる。

「まずIS学園に居る二年間は安全だ。刺客も潰せば良い。」

「け、結構物騒だね・・・」

引き攣った表情を浮かべるシャルロットを無視して、一夏は続ける。

「この学園に居る間に対策を考える。最悪の場合は亡命だ。」

「亡命って・・・何処に？」

「聖槍十三騎士団だ。」

その言葉に驚愕するシャルロット

「そんな！？無理だよ！いくらザミエル卿が此処に居ても簡単に僕の事を受け入れるなんて国際問題になるよ！？」

「今更の事だ。お前の情報は彼女等から貰ったのだから・・・」

「ええッ！？一夏って何者なの！？」

「正式には無いが・・・非公式では、聖槍十三騎士団・黒円卓第七位『鋼鉄の腕』ゲッツ・フォン・ヘルリッヒンゲンだ。」

「嘘ッ！！？聖槍十三騎士団で黒円卓の大隊長！！？」

黒円卓は聖槍十三騎士団の幹部であり、世界最強の化け物が居ると言われている。

その中でも双首領の第一位、第十三位、大隊長の第七位、第九位、第十二位は次元が違うと言われている化け物である。

第七位と第十三位は不明もしくは空位と言われている。

「まあ・・・矛盾が生じるが、そういう事だ。」

一夏は懐から一枚の書類を出す。

それは部屋を出るときにシュライバーから渡されたラインハルト直筆の書類であった。

「正式な人員が決まるまで、俺は第七位の席に座る事が許されている。いわば代行扱いだ。」

「でも、IS学園の特記事項・第二十一が・・・」

これこそシャルロットが学園に居る間は大丈夫な理由である。

「問題ない、本人の同意があれば良いのだからな」

「どうして僕の為にここまでしてくれるの？」

シャルロットが不思議に思っていた事だった。

「俺も親に捨てられたからな・・・放っておけなかった・・・」

「あ・・・」

その言葉を聞いて思い至るシャルロット。

「とにかくお前は此处に居ても良い・・・お前が望めば俺は世界も殺す。」

「——ッ!——!」

遠まわしに『お前の為なら世界も敵に回せる』と言われたシャルロットはあふれる涙を抑える事が出来なかった。

そんなシャルロットを一夏は優しく抱きしめるのだった。

“ 僕の存在を、『シャルロット』を必要としてもらえた・・・ ”

シャルロットは一夏に抱きしめられながら歓喜と愛おしさの感情に灼かれるのだった。

すると、部屋の扉がノックされた。

「一夏さん、いらっしやいますか?」

どうやらセシリアがやって来たらしい

「ああ・・・どうした?」

「まだ夕食を食べていらっしやらない様なので、心配になって来てみましたの。」

「そうか、それは済まないな。」

「い、いえ、この位はどうって事ありませんわ。それに一緒に食事をおもひまして・・・」

ふむ、と一夏は考える。

シャルロットをこのままにして置く訳にもいかない・・・

「済まない。シャルが風邪気味だから・・・手が離せん。」

「そうですか・・・」

少し残念そうな声で言うセシリアを可哀想だと思った一夏は彼女の元に向かう。

そして、扉を開けて彼女を労う

「セシリア、わざわざ来てくれて感謝する。済まない・・・」

そう言って彼女の頬にキスをする。

「いえ、デュノアさんにお大事にと伝えてください。それでは・・・」

セシリアは何処か熱っぽい表情で言って、去って行った。

「ふう・・・」

一息つく一夏にシャルロットが言う。

「一夏・・・今、僕の事をシャルって・・・」

「ああ・・・シャルロットでは長くて日常で呼ぶわけにもいかないからな・・・嫌だったか？」

そう一夏が問うとシャルロットは首を横に振って答えた。

「ううん！シャルって呼んでくれていいよ。」

その表情は何処か嬉しそうだった。

それで・・・とシャルは続ける。

「あの・・・オルコットさんにキスしてたよね？」

「ああ・・・外国では挨拶みたいなものだろう？」

「その・・・僕にもして欲しいなあ・・・って・・・あはは・・・」

顔を赤らめて恥ずかしげに言うシャルは一夏の眼にも魅力的に見えた。

「良いぞ。」

一夏はシャルに近づき顔を寄せる。

「ん・・・」

そして彼女は目を瞑って待つ。

「……………」

一夏は一瞬だけ唇にキスしていいかと思っただが、鋼の意志で自制して彼女の額にキスをした。

「…………唇にしてくれないの？」

「…………いいのか？」

「うん。一夏になら…………いいよ？」

少し男としての感情が揺れたが動揺を微塵も見せないで置く

「それは…………待て…………」

「…………一夏の意気地なし。男なら据え膳食べろって言うのが日本の流儀でしょ？」

「間違っているぞ…………シャル…………」

結局観念した一夏がシャルの唇にフレンチキスする事で事態は落ち着いた。

「えへへ…………」

シャルがとっても可愛らしかったとだけ言って置こう…………

一夏はキスする時に一瞬だけ千冬を思い浮かべたのは…………多分、気のせいだろう…………

翌日、一夏は放課後にエレオノーレ達に呼ばれていた。

「ふん、お前も甘くなったものだな……」

「俺は自分の心そのままに生きるだけだ……」

そう言ってエレオノーレに返すマキナ

「ハイドリヒやお前達には感謝している。」

「ふん、私はこの様な形で優秀な兵士が潰れるのが気に食わんだだけ……」

「そう言って、大佐だって気にかけてッ!!?」

バコン!とエレオノーレの拳が余計な事を言う副官の脳天に突き刺さった。

「……お前も甘くなったな」

「この世界に来てから軍人が何の為に有るのか考え直したただけ……」

「そうか……」

「ボーデウィツヒの事も頼む」

「・・・分かった。」

「どちら此方の世界は元居た世界よりは平和的になりやすい様だ。」

第十一話（後書き）

シャルも一夏の心を少しだけ揺らしました。

ちょっととした過去話（前書き）

シュライバー視点の話です。

ちよつとした過去話

やあやあ、みんなの可愛い殺戮系狂人アイドルのシユライバーだよ。

今回はちよつとした過去話を語ってあげるよ。

そう、ザミエルがブリュンヒルデに決闘を挑むきっかけになった事をね……

とは言つても、別にマキナが誘拐された時じゃないよ？

うん、確かにザミエルは不戦勝して屈辱そうにしていたけどね。

本当は不戦勝よりもザミエルを怒らせる事が起きたから試合したんだよねえ……

ブリュンヒルデがドイツ軍に来てから暫く経ったある日、ボクとザミエルとヴァルキュリアは偶然ハイドリヒ卿の邸宅の近くを通りがかつたんだ。

今になって思えば、あれが引き金になったとしか思えないね……

ハイドリヒ卿は二十代に入ってから婚約者だったバビロン……じゃないや、リザだ……

リザと結婚して三つ子が生まれた時までには良かったんだけど、ハイドリヒ卿が仕事に忙しくなつてから、余り家庭に構つてやれなく

て離婚しちゃったんだ。

二人とも望んでいた訳では無くて、政略結婚みたいなものだったしね。

リザはハイドリヒ卿の双子の弟として生まれてきたクリストフと一緒に日本に行った。

確か、そこで孤児院を経営しているって聞いたよ。

黒円卓も援助金を出してあげているし・・・

これもハイドリヒ卿が協力してくれたからなんだよ。

話が逸れたね。

バツイチとなったハイドリヒ卿は邸宅に一人暮らししている筈なんだ。

でもね、裏口からブリュンヒルデが出てきたのはどうしてだろうね？

しかも結構早朝の時間帯で休日だよ？

いやあ・・・あの時のザミエルの顔は凄かったね・・・

「ちゅ、中佐・・・あれって・・・」

「黙れ、キルヒアイゼン」

顔が引きつって殺気がヤバかったね。

止めに帰ろうとするブリュンヒルデを呼び止めたと思ったら、キスしたんだ。

しかも唇に結構、熱烈なのをね……

「かつ……くかつ……カカカツ!!淫売め……殺す!!」

「おおおお落ち着いて下さい中佐!!確かに好きな人を寝取られた気持ちはわかります!」

あゝあゝ……ヴァルキュリアもザミエルを怒らせるのは得意だねえ……

「キイイイルヒアイゼエエエエエン!!!!!!!!!!!!!!」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!??」

くけーーーーーエ!!!!!!!!と叫ばなかっただけマシだったかな?

その日の午後、ザミエルはブリュンヒルデに殴り込みをかけたんだ。

「ブリュンヒルデッ!!」

「その名で呼ぶのは止める……お前らしくない様子で何の用だ?」

「私ともう一度決闘しろッ!!異議は認めん!!」

「は？」

そりゃそうなるよね・・・いきなり決闘しろなんて言われたら

「ふん！貴様に負けっぱなしと言うのは私の矜持が許さんのでな・
・決してお前がハイドリヒ卿の邸宅から出て来た事が許せないなど
と言う訳では無いぞ」

うん、凄いツンデレだね。

こっちに来てからザミエルは少し女らしくなっただよね・・・

ブリュンヒルデは顔を紅くして、口をパクパクさせているし・・・

「場所は黒円卓本部の特殊アリーナ！今日の六時になー！！」

そっいつて出て行くザミエル

「まあ、女の嫉妬は怖いって事で・・・」

「あ、ああ・・・」

呆然とするブリュンヒルデを置いてボクも部屋から出ていく。

そして、二人の戦いは始まったんだ。

『これより、織斑千冬 対 エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグの試合を開始します。』

「クックククツ・・・貴様を叩き潰してやるっ」

「はぁ・・・何とも厄介な事になったな・・・」

やる気満々のザミエルに少し面倒そうにしているブリュンヒルデ、駄目だこりゃ・・・

『試合開始』

直後、ザミエルは最新型のパンツァーファウストとシュマイザーを連射する。

それを剣で切り捨てながら回避するブリュンヒルデ

ザミエルのIS『極大火砲・狩りの魔王』デア・フライシュツェ・ザミエルは高火力による殲滅をコンセプトに開発されたISなんだ。

外見は重装甲だけど、大型のスラスタが仕込んであるから結構な速度なんだよね。

ボクのISもそうだけど・・・

何よりザミエルの機体は既存のISとは比べ物にならない程大容量の武装を量子化しているから、世界一の火力だって言われている。

今まででザミエルの砲撃を完全に回避できたのはブリュンヒルデだけなんだよね・・・

シユマイザーもパンツァー・ファウストも切り捨てられている。

ホント、あれでボク達みたいに聖遺物使ってないなんて人外もいとこだよ・・・

基本的に殆どの銃弾が切り捨てられてるか、回避されているよ・・・

あ、ザミエルが切り札を出す。

Echter als erschwer keiner Eide;

—— 彼ほど真実に誓いを守った者はなく

treuer als er hielt keiner Verräter;

—— 彼ほど誠実に契約を守った者もなく

lautrer als er liebte kein andrer:

—— 彼ほど純粹に人を愛した者はいない

und doch, alle Eide, alle Verräter;

—— だが彼ほど総ての誓いと全ての契約

die treueste Liebe trog keiner Wieder

—— 総ての愛を裏切った者もまたいない

S o - w e r f - i c h d e n B r a n d i n w a l h
a l l s p r a n g e n d e B u r g .

—— 我はこの荘厳なるヴァルハラを燃やし尽くす者となる

B r i a h

—— 創造

M u s p e l l z h e i m r L ? v a t e i n n

—— 焦熱世界・激痛の剣

轟ッ！！と灼熱の世界が展開される。

簡易型のエイヴィヒカイトとはいえ、砲身内部の世界を具現化するとは・・・流石だね。

「全く・・・この空間は訳が分からん」

魔術など知る由も無いブリュンヒルデが理解できるわけが無い。

灼熱の環境にシールドエネルギーが奪われてゆくが、ブリュンヒルデは一気に瞬時加速を使ってザミエルに接近する。

「させるか！！」

ザミエルの背後に連結するように展開される巨大な列車砲

これこそザミエルの切り札、超電磁列車砲

これは相当なエネルギーを食うが故に一発しか使わない。

しかし、威力、弾速共に世界最強の異名を持つ。

凄まじい速度で放たれた砲弾がブリュンヒルデを襲うが・

「ハアツ!!!」

一閃で砲弾を切り伏せた。

ねえ、あれ人間？

すると、ザミエルは珍しく剣を持ってブリュンヒルデに接近していた。

「ッ!」

それでも超人的な反応速度を持って剣を受け流す。

「ふん、前日も切り捨てられたからな・・対策は考えてきたが通用せんとは・・忌々しい」

そこからは剣と剣の勝負になったけど、結局ザミエルは負けちゃった。

あのヴァルキュリアと剣で互角以上に戦えるブリュンヒルデって本当に人間なんだろうか？

今回はここまでにして置くよ。

じゃ、またね~~~~~

第十二話（前書き）

課題に余裕がある程度出てきたので更新できました。

はい、今回も短めです。

では、どうぞ

第十二話

一夏がシャルロットの事をシャルと呼ぶようになってから四日たった。

一夏は箒、セシリア、鈴にシャルを加えた面子でアリーナに来ていた。

いつも通りの訓練内容で

セシリアは集中して創造の維持練習をしているが、創造が上手いはず追尾性も弾幕分散も、かなり雑だった。

鈴も創造の練習をしているが、まだイマイチ感覚が掴めてないのか、発動するのにも一苦労し、やっと展開できたと思ったら糸はすぐに切れた。

箒は二人の相手をして・・・というか、一夏の訓練相手を誰がするかという事で女の争いが発生し共倒れ。

第十二話

現在、三人は疲労でぐったりしていた。

「あ~~~~~しんどい……」

「……………（気絶中）」

「くっう……」

そして、一夏はシャルが纏っている専用機『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』の五十五口径アサルトライフル『ヴェント』を借りていた。

何発か撃って、一夏は前世での射撃訓練を思い出していた。

するとシャルが不思議そうに聞いてきた。

「一夏って何処かで銃を使ったことあるの？」

「何故だ？」

「射撃する構えもしっかりしてるし、命中率も悪くないし、とても初めてには思えない」

確かにその通りだと一夏も思う。

一夏が騎士団第七位の代行に任命されているとはいえ、全くISSに関わることも無い一般人だったのだから。

故に一夏はこう言っ。

「前世で軍人だった。」

「……そ、そう」

反応に困る答えを返されて困惑するシャル。

彼女は冗談だと思っているが、事実である。

二人で練習していると、アリーナにいた他の生徒達のざわめきが聞こえてきた。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

アリーナの入り口を見ると、黒い装甲を纏った転校生ラウラ・ボーデウィツヒの姿があった。

その後ろには真っ白な装甲を纏ったシュライバーの姿もある。

シュライバーの方はその愛らしさと人懐っこさから、クラスメイト達とは仲が良いが、ラウラの方は誰とも関わろうとしない

「おい」

ISの開放回線からラウラの声が飛んで来た。

「何だ？」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え。」

「断る。貴様の気持ちも分かるが、今は戦う時ではない」

一夏は冷静にラウラへ言い返す。

「…貴様がいなければ、教官は決勝を棄権することも無かった。」

「……………」

その言葉に一夏の拳が強く握られる。

「貴様さえいなければ、教官は大会二連覇の偉業を成し得て、現役を引退することも無かった・・・だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

ラウラの怒りを受けて、一夏は怒りを堪えるのでも無く、ただ悲しんでいた。

自分が不甲斐無かった為に誘拐された拳句、姉の名誉を傷つけてしまった。

彼にとっての黒歴史。

嘗ては一騎当千の猛者であった彼が何も出来ない

どうして、こんな時に力が無いのか!?

彼はあの時ほど力を渴望した事は無かった。

あのマキナであった彼が、黒騎士であった彼が、

織斑千冬の胸の中で己の無力さに泣いていたのだから

「だが、今は戦うときでは無い」

そう言って一夏はラウラを見据える。

「ふん…ならば、戦わざるを得ないようにしてやる!!」

ラウラの纏っているIS『シュヴァルツエア・レーゲン』の左肩に搭載された大型カノン砲が火を吹く———事は無かった。

何故なら

「シュライバー…貴様」

「ザミエルに言われていた筈だよ？規律は守れって」

シュライバーの纏う白きIS『暴風纏う破壊獣』の腕がカノン砲の砲身を抑えていた。
リンググレイ・ヴァナルガンド

華奢な外見とは裏腹に凄まじいパワーである。

「チツ、いいだろう。織斑一夏、貴様を潰す機会はまた今度だ。その時までには首を洗って置くが良い」

そついい残して、ラウラはアリーナから去っていった。

「はあ〜〜やれやれだよ…」

「助かった。」

一夏がシュライバーに感謝の言葉を告げる。

「別にいいよ。」

シュライバーは一夏に語る

「あの子は元落ちこぼれだった。それをブリュンヒルデの指導を受けてトップになった…つまりブリュンヒルデは恩師って所だね」

「だからこそ、姉さんの名誉に泥を塗った俺が赦せないか…」

「そついう事、でも今のままだと何時かは壊れるよ。」

“ボクみたいにね…”と最後に付け加えるシュライバー

「ボクの場合は本質を見抜かれて壊れたけど、あの子は中身が無いよ。」

シュライバーは“分かるだろう？”と言う眼で一夏に言う。

「兵器として生まれたけど、結局は人間だ。中身の強さも重要だけど、あの子にはそれが無い」

“だから一度でも敗北すれば壊れるよ”

そう言ってシュライバーはアリーナを去っていった。

「シュライバー、お前も変わったな……」

“あの殺人狂が優しくなるとは……” と思い、ラウラのことも考える。

ラウラ・ボーデウィツヒ、昔のシュライバーにも似ているが

“いや、あれはアイン・ゾーネンキントの方だな……”

城の心臓になり、自分達を打ち破った彼らに諭させられるまで自分が部品であることに人間らしさを持たなかった黄金の息子

ならば、と一夏は思う

自分が兵器としての彼女を殺し、兵器としては無く、一人の人間としての強さを持って生きて欲しい

それが自分の贖罪の一つだと彼は決意するのだった……

それを近くで見ていたシャル

「…一夏」

シャルには一夏が何を考えているのかは分からない。

だが、これだけは言える。

“例え彼がどんな苦難に襲われようとも自分は彼の傍にいて支えて

あげるんだ”

シャルもまた一つの決意をするのだった・・・

その後、一夏はまたエレオノーレに呼ばれていた。

「何の用だ？」

「お前がボーデウィツヒと戦うかもしれんのでな、警告だ。」

「警告だと？」

そつだ。と苦々しい表情をしながら彼女は言う

「我が国に亡国企業と繋がっていきそうな者が居る。」

「それがどうかしたのか？」

「そいつ自身はすでに始末されていた。が、そいつは軍に顔を出していた。」

「つまりISか」

その言葉にコクリと頷くエレオノーレ

「そつだ。今の所、騎士団には何も無い。ならば考えられるのは・・・」

「ボーデウィツヒの黒兎部隊か・・・」

これはまた波乱が有りそつだと一夏は思った。

そこは軍の司令室の様な場所に其れはいた。

「これが粗悪な模造品を生み出すシステムか…ふむ」

その影法師の様な男は司令室のコンピューターに触れると

ドロリ、と水銀の様な何かが機械の隙間から内部へと入り込んでゆく

それを愉快そうに男は晒っていた。

「ふふ…これで模造品ではない違った物になる。」

“精々楽しませてくれよ?…ニグレド”

そう言い残して、その男：メルクリウスは消え去っていった。

後に残ったのは、何の変哲もなさそうな司令室の光景だった。

•
•
だが、確実に水銀はその世界を侵食していた……………

第十二話（後書き）

今回もニートが暗躍中

ラウラってイザークに似た感じがしました。

シュライバーがいい人になっています。

ヒロインズは完全に都合よく創造を使いこなせません

ラウラとの戦いは次かな？

ニートが余計な事したから、どうなる事やら…

閑話 ネタ回（前書き）

やっとISの中古本を買ったし、これで話が長く出来そうだな。

そして早く次の話を書かないと…

閑話 ネタ回

どこか分からない白い空間

そこに数体のSDキャラが集まっていた。

「「「「「う〜〜〜〜〜〜ん」「」「」」」」

そして皆、考え込んでいた。

「一夏の鈍感をどーすんのよ？」

ツインテールのSDキャラ、ニクミーが皆に聞くと、それぞれが口を開く

「うむ、まずはシスコンをどうにかするべきだ。」

「さ、賛成……」

眼帯を付けた銀髪ストレートのSDキャラ、ラオーの発言に

金髪を後ろで束ねた気弱そうなSDキャラ、シャッピーがおおずおおと賛成する。

「ZZZZZZZZ……」

「って、寝てんじゃないわよ！」

ニクミーが金髪縦ロールのSDキャラ、セツシーを叩き起こす。

「ふああ……セツシーは眠いんですの」

「モッピー知ってるよ、一夏はシスコンで裸を見られても動じないって」

黒髪ポニーテールのニヤついたSDキャラ、モッピーが情報提供する。

「それは本当か？」

「本当だよ。初日に篝の裸を見ても動じてなかった。」

「~~~~~む~~~~~」

その言葉に考え込む四体

「と、言っ訳で彼に来てもらったよ」

「~~~~~彼?~~~~~」

モッピーが呼んできたのは、黒髪に無精髭を生やした偉丈夫のSDキャラ、マツキーであった。

「~~~~~帰る~~~~~」

「モッピー知ってるよ。それは質問に答えてからだって」

「知らん。」

マッキー自身は帰ろうとしているが、モッピーが引き留めていた。

「マッキー、教える。奴のシスコンを直すにはどうすればいい？」

「知らん。」

ラオーの問いに素っ気なく返すマッキー

「べ、別にこのままでも……」

「それじゃ、シャルだけに有利でしょ……！」

「流石、妾の子！やる事なす事ビッチ臭い……！」

シャッピーの発言にニクミーとモッピーが食って掛かる。

「う、うええええええ……！ニクミーとモッピーが虐める……！」

「だから知らん。」

「ZZZZZZZZ」

「その程度で無くとは軟弱な……！」

意外と冷たい他のキャラ達

すると、シャッピーを撫でる新しいキャラがいた。

「ほら、大丈夫か？」

「ふえ？」

それは一夏そっくりのSDキャラだった。

「俺はイッチー。よろしくな」

「よ、よろしく」

「モッピー知ってるよ。一夏はイッチーとマツキーの二人で操縦してらって」

本邦初公開、これが織斑一夏の真実だ。

例えば、織斑一夏の目の前に困っている人が居たとする。

どうするか？

操縦席で一夏を操作するマツキーの選択肢：無視

即座に操縦桿を奪い取ったイッチーの選択肢：助ける

結果：語らずに行動で語るハードボイルドの完成

通常生活ではマツキー任せではあるが、事ある毎に操縦桿の奪い合いになる。

「で、一夏のシスコンを直すにはどうすんのよ？」

「それは……」

「…………それは?」「…………」

イッチーの返答に皆が期待する。

「織斑千冬に彼氏ができるまで待つしかない」

「……………使えなッ!」「…………」

イッチーの答えにSDヒロインズは脱力するしかなかった。

「下らん。」

マツキーはそう言って帰ってしまった。

「とにかく、どうすればいいのかイッチーで練習してみては?」

「……………ああ、そうか」「…………」

「へ?」「…………」

セツシーの提案に同意する他のキャラと固まるイッチー

「お、おい、待ってくれ…イッチーは…」

「……………」「…………」

「イッチーを助けて、マツキー!…」

無言で迫ってくるSDヒロインズに追いつめられたイッチーの悲鳴

が響くのだった。

「……だが、断る」

マッキーはそんなイッチーを無言で見捨てるのでした。

閑話 ネタ回（後書き）

マツキーはまんまマキナです。

イッチーもまんま一夏です。

第十三話（前書き）

色々忙しい大学での日々ですが、頑張って完結まで書いて行きます。

と、言っても完結するのは何時になるのやら……

お気に入り登録が300件行ったのは嬉しかったです。

登録してくれた方々には感謝の気持ちで一杯です。

では、十三話どうぞ

第十三話

ある月曜日の事だった・・・

「え、本当ですよ!？」

「嘘じゃないわよね!？」

「本当だよ〜」

「そうそう!この噂、学園中で持ち切りなのよ?月末の学年別ト
ーナメントで優勝したら織斑君と交際できるんだって!」

「ゴクリ…」

その言葉に一夏に恋する乙女の二人は息を呑む

その横では篤が頭を抱えていた。

発端となった篤の今の気持ちを語ると…

“…どうしてこうなった?”

この一言に戻る。

第十三話

「むう……?」

一夏は得体の知れない悪寒に身を震わせた。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

シャルにそう返して教室へ入ると、何やら視線が自分に集中している事に気づく一夏

シュライバーがニヤニヤと面白いモノを見る様に、他の女子達は何故にか顔を紅くしながら見てくる。

“何だこの状況は？”

とりあえず一夏はセシリアと鈴に話しかけようとするが…

「あつ、い、一夏。おはよ。そ、それじゃ、あたし、自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！私も自分の席につきませんと。おほほほほほほ」

明らかに怪しい様子の二人、おまけに他の女子も何処か余所余所しい様子で戻ってゆく。

「・・・・・・・・・・？」

一夏は不思議に思ったが気にせず、いつも通り授業を受けるのだった。

その日の午後、一夏は部屋に押しかけてきた女子たちの誘いを断っていた。

何故かというと、学年別トーナメントでは二人一組のタッグマッチとするという告知がなされた為に、大勢の女子生徒が押しかけてきたのだ。

しかし一夏はシャルの事情も考えて、彼女とペアを組んだと言って断っているのだ。

“ありがとう、一夏”

“別に構わん”

シャルと一夏は目線で会話するのだった。

「で、ロシア代表で暗部の貴様が何のようだ？更識楯無」

「流石は、黒円卓の赤騎士と言った所かしら？」

エレオノーレは副官ベアトリスと共にIS学園生徒会会長の更識楯無と生徒会室にいた。

彼女の傍には生徒会会計の布仏虚もいた。

「下らん戯言は不要だ。単刀直入に話せ」

「直球過ぎます。大佐」

エレオノーレの言い様にベアトリスが突っ込む

しかし楯無は気にした様子も無く

「話が早くて結構よ。貴方に聞きたい事があるの」

「話してみる」

そこで楯無は真剣な声で言う。

「カール・クラフト・メルクリウス」

「――」

その言葉にエレオノーレの眼が僅かに細まる。

「彼も言っていた名前よ」

彼とは間違いなく一夏の事だろう

「私たちでも篠ノ之束の協力者にして、あの科学的に説明出来ない『創造』と呼ばれるシステムの開発者とだけしか分からなかった。さらに本人の素性は不明」

しかも、と楯無はエレオノーレに言う

「それは彼から得た情報で私たちは存在すら知りえなかった。」

そこが問題なのである。

何も知らないはずの一般人だった彼が知っていて、暗部である自分達が知りえないという事が。

「そして私見だけど彼は黒円卓の代行になる以前に、貴方達と黒円卓と繋がりを持っている。それもかなり深いモノをね。」

流石は暗部の人間と言うべきだろう

「……中々の洞察力だな。」

「それでも人を見る目はあるわよ」

ニヤリと笑う楯無をエレオノーレは素直に賞賛した。

そして彼女の様な人間には、ある程度の情報を与えておいた方が余計な事をされないと考え、信頼を得るためにもエレオノーレは話すことにした。

「カール・クラフト・メルクリウス、奴は化け物だ。」

エレオノーレは語る。あの詐欺師の事を

「聖槍十三騎士団副首領・黒円卓第十三位『水銀の王』カール・メルクリウスエルンスト・クラフト。正真正銘の化け物だ。」

「第十三位は空席では無いの？」

「公式ではな。実際には奴が副首領かつ最大の怨敵だ。」

「副首領が最大の怨敵？」

不思議そうに問う楯無

「ああ、黒円卓の同胞は皆、奴の存在を無かった事にした程だ。」

「裏切ったの？」

「違う。入団する際に呪いを受け、そして全ての元凶だった。」

「全ての元凶？」

「その辺りは教えられん」

エレオノーレは深く聞いてこようとする楯無を留めた。

「じゃあ『創造』と呼ばれるアレは一体何かしら？」

楯無がもう一つ気になっている事を聞くと

「詳しい事は分らんが、簡潔に言うならば魔術だ。」

「……………魔術？」

予想外の言葉に呆けてしまい、オウム返しをしてしまう楯無

「まあ、信じられないだろうがな」

「……………いえ、よく考えてみればISもオカルト魔術の様な物だもの」

「確かにな」

量子化などオカルトと大差無い

楯無は更に問う

「貴方程の人間が化け物と言うのだから、カール・クラフトは余程の存在なのね」

「ああ、私でも傷一つ付けられん」

その言葉に驚愕を眼を向ける楯無

「……………そこまでの実力なの？」

「そつだ。核でも死なないな」

「人間じゃないわね」

「当たり前だろう？」

何を今更？と言った表情でエレオノーレは楯無に言うのだった。

舞台裏的一幕、赤騎士は学園最強と密談。

そして、六月の最終週

今日は学年別トーナメントの第一回戦が始まる日だ。

IS学園の混雑具合や慌ただしさは予想以上に凄く、生徒達は様々な仕事に忙殺されていた。

シャルと二人きりで更衣室にいる一夏はモニターからアリーナの観客席の様子を見ていた。

そこには各国政府の関係者、研究所員、企業エージェント等が揃い踏みだった。

しかし一夏が見ているのは彼等などではない。

来賓の中でも一際目立っている存在、多くの中において圧倒的な存在感を放つ者

「彼が……」

「ああ、そうだ。」

隣でシャルが呟き、一夏は頷く

彼ら二人の視線はモニターに写る黄金の君に向けられていた。

「聖槍十三騎士団・黒円卓第一位『愛すべからざる光』メフィストフェレス ラインハルト・ハイドリヒ中将

数十年前のナチスドイツの高官と同姓同名所か、容姿もカリスマも能力も同じ。世界最高の男と称されるのも頷けるよ。」

一度、資料で見た事があるシャルは余りのチート振りに溜息をついていた。

各国の要人と会話をするラインハルトの態度は傲岸不遜である。

彼のカリスマが凄過ぎるのか、各国の要人達も彼の前では萎縮してしまっている。

一夏は傲岸にして謙虚でもある男の事を考えてみる。

この世界で彼と気軽に話せるのは自分の知る限りでは、姉、自分、二トト、東の四人位である。

東は実際に会ったことが無いから予想だが。

すると画面が切り替わって対戦表が表示された。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

そこには

「……………」

「…誰か仕組んだ？」

シャルの呟きに“私は本当に何もしていない”と詐欺師の声が聞こえた気がした。

自分達の相手はラウラ・ボーデウィツヒ、篠ノ之箒のペアだった。

第十三話（後書き）

期待した方、申し訳ありません。

原作読んで、他の二次を読んだら間の話がある程度あったので書かなきゃなと思いました。

次回こそ戦闘です。

第十四話（前書き）

なんか色々と批判やらきてますが……

おかしいな、書き始めの時と今の時の話がずれてきたぞ？

最初の頃は何も考えずに、単にマキナが入ってハードボイルドな性格の一夏を書こうとしてたのに……

何時の間にやら物語に色々関わってた。

まあ、今更ですけど。

今回の戦いは多少戦闘描写が薄い気がする……

第十四話

「夏とラウラ、両者はアリーナで向かい合っている。」

試合が始まるまで

3

「一回戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ。」

2

「そうか……なら」

1

「叩き落とす」

試合開始

第十四話

「——ッ!」

開始直後、一夏はスラスタを最大出力にしてラウラへと突撃する。

「ふん。」

対するラウラも、右手を突きだす。

一夏は、事前^{イグニッションブースト}に得ていた情報からAICが来ると判断し、即座に瞬時加速によって上へ飛んだ。

「何ッ!？」

真正面から突撃してくるかに思えた一夏の唐突な、軌道変更^{に驚く間もなく}

シャルの構えるアサルトカノン『ガラム』が火を噴き、ラウラに襲い掛かる。

「くっ、小癩な手を！」

「させん」

後退して間合いを取ろうとするラウラを真上から急襲する一夏と両手に持ったアサルトライフルとアサルトカノンで突撃するシャル

だが

「私の事も忘れて貰っては困る」

一夏の斬撃が『打鉄』を纏った箒の剣に止められた。

「シャル！」

「うん！」

即座に一夏は罅迫り合いに押し負ける反動を利用してイクニッションブースト瞬時加速

それと同時にシャルもイクニッションブースト瞬時加速を行う。

互いの位置が入れ替わり、一夏はラウラ、シャルは箒の相手になる。

更に入れ替わると同時にシャルの両腕にはショットガン『レイン・オブ・サタデイ』が握られていた。

「ッ!？」

即座に相手が入れ替わったと思えば、目の前には二つの銃口が向けられている事に箒の顔が蒼褪める。

しかし、そこで終わる箒では無い。

「くア!!!」

咄嗟に身を振り、剣を振って片方の銃を弾いたのだ。

結果として大幅にシールドエネルギーが削られたが、これで墜ちる事は避けた。

「まさか、耐えるなんて…流石、一夏の相手をしてきただけ的事はあるね」

「そう易々と負ける訳にはいかないからな……」

シールドエネルギーを大幅に削られていても箒の気迫は衰えてはいない。

あの時、箒が諦めるか、ただの一般の生徒であったなら終わっていたのだ。

もし彼女が専用機持ちであったのなら、非常に厄介だっただろう

「相手が一夏じゃなくてゴメンね。」

「なっ、馬鹿にするな!」

切りかかってくる箒にシャルも片手に近接ブレード『ブレット・スライサー』を展開して応戦する。

シャルは一夏から聞いていた箒の悪い癖を利用したのだ。

一夏曰く『箒は感情面での制御が甘い』

故に挑発には乗りやすく、暴走したり、視野狭窄を引き起こしたりして、攻撃も単調がちになってしまう

そこが箒の致命的な弱点である。

戦場では常に冷静な判断が求められる。

対するシャルは冷静に箒の攻撃を捌きつつ、着実にダメージを与えてゆく。

今の箒は頭に血が上って、冷静な判断を下せない状態ではあるが攻撃自体は激しさを増している。

流石のシャルも気を抜けば、即座に剣撃の嵐に吞まれるだろう。

“ もう少し待っててね、一夏。”

箒の相手に神経をすり減らしながら、ラウラの相手をしている一夏に胸の中で語るシャル

一方の一夏とラウラの戦いも、白熱したものになっていた。

雪片式型一本のみで、隙あらば切りかかる一撃離脱戦法をとる一夏

AICで動きを止めようにも中々捕らえられないラウラ

「ちい、ちよこまかと!!」

六つのワイヤーブレードが一夏に向かって射出され、それぞれが
三次元機動を行いながら襲い掛かる。

「無駄だ」

ワイヤーブレードの隙間を掻い潜ってラウラへと突撃する一夏

AICを発動させようと右手を突き出す彼女へ一撃を加える為

一夏は姉にしか出来ない事を行った。

「ツア!!」

一瞬でラウラからイゲニツションブースト瞬時加速で視界から外れた直後にイゲニツションブースト瞬時加速で彼女の懐に入る。

ダブルイゲニツションブースト『二重瞬時加速』これは理論上できない事も無いが人体にかかる
負荷が半端では無い

これが出るのは世界でも千冬、エレオノーレ、シュライバーの
三人位なものだろう。

「なッ!?!」

ラウラの表情が驚愕に染まる。

白式の単一使用能力：零落白夜を発動させ、一撃を入れた。

逆袈裟切りを受けたラウラだが、やられていなかった。

「カウンターか……」

一夏が一撃を入れる瞬間、ラウラもワイヤーブレードによるカウンターを入れつつ後退していた。

「くっ、貴様ア!!」

激昂したラウラがAICを発動させようとするも

「させないよ!!」

横からの弾幕によって阻まれた。

シャルが一夏の隣に並ぶ

「シャル、箒は？」

「お休み中だよ」

シャルが視線を送った先には、アリーナの隅で悔しそうにしている箒の姿があった。

「流石だな。」

「ありがとう。でも、僕の助けはいらなかったんじゃない？」

「そうかもな」

シャルと共にラウラへと突撃する一夏

「調子に乗るな!!」

プラズマ手刀を展開しながら、AICで動きを止めようとして来るラウラだが、片方を止めようとすれば、片方が阻止してくる為に完全に押されていた。

そして一夏最速の刺突攻撃がラウラの腹に突き刺さった。

「ガハツ!!」

その衝撃で大きく吹き飛ばされるラウラ

“こんな…こんな所で負けるのか、私は…!”

意識が朦朧として行く中でラウラは思った。

“私は負けれない! 負ける訳にはいかない!!”

彼女の脳裏に浮かぶのは、自分の教官であった頃、弟の事を話す
織斑千冬の表情

その表情は自分の憧れであるモノとは全く違った。

“敗北させると決めたのだ！あの男を！！”

ならば、こんな所で負ける訳にはいかない。

あの男を倒す為の力が欲しい

その時、声が聞こえた。

“君は力を求めているのかな？”

“そうだ。”

“何物にも負けぬ力を望むのかな？”

“言うまでもない、力があるのなら、それを得られるのなら、私など…空っぱの私など、何から何までくれてやる。だから、力を…比類なき最強の力を寄こせ！”

“では、差し上げよう”

D a m a g e L e v e l D .

M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .

「『雪片』……」

それを理解した一夏は無言で雪片を中段に構える。

「———！」

次の瞬間、水銀のISが必中の間合いから放った一撃が一夏に襲い掛かった。

「ぐッ———！！！」

雪片式型で防ぐが、その衝撃で雪片式型が弾かれてしまう。

そして敵はそのまま上段の構えへと移る。

「———っ！」

一夏に縦一直線の落とすような鋭い斬撃が襲い掛かる。

「ふん！！！」

だが、一夏もまた英雄^{エインフヘリア}なのだ。

振り下ろされた剣の側面に全力の拳を当てて、軌道を逸らした。

その隙に一気に後退する一夏

すると銀色のISから、あの声が聞こえた。

“成程、単なる劣化品ではこの程度か……”

「カール……クラフト……」

あの万年無表情の一夏の顔が怒りで歪む。

“では、面白いモノへと変えようか”

すると、水銀のISの口が開き、ニタァ…と晒ったかのように思った。

次の瞬間、ラウラの声でソレは詠った。

Nur die Person, die die Bewun-
derung bloß wei?

ただ憧れを知る者だけが

Ich verstehe meine Schmerzen
わたしの苦しみをわかつてくれるのです

Ich verstehe meine Schmerzen
あらゆる喜び、幸せから隔てられ

Es wird von jeder Freude, Glück
k, getrennt

私ははるか遠くの青い空を見つめています

Wie es! Die Person, die ich mi-
ch liebe, und versteht es

ああ！私を愛し、わかつてくれる人は

Ich bin in etwas abgelegener
teile nicht zu wissen

どこかわからない遠い所にいる

Ich verliere das Bewusstsein,
enn ich denke, damit

そう思うと私は気が遠くなり

Es wird eine Brust gerissen

胸をかきむしられるのです

Nur die Person, die die Bewund
erung bloß wei?

ただ憧れを知る者だけが

Ich verstehe meine Schmerzen

わたしの苦しみをわかってくれるのです

Briah

創造

Bewunderung Absolute Macht

憧憬する絶対的な力

轟ッ!!と水銀のISから放たれる禍々しさが増した途端

「ッ!!!?」

一夏は切られていた。

その一撃は『白式』の装甲を容易く切り裂き、一夏の腕の肉も切り裂いていた。

「——一夏ッ!！」

「逃げる、シャル!！」

即座に銃口を敵に向けるシャル

「——え?」

直後、武器ごと体を切られていた。

「シャル!!!」

形振り構わずシャルの名を叫びながら、イケニッションブースト瞬時加速で接近して敵を全力で殴り飛ばした。

一夏はシャルを抱き寄せて、切られた場所の確認をする。

「ば、僕なら大丈夫だよ」

顔を紅くしながらも答えるシャル

『ラファール』の装甲と武装を切り裂いた一撃は絶対防御を貫通する程の物だったが、シャル自身に怪我は無かった。

どうやら武装と装甲を切り裂いたお蔭で刃がシャル自身には僅かに

届いたに過ぎなかったらしい

結果としてシャルのISスーツを切り裂くに留まったのは幸運だった。

少し胸が見えそうな感じで、他人に見られたら性別がバレそうである。

「二人とも、大丈夫か!？」

『打鉄』を纏った筈が一夏とシャルの元にやって来た。

一夏の腕の傷は深いモノでは無いが、血が流れていた。

が、そんなモノ一夏には大して問題では無い

「ああ・・・問題ない。シャルもいけるな？」

「うん、大丈夫だよ。」

シャルをさりげなく後ろに隠して筈に言う一夏

「だが、アレは一体……!？」

「姉さんのデータだ。」

「何だと？」

筈の疑問に答える一夏

「あれは姉さんのデータだ。姉さんだけの物なんだ…それを……」

このような表情を見せる一夏を筭は初めて見た。

それ程までに許せないのである。

水銀のISはアリーナの中央に立ったまま微動だにしない。

「お前はいつも千冬さん千冬さんだな……」

「それだけじゃない、アレに振り回されているラウラも気に入らん。

」

強さとは攻撃力では無い、そんなものは強いとは言わない。ただの暴力なだけだ。

「絶対防御も関係無し……いや、絶対防御をもつてしても、この有様か」

絶対防御を貫通する程の斬撃

あの男が手を加えたのならば不可能では無いのだろう

「だが、どう戦うつもりだ？アレは捉えるのですら困難だぞ」

明らかに織斑千冬のデータを完全に再現する所か、人としての枷を外した状態で再現している。

あれでは取り込まれているラウラも不味い筈だ。

『非常事態発令！非常事態発令！トーナメントの全試合を中止。状況をレベルDと認定、鎮圧のため、教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐ避難すること！繰り返す！』

その放送に一夏は心中で冷淡に告げる。

“アレは教師達では止められん。逆に殺されるぞ”

そう思った途端

凄まじい轟音と共にアリーナに二機のISがやって来た。

「あれは！？」

「まさか！？」

箒とシャルが驚きを隠せない声で呟いた。

「許可を出したか、ハイドリヒ」

水銀のISに立ちふさがるのは

巨大なスラスタが特徴の白いIS『暴風纏う破壊獣』を纏った少女

聖槍十三騎士団・黒円卓第十二位『悪名高き狼』アンナ・シュライ

バー

騎士の様な外見が特徴の空色のIS『戦雷の聖剣』を纏う女性

スルーズ・ワルキューレ

聖槍十三騎士団・黒円卓第五位『ヴァルキュリア戦乙女』ベアトリス・ヴァルトル
ート・フォン・キルヒアイゼン

この二人が水銀に立ち向かう

「クラフト、ボクの姉妹にこんな事して許さないよ」

「全く、貴方は趣味の悪い事ばかりしますね。メルクリウス」

“ふ、君達とは余り語り合うつもりも無いのだがね”

嘲笑するかの様に水銀の男は言う。

「それは此方もですよ!!」

「ラウラを返してもらおうよ!!」

ベアトリスがその手にISの名と同じ剣『スルーズ・ワルキュレ戦雷の聖剣』を展開して
切りかかり、水銀のISと壮絶な剣の戦いが繰り広げられる。

更にそこへとシュライバーが突撃して二丁の拳銃で水銀のISに射
撃するが、銃弾が全て切り落とされてしまう

「くっ、厄介すぎる。」

「流石はブリュンヒルデだね!」

二人とも創造は使えない。

何故なら両者の創造は威力もだが、貫通力が有りすぎて飲み込まれているラウラまでダメージを与えてしまう。

それでは元も子もない。

だからと言ってこのままではラウラの身も危ない

「くっ、どうすれば…」

「ザミエルなら……切り捨てるのかな？」

嘗ての彼女等、主にシュライバーならこのような事を絶対にしなかった筈である。

しかし今のシュライバーが姉妹や仲間と言った存在を大事にしている。

故に全力が出せない。

しかし水銀のISは容赦無く攻撃をし続ける。

「ぐう………！」

「ヴァルキュリア！」

剣を打ち合っていたベアトリスも徐々に押されてきている。

彼女を援護すべく一夏が加わる。

「マキナ卿！」

「手を貸す」

「ありがとうございます！」

流石に二人の剣撃を受け続けるのは厳しいのか水銀のISは防戦一方となっていた。

「僕も手伝うよ」

更にシャルが加わって支援攻撃をする。

水銀のISにベアトリスと一夏が剣を振るい、そこへシュライバーとシャルが援護射撃を浴びせる。

完全に押している状況になっている。

そして一夏がこの恐怖劇に幕を降ろすべく詠う。

—— Tod! Sterben Einzige Gnade!

死よ 死の幕引きこそ唯一の救い

Die erschreckliche Wunde, das Gift, ersterbe,

—— この毒に穢れ蝕まれた心臓が動きを止め

das es zernagt, erstarrte das Herz!

—— 忌まわしき毒も傷も跡形もなく消え去るよつに

Hire bin ich , die of f ne Wund
e hier !

この開いた傷口 癒えぬ病巣を見るがいい

Das mich vergiftet , hier flies
st mein Blut :

滴り落ちる血のしずくを 全身に巡る呪詛の毒を

Heraus die Waffe ! Taucht eure
Schwerte .

武器を執れ 剣を突き刺せ

tief , tief bis ans Heft !
深く 深く 柄まで通れと

Auf ! Ihr Helden :

さあ 騎士達よ

Totet den Sunder mit seiner Qu
al ,

罪人にその苦惱もろとも止めを刺せば

von selbst dann leuchtet euch
wohl der Gral !

至高の光はおのずからその上に照り輝いて降りるだろう

Briah

創造

Mi?garr?r V?l?lunga Saga

単一使用能力：零落白夜を発動した状態で雪片式型が『白式』の腕に融合する。

「終わりだ。」

ベアトリスの剣撃とシュライバーとシャルの弾幕によって動きを封じられた所へ

幕引きの拳が水銀のISへと突き刺さる。

「ギ……………ガ、ガ」

紫電を撒き散らしながら、水銀のISはボロボロと崩壊してゆく。

そして、即座に創造を解除した手で、崩壊してゆく水銀からラウラを引きずり出した。

その瞬間、一夏とラウラの目が合った。金色に輝く彼女の左目と。

それはひどく弱っていた。

まるで捨てられた子犬の様な瞳で、怯えているように、助けを求めようにも思えた。

そんな彼女を一夏は

「もう大丈夫だ……………」

優しく抱きしめ、泣いている幼子にするように優しい言葉をかけるのだった。

ラウラはその言葉と一夏の優しい表情に安らぎを覚えながら意識を失うのだった。

とある学園の一室にはラインハルトがいた。

「ふむ、カールよ。これも卿が組んだ事なのだな」

“ お楽しみいただけたかな？”

「確かに楽しめたと言えば楽しめたのであろうな。だが、それよりも卿に何の目的があつてこの様な事をしているのが気になるのだが？」

黄金の双眸が影法師の男を射抜く

“ 今のところは話せないのだよ、獣殿”

くくく、と晒う水銀の男にラインハルトは言う

「ならば、卿との雌雄を決するのは未だに先と言う事か…」

“ その通り、君も以前よりも劣っている事位は分かるだろう？”

「自覚はしている。」

“では、再び相対する時こそ、私たちの雌雄を決する時だ……”
そう言い残して彼は消えて行った。

それと入れ替わるようにエレオノーレが部屋に入って来た。

「失礼します。ハイドリヒ卿」

黄金の獣が赤騎士に問う

「ザミエル、どうだったか？」

「騒動のドサクサに紛れてハイドリヒ卿暗殺を行おうとしていたのが三名いました。」

「成程、マキナの方には？」

「特にこれと言った動きは無い様子でした。」

成程……とラインハルトは考える。

「亡国企業は現れずか……報告後ご苦労だった。下がって良い」

「ハッ、それでは」

敬礼を返して出て行くエレオノーレ。

ラインハルトは恋人同然の女性の様子を思い出す。

「卿も元気そうぞ何よりだ……ブリュンヒルデ……いや、織斑千冬」

そう呟いたラインハルトの表情は何処か満足げだった……

第十四話（後書き）

ラウラの創造は作詞者：ゲーテ 作曲者：フランツ・シューベルト
「ただ憧れを知る者だけが」です。

第十五話（前書き）

今回は結構エロいです。

ついでに何か上手くキャラが書き切れていない気がします。

では、ごうござい

第十五話

—— 強さとは何なのか？

—— 俺にとっての強さは心の強さだ。自分がどう在りたいかを思う事だ。

—— どう在りたいか？

—— そうだ。力は手段に過ぎん。それを何の為に使うのか理解しているか？とも言えるな。

—— ……理解しているからお前は強いのか？

—— 俺は強くなど無い。ただ自分が護りたい物を護ろうとしているだけだ。

—— 護りたい物……

—— 護るべき物を持つ奴は強い、どこまでも……

—— そうか……

—— だから、お前の事も護ってやる。

その言葉に胸が熱くなるを感じながら彼女の意識は覚醒していった。

第十五話

『トーナメントは事故によって中止となりました。ただし今後の個人データの指標とする為――』

誰かが学食のテレビを消す。

事件の後、教師陣から事情聴取を受けた一夏は現在ラーメンを食べながら、シャルと話していた。

「シャルの言った通りになったか…」

「そうだねえ。あ、一夏、七味取って。」

「ん。」

「ありがとう」

当事者である筈の二人は何時も通りだった。

ただ、一夏は斬られた左腕に包帯が巻いてある。

「ふむ、此処の食堂は料理の質が高くて参考になる。……むむ？」

一夏が周りを見ると、一夏とシャルの食事終わるのを今か今かと待っていた女子達がひどく落胆している。

「…………優勝…………チャンス…………消え…………」

「交際…………無効…………」

「うわああああああああんー!」

バタバタバタ

ツ!と数十名が泣きながら走

り去っていった。

「何だったんだ…………?」

「さあ?」

“そんなに優勝がしたかったのか…………向上心が高いな…………”

と、一夏はある意味正解であるが、的外れでもある事を考えていた。

そして、その場に取り残されていた筈は呆然としており、口から魂が抜けている様な感じだった。

とりあえず一夏は彼女の傍まで寄り、先日の返事をする事にした。

「そういえば先日の約束だが」

ピクッと反応する筈

「付き合っても良いぞ?」

「ほ、本当か！？本当に本当なのか！？」

即座に再起動して一夏に詰め寄る箒。その様子は宝くじに当たった人間の様な感じである。

「ああ、買い物ならな……」

その言葉にビシッ！と箒が固まる。

「か、買い物……なら？」

「ああ……まさかとは思うが、鈴の様にアレも交際の申し込みか？」

「——ッ！……？」

ポヒュ　　ッ！……と箒の顔が真っ赤に染まる。

それはそうだろう。殆ど人が居ないとはいえ、二人きりでも無いのに“あの言葉は告白か？”と聞いているのだから。

そして、それを人前で簡単に認められる程、箒や鈴は素直では無い。

「そ、そそそそそ、それはだな……その……一夏と久しぶりに出かけてみたいと思って……」

嗚呼……悲しきかな、恋する乙女の心

「……そうか、ならば何処へでもついて行こう」

篤がそこで“一生ついて来てくれ!!”とも言えば何か変わったかも知れない。

「では、決まり次第知らせる。」

そう言い残して篤は去って行った。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思う時があるよね」

ハア…と溜息つきながらシャルが篤に同情する眼で呟いた。

「どういう意味だ？」

「さあね。自分で考えてみたら？」

そう言ってシャルは不機嫌そうにぶいっとそっぽを向いてしまった。

“……ふむ、告白かどうかは本人に確認したしな……”

やっぱりイマイチ乙女心を理解していない一夏だった。

そこへ真耶が現れた。

「あ、織斑君にデュノア君。ここに居ましたか。さっきはお疲れ様でした。」

「そちらこそ、ずっと手記で疲れたりは？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生なんですから」

やたらに“先生”の部分を強調して言う真耶に“地味な活動が得意って…自分が地味だって言っている様な物だぞ”と心の中でツッコむ一夏

「……何ですか？」

「別に……」

「そうですね、それよりも朗報です！！」

グツと拳を握りしめて言う真耶のガッツポーズ。

“意外とこの教師、リアクションが大きいな”と思いながら一夏は真耶の言葉に耳を傾ける。

「なんとですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！！」

「それは嬉しい事だ。」

いつもの調子で返す一夏だが、声が嬉しそうである。

ある程度、一夏を理解してきている真耶もそれが分かった。

「じゃあ、早速二人はお風呂にどうぞ。今日の疲れも肩まで浸かって百数えたらスッキリですよ！」

真耶の“二人で”という言葉に一夏は気づいた。

シャルはまだ男子で通している為に別々に入るのもおかしい。

かといって、見るだけなら大丈夫でも一緒に入るのは……

「どうしたんですか？ほらほら、二人とも早く着替えを取りに行ってください。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣所の前で待っていますね。」

真耶はそう言って行ってしまった。

「シャル……」

「う、うん……困った……ね。と、とりあえず……着替えを取りに行こうか」

「ああ……」

疲れた様な声で返事をした一夏は腹を括るしか無かった。

「俺は黒騎士^{ニグレド}。俺は黒田卓第七位『鋼鉄の英雄^{ゲッツ・フォン・ヘルリッヒンゲン}』だ。この程度どつとどつという事は無い”

そう思いながら、着替えを持って大浴場に入る一夏。

“その時の表情はまるで死地に赴く戦士の表情だった”と、後に真耶は語っている。

カポーンとお馴染みの音が聞こえた気がする。

そんな事はどうでも良いとして、一夏は充実した設備の大浴場に満足しながら湯船に浸かっていた。

シャルが先に入っていていいよと一夏に言ったので、それに甘える事にしたのだ。

「ふう……」

漏らした声からは満足げな様子が窺える。

「露天風呂で酒が有れば最高だったのだが……ハア……」

そんな事を言う一夏は正にオッサンそのものだった。

眠そうな表情でいて満足そうに笑みを浮かべながら体をグデーンとさせている一夏。

もし今の一夏を筭や千冬が見たら何と云うだろうか？

するとカラカラカラと脱衣所の戸が開く音がしたが気にも留めなかった。

ピタピタピタと濡れたタイルを歩く足音まで聞こえる。

それでも尚、気にも留めない一夏

普段なら絶対に有り得ない程の事である。

「お、お邪魔します……」

「……………!？」

ジューズィと湯気の向こうから現れた声の主を凝視してから、ボツツとしていた脳が現状を理解するまで数秒の時間を要した。

何とシャルが薄手のスポーツタオル一枚でやって来たのだ。

「何…だと…?」

完全に油断し切っていた所で起きた予想外の事態に流石の一夏も固まってしまう。

そうなるにシャルのボディラインや肌の色まで見えてしまう訳で…

「あ、あんまり見ないで……一夏のえっち」

少し恥ずかしそうな潤んだ眼で、そう言われた一夏の心が揺らいだ。

簡単に言えば萌えた。

「す……スマン」

一夏は人生で初、言葉をどもりながら言った。

見るのは大丈夫な筈なのに、グルン！と即座に向こう側を向いた
一夏

「……何故、ここに？」

「僕が一緒だと……イヤ……？」

「別に嫌では無い」

不安そうに放たれたシャルの言葉を即座に否定する一夏

“まだまだ俺も若いと言う事が……”

自分の事ながら今更気付く一夏—— マキナ

「ねえ……一夏」

「何だ？」

「話があるんだ。大事な事だから、聞いて欲しい」

「分かった……」

シャルにそう言われては一夏も向き合っしが無いと思ったが

「は、恥ずかしいからそのままでもいいよ」

そう言われたのでそのままである。

「その……前に言ってたことなんだけど」

「学園に残るとい話か……」

「うん。それでね……僕」

「？」

「嬉しかった。シャルル・デュノアで無く、シャルロット・デュノアを認めてくれた事が嬉しかった」

「そうか……」

一夏は余計な事を言う事も無く、そう返すだけだった。

すると背中をシャルルが触れたと思ったら、一夏は後ろから抱きしめられた。

「一夏が守ってやるって言うてくれたから、僕はここに居たいって思えるんだよ？」

「お前の力になれたのなら、それで良い」

一夏はぶっきらぼうにそう返した。

ある意味での照れ隠しである。

「ぶふっ、ありがとう一夏。それと二人きりの時はシャルロット

って呼んでほしいな」

「分かった。シャルロット」

「うん。」

とても嬉しそうな様子のシャルロット

そこで一夏ははたと気づいた。

シャルロットは自分を背中から抱きしめている。

お互い湯船に入っているから一糸纏わぬ姿

そして背中に感じる二つの母性の象徴は彼女が無意識に身じろぎする度、ふにょふにょと背中中で形を変えながら、その柔らかさを余すことなく伝えてくる。

更にはその二つの頂点が背中に擦れて、僅かに硬くなっている事まで感じさせてくる。

そしてソレが擦れる度に、気持ちいいのか“んっ……あっ……はあ……”と悩ましげな声まで聞こえてくる。

流石の一夏も雄としての本能が反応しない訳が無い。

一夏は箒を押し倒した時の様に見るだけで大して触れていないのなら問題は無い。

しかし今の場合は違う。

まず萌えさせる事で精神の防壁にヒビを入れる。

そして密着する事で一気に防壁を崩しにかかる。

止めに背中を胸で擦り快樂の声と胸の蕾を感じさせる二重攻撃

触れれば流石の一夏も反応するのに、怒涛のコンボ攻撃まで喰らったマキナ一夏は追いつめられた。

“くっ、落ち着け俺！俺は『鋼鉄の英雄』だ！体は剣で出来ている。体は剣で出来ている。体は剣で出来ている。体は剣で出来ている。………っ、それは『錬鉄の英雄』だ！『錬鉄』では無く『鋼鉄』だ！大体、中の人的にハイドリヒの方だろう！！”

と、いつも通りの表情をしながらも一夏の脳内はこの様な状況であるから、彼がどれだけ焦っているかが分かるだろう。

「とりあえず、この体勢でいられると色々和不味い」

「あっ、うん！そ、そうだね！ほ、僕、先に体と髪を洗っちゃうねー！！」

シャルロットもやっと自分の状態を理解したらしく、慌てて離れると湯船から上がった。

「っ、こっち覗いちゃ駄目だよ？」

「覗かん」

「そ、そうだね。ゴメンね……………覗いても別に僕は……………」

最後にシャルロットが何かブツブツ言った様だが、一夏には聞こえなかった。

一夏は湯船に浸かりながら……………

「……………危なかった。」

心底安心したかの様に呟いた。

一夏のナニが危なかったは読者の判断に任せるとしよう

翌日

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします。」

ペこりとスカート姿のシャルロットが礼をするを一夏は無言で見ている。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。という事です。」

その言葉と共にクラスメイト達が騒ぎ出す。

「え？デュノア君って女？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね！」

「って、織斑君、同室だったから知らないなんて事は……………」

「ちよつと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

クラス中の女子達の視線を受け、一夏はいつも通りのポーカーフ
エイズでやり過ごそうとした。

そこへ一組のドアが轟音と共に開いた。

「一夏アアアアアアアアアアアツ！！！」

そこへ登場したのは鳳鈴音。

その表情は烈火の如く怒りに満ちている。

彼女から放たれる怒気は歴戦の猛者たるマキナ一夏に冷や汗を流さ
せるものであった。

「死ねエエエエエエエエツ！！！！！」

鈴がISアーマーを展開、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワー
で放たれる。

“——これは死んだな”

そう思いながら迫りくる砲撃を前に一夏の脳裏に走馬灯が浮かぶ

不覚にも防御どころか身動き一つ出来なかった一夏
恐るべし、乙女の怒り。

ドドドドドドドオンッ！という着弾音が響き渡った。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！！」

怒りの余り、鈴が肩で息しているのが分かる。

その姿はまるで毛を逆立てて怒る猫のようだ。

“何故、俺は生きている？”

一夏が改めて確認すると、一夏と鈴の間にラウラが割って入り、I
Sを展開させていた。

おそらくA I Cで衝撃砲を相殺したのだろう

「……………」

「助かった。感謝するラウラ……もう直ったのか？早いな」

「コアはかるうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した。」

「そっなの……………むぐっ！！？」

唐突にラウラに胸倉を掴まれ引き寄せられた。と思いきや……………

「アンタねええええつ!!」

再び向けられる衝撃砲

「待て、冤罪だ。」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが!全部!絶対!アンタが悪い!」

「理不尽だ……」

話し合いは通じないと理解した一夏は即座に後ろの出口から撤退しようとする。

その瞬間、一夏の鼻先をレーザーが掠める。

「ッ!?!」

「ああら、一夏さん?何処へ行くんですの?私、お話しなくてはならないことがあります。突然ですが急を要しますの。おほほほほほ……」

一夏が振り向いた視線の先にはISを展開したセシリアの姿が。

“塞がれた!?”

ならば、と窓から脱出すべく駆け出す。

今度は目の前に日本刀が突き立てられた。

「……一夏、貴様どういづつもりか説明してもらおうか？」

「だから冤罪だ。」

「問答無用！！」

斬りかかって来る筈の剣から逃げるべく距離を離すと、誰かにぶつかった。

「むっ？」

「……………」

それはニコニコと笑顔を浮かべたシャルロットだった。

ISを纏ったその手には通称『盾殺し（シールド・ピアース）』と呼ばれる六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』グレー・スケールが

「弁解の余地は？」

「ないよ」

ちらりとシュライバーの方を見ると腹を抱えて大爆笑していた。

そして一夏の視線に気が付くと

“……………逝ってらっしゃい”

親指を立ててグッドラックされた。

“今日が俺の命日か……”

爆音と轟音で黒騎士の意識は刈り取られるのだった……………

黄金の獣ことラインハルト・ハイドリヒは恋人同然の女性、織斑千冬と一緒にいた。

「久しぶりだな。千冬」

「ああ、お前も変わらないな、ラインハルト」

「私は卿とまた逢えた事で嬉しい。」

「ああ、私もだ。」

だが、ラインハルトはすこし残念そうな表情で言う

「しかしだ。卿と語りあいたいのだが時間が足りない」

「お前は組織のトップなのだから仕方ないだろう？」

やや拗ねた様に言うラインハルトを千冬は宥める。

「そつだな。卿が私に聞きたい事はカールの事であろう？」

ラインハルトは千冬を見据えて言う

「ああ、奴の所在は掴んでいるのか？」

「否だ。黒円卓ですらカールの居場所は掴めん。篠ノ之束は分からんが」

「アイツか……聞いては見たが居場所を突き止めた所で何も出来ないと云っていた。」

「つまり篠ノ之束はカールを所在を知っているか？」

「おそろくな」

ふむ、とラインハルトは考え込む。

“黒円卓ですら掴めぬカールの所在を知っているのならば、確実にカールと手を組んでいるか”

ラインハルトは数刻前まで話していた詐欺師の事と兎娘の事を考える。

“ともすれば、篠ノ之束もまた永劫破壊の術式を持っているだろうな”

彼女の保護、捕獲は厳しいものになるだろうと予想できる。

「しかし奴の目的は一体なんだ？」

「さあ、私にも分からん。時が来れば分かるだろうが……」

お互いに今一つの情報が足りなかった。

「そういえばだ。」

「何かね？」

千冬は少し顔を赤くしながら言う。

「その、臨海学校が終わったら休暇が取れるんだが……」

「その時期ならば私も休暇が取れる。」

千冬は嬉しそうに続ける。

「そうか、なら一緒に祭りに行かないか？」

「祭り？」

「ああ、篠ノ之神社で催される御盆祭りだ。日本の祭りは初めてだろっ？」

未知の体験が出来ると聞いてラインハルトは嬉しそうな表情で答えた。

「実に楽しみだ。是非とも行きたい」

「なら良かった。」

デートの約束をしたラインハルトは千冬にキスをして部屋を出て行

く。

「ではな、 『勝利の戦女神』^{ブリュンヒルデ}」

「またな、 『愛すべからざる光』^{メフィストフェレス}」

黒円卓第一位と黒円卓第四位代行はお互いの道を行くのだった……

第十五話（後書き）

ここでビックリ、千冬姉は第四位代行だった！

ついでにオマケとして思いついたの

クラリツサ「日本に行くのならこれをどうぞ」

ラインハルト「ハルフォーフ、これは？」

クラリツサ「日本の誇るべきOTAKU文化です!!」

獣殿鑑賞中

ラインハルト「ふむ、萌えというのは奥が深いものなのだな」

クラリツサ「ええ、これこそ日本の新しい文化です。」

ラインハルト「そうか、卿には感謝する」

クラリツサ「いえ、閣下にそう言って頂けるのであれば十分です」

こうして誤った方向へと突き進む獣殿

ついでに獣殿、ニート、三騎士の五人でハレハレユカイを踊る光景が見えた。

獣殿「ハルヒ ニート」古泉 マキナ「キヨン 少佐」みくる シ
ユライバー」長門

メルクリウス「どこから説明しましょうか？」

胡散臭さがヤバイ

少佐「ミ・ミ・ミラクル ミクルンルン」

物凄い形相で歌ってそう

マキナ「やめとけと言っべきか？」

微妙にあっている気がする

シュライバー「おゝとのない世界にまゝいおりーた I was
snow」

悪くないと思う

獣殿「乾いた心で駆け抜ける」

カツコよさがパネエ！

閑話2（前書き）

とりあえずラウラ戦後の二日後辺りの舞台裏の話です。

本編の方は時間が掛かりそうです。

あと短めです。

では、どじろ

閑話 2

IS学園にある整備室の一角で青い髪に眼鏡を掛けた少女がコンピュータを操作していた。

そこへ

「それが打鉄式型かね？」

「ッ！？誰！？」

少女が振り返った視線の先には影法師の様な男が居た。

「私が誰であるかなど、今はどうでも良い事だ。」

「貴方、何が目的なんですか！？人を呼びますよ！」

少女は得体の知れない男を警戒する。

暗部の家計に生まれ、少なからず厳しい訓練も受けてきた自分が気付けない存在という点から見ても大いに警戒する対象であった。

「君は姉を超えたいと渴望するかね？」

「何を言っ…！？」

「常に完璧な姉と比べられる日常、僅かに一つしか違わないと言
うのに、ここまで差がついている。」

「貴方に何が分かるんですか……」

自身の劣等感を刺激されて、言葉に怒りの感情が籠る。

「さて、ね。君一人で一から開発するなど、それこそ篠ノ之東でも無ければ不可能という物だよ。君の姉もロシアの技術協力があったから出来たのだよ？」

「それでも私は」

彼女は自らの存在価値を証明する為に止める訳にはいかなかった。

だから詐欺師はこの様に唆す。

「ふむ、では微力ながら私が君に力を与えようか」

「力？」

「そうだ。君がこの手を取ると言つのなら、君は姉をも超える力を得るだろう」

そうして差し出された手

「――」

その手を彼女は取った。

「では、君の舞台を楽しみにしよう……更識簪」

そこで彼女の意識は途切れた。

「え？」

気が付けば何も変わらない整備室の一角だった。

どうやら自分は疲れていたのだろうか、眠ってしまった様だ。

「……………夢？」

しかし彼の手を握った感覚はまだ覚えている。

そして作業を再開しようとする端末の画面を彼女が見ると

「完成している……………!？」

打鉄式型は完成していた。

マルチロックオンシステムも完璧に完成しているどころか、装甲の各部に仕込み砲が内蔵されていた。

「何時の間に……………」

一体誰が完成させたのか？

「私?……………それとも」

まさか、あの男が？

閑話2（後書き）

上手く簪のキャラを書く事が出来たかな……？

さて、簪には何時かベイ対シユライバーの様な死闘を繰り広げてもらおうかと思えます。

相手は………分かりそうですけど、秘密って事で

外伝6 もしも一夏が屑兄さんだったら（前書き）

はい、久しぶりに外伝 もしも〜が〜だったらシリーズを書いてみました。

今回はDiesキャラでも蓮きゅんよりも主人公らしい人の出番です。

でも、設定やキャラが上手く書けているかが不安ですので其処ら辺はご容赦ください

トバルカインの設定を生かすためにISの方にオリジナル設定を加えました。

それでも見たい人はどうぞ

外伝6 もしも一夏が屑兄さんだったら

「織斑一夏です。趣味は強いて言うなら料理と剣道です。よろしくお願いします。」

そう言って優しい笑みで挨拶した黒髪の少年、織斑一夏の瞬間、教室はクラスメイト達の黄色い歓声に包まれた。

合

外伝、もしも一夏が・・・シリーズ第六話、屑兄さんの場

「久しぶりだね、篤」

一人目の幼馴染との再会を喜ぶ一夏

「そういえば、去年、全国大会に優勝したんだね。」

「な、何で、そんな事を知っているんだ!？」

「なんでって、僕も出てたから。気付かなかったかな？」

「なっ！？何だと！？」

その事に驚愕する箒

「あの時の箒じゃ気が付かないのも当然だよ……」

全てを見透かした様な目で言う一夏

「そうか……軽蔑したろう？」

自虐的な様子で語る箒

「いや……確かにあの時の剣はただの暴力だった。箒もそこまで追い詰められていたんだよね？」

「一夏……」

当時の自分の心情を理解してくれていた事に箒は嬉しかった。

「それと、久しぶり、大きくなったね、箒。髪型も昔のままだから直に分かったよ」

「よ、よく覚えているものだな……」

箒が恥ずかしそうにポニーテールの先端を弄りながら言った。

「忘れるわけが無いよ。大切な幼馴染の事なんだから」

「ッ！？そ、そうか！！私は大切な人なのか！！そうかそうか……」

…」

『大切な』という言葉に顔を真っ赤にして物凄く嬉しそうな顔をする篤

しかし一夏の表情は何処か暗かった

「篤、君に話さないといけない事がある」

「な、ななな何だ!？」

唐突に真剣な表情で告げる一夏に篤は物凄く慌てた様子で答える。

内心では“もしや告白か!？”などと乙女心が期待で高まっている。

「篤、僕はね……織斑一夏は」

しかし、そこでチャイムが鳴り響いた。

「あ………」

二人で間抜けな声を発してしまう

「……ごめんね。続きは次の機会に話すよ」

「なっ!？」

愕然とする篤

「ほら、遅れたら姉さんに怒られるよ?」

先程と同じ優しげな笑みで手を差し伸べてきた一夏の顔を見て、
は何も言えなくなるのだった。

「ちょっと、よろしくて?」

「ん?なんだい?」

とても爽やかな笑みと共に返事をすると、声の主：セシリア・オル
コットが顔を真っ赤にして固まっていた。

その様子に一夏はジッと彼女の顔を見てからソレを行った。

ピトツ、と一夏はセシリアの額に自分の額をくっ付けた。

「「「「「きゃあああああああ!」「」「」「」

その場にいた女子の歓声が響き渡る。

「うん。顔が紅い様だけど、熱は無いみたいだね。」

「なっ!?!? ななななななななななななななななな!?!?!?!?」

セシリアは顔を真っ赤にしながら口をわなわなと震えさせている。

「ああああああ貴方、一体何を!?!?」

「何って……熱を測っただけだよ？」

きよとんとした顔で答える一夏

その場にいた女子達は一夏の天然タラシがどれ程の物かを思い知った。

「僕は代表になる気はありません」

クラス代表を誰にするかのHRで推薦を受けた一夏は即座に拒否した。

「これは多数決による正式な決定だ。拒否は認めん」

「ですが、僕が代表なるより代表候補生のオルコットさんの方が相応しいと思います。」

「当然ですわね」

一夏の推薦を受け、ふふん と自慢げにするセシリア

「仮に僕がクラス代表になったとしても他のクラス代表が国家代表候補生だったりしても不思議じゃありません、代表候補生相手では実力差が有り過ぎる。オルコットさんは代表候補生です。実力が有り、ISにも慣れている人物の方がクラス代表には相応しいでしょう?。」

「私、織斑君が戦っているトコ見たいな〜」

「私も見た〜い」

そんな様子のクラスメイト達にハア…と溜息をつくると一夏は続けて説明する。

「僕がクラス代表になれば、どっかの刺客やエージェントが僕を確保しようとするかも知れない、その所為で君たちが危険な目に遭うかもしれない。」

君たちの為なんだ。と説得に入る一夏

「だから「納得がいきませんわ!」……………はい?」

セシリアが勢いよく立ち上がって言い放った言葉を理解できず、呆ける一夏

「貴方の想いは立派な事です。ですが、それでは貴方は私たちを信頼していないと言う事ですわ」

確かにその通りである。

皆を巻き込みたくないと言っ言葉は美しい自己犠牲に満ちた言葉に聞こえるだろう

だが、裏を返せば『足手まとい』『役立たず』と言っているのと同じである。

「織斑…………お前は私たち大人を…………自分以外をそんなに信じられな

いのか？」

子供を守るのが大人の役目だ。と言わんばかりに千冬も一夏に言う

「私も強くなるから！」

「私も！！」

「私だって！」

次々とクラスメイト達も言い始めてくる。

「いや、だから、そのですね……」

困った様子の一夏に千冬が言い放つ

「ここはIS学園だ。ならばISで決めた方が良いだろう？」

「お待ちになってください！織斑先生、彼は専用機を持っていません！！」

「安心しろ。織斑には専用機が用意される」

セシリアの言葉に千冬が答える。

どうやら逃げ場は無いらしい

ならばある程度善戦してキリの良い所で負けよう

そう考えた一夏に千冬が言う

「織斑、試験官を秒殺した実力を見せてみる。手を抜いた場合はどうなるか分かっているだろうな？」

抜かりなく逃げ道を塞がれてしまった一夏はorzとなるのだった。

放課後になってから一夏は千冬に呼ばれて寮長室に来ていた。

お互い無言のまま、時間が過ぎて行く

「……………専用機が僕に支給されるのは分かります。でもクラス代表になるのは」

「お前はもう少し他人を頼れ……………」

そう言う千冬表情は複雑そうだった。

「だけど、僕は……………化け物「違う!」……………姉さん」

その言葉を激しく否定しながら千冬は一夏を抱きしめた。

「お前は私の弟だ。化け物なんかじゃない」

「でも僕の体は……………」

「だからどうした？そんな事で私の弟で唯一の家族である事に変わりはない」

それは何処か縋る様な言葉でもあった。

「ありがとう、姉さん……」

一夏は千冬に感謝の言葉を返す事しか出来なかった。

「行くよ、『死を喰らう者』トバルカイン——織斑一夏、推して参る……！」

大剣を掲げて、一夏はセシリアとの決闘に挑む

「一夏、久しぶり」

「うん、久しぶりだね鈴。前より可愛くなつたね」

「ふえッ!!!??」

一夏は相変わらずのタラシであった。

そしてクラス対抗戦

「無人機なら使える。離れてて鈴」

「どごするつもりよ!?!」

大剣はいつの間にか変形して巨大な砲へとなっていた。

そして彼の口からは彼のモノでは無い声で呪いの言葉が紡がれる。

其泣状者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾是以悪神之神如狭蠅皆滿

創造

—— 乃神夜良比爾夜良比賜也

呪いの矢が無人機のISへと突き刺さると同時に腐り墜ちてゆく
「何よ……アレ……」

鈴は震える声で呟く事しか出来なかった

「シャル、君は僕が助ける。」

「一夏……………」

「だから、もつと僕に甘えたっていいんだ」

シャルロットに優しく語りかける一夏

「う……………あああッ！！」

胸の中で泣く彼女に慈愛の表情で抱きしめる一夏

「認めるものか……………貴様が教官の弟であるなど！」

「……………そう」

ラウラの言葉に哀しげに答える一夏

「VTシステム……………君は穢れる必要なんて無い、君の穢れは僕が総て引き受ける。」

「……………創造」

それは彼の創造、名も知られぬ創造

その力は自らを呪いの毒へと変える物

そして呪いを引き受ける事

V Tシステムという呪いは彼によって取り込まれる。

「お前を私の嫁にする！異論は認めん！！」

「へっ！？」

流石のタラシな一夏も固まる。

そして時は流れ、一夏は大切な人達に己の真実を告げる

「僕はね。織斑一夏はもう死んでいるんだ。」

その言葉に全員が凍り付く

「第二回モンド・グロツソの事件だった……姉さんを庇って僕は致命傷を負った。」

「けど今、アンタはここに居るじゃない！自分が幽霊だとしても言うつもり!？」

鈴が慌てたように言う

「続きがあるんだよ……体の殆どを失った僕を抱えた姉さんは無我夢中で助けを求めた。でも手遅れの状態だった……だけど僕を救ってくれたのは束さんだった。」

「姉さんが!？」

「でも、流石の束さんでも都合よく生き返らせる事なんて出来なかった。だけど泣いている姉さんを一人にするなんて出来なかった。だから僕は言ったんだ。“化け物でもいいから姉さんを一人にしないで”ってね。」

その言葉に全員が息を呑んだ。

「結果、僕はISコアに脳の情報を保存し、体を量子化して再構成し、脳に情報を移し替えた。そのISコアは僕の心臓代わりになった。」

“でもね……”と一夏は続ける。

「でも都合良くは言ってくれなかった。再構成した肉体は劣化が早いんだよ。」

「それって……一夏は老化が早くて早死にするって事なの？」

震える声で聞いてくるシャルに一夏は答える。

「老化よりも酷いよ……老化なんてモノじゃない、腐っていくんだ」

「……………ツ！」「」「」「」

その言葉に衝撃を受ける。

「今は束さんの治療のお蔭で後三年は生きられる。その後、何年生きるかは分からないけど……」

三年、それが一夏に残されたタイムリミット

「言っただろう、僕は化け物……いや、動く死体と言った方が正しいかな？」

しかし彼女たちは彼を拒もうとはしない

「だからどうした！？私が好きになったのは紛れも無くお前だ！例え化け物でも死体でも私はお前を愛しているんだ！！」

「死体でも、私が好きになったのはアンタなのよ！！」

「私は貴方だから愛したのですわ！！例えそれが死体であっても、化け物であっても！」

「僕を救ってくれたのは一夏なんだよ！死体だから化け物だから何だ！僕は一夏が好きなんだ！！」

「言っただ筈だぞ、お前は私の嫁で異論は認めんな。今更、その程

度の事で夫婦である事を拒むと思ったのか？」

その言葉に一夏はどれだけ救われたか

「ありがとう、皆。僕も君たちの事が大好きだ。」

穢れて尚、彼は輝きを失う所か輝きを増す。

この話に於ける前世の敵は存在しない

朽ちてゆく彼の体、呪いから逃れる事は出来ないのか

彼を愛する者達は彼を救えないのか？

これは桜井戒が送る第二の人生の物語にして、彼を愛する者達の物語でもある。

「ベアトリス……………？」

外伝6 もしも一夏が屑兄さんだったら（後書き）

うーん、上手く戒兄さんを書けている気がしない……

後半あたりは内容が雑になっていますが、纏めようとしたら長くなりそうなので諦めました。

今回は敢えて敵としてのDiesキャラを出さないでみました。

ちよつとだけ三重人格な織斑一夏です。

とはいっても六割が戒、二割ずつで武蔵と鈴ですが

この話はヒロイン達が一夏を救うために奔走する話になるかな？

第十六話（前書き）

長くなりましたが、やっと書けました。

臨海学校準備の話

では、どうぞ

第十六話

チュンチュンと朝の目覚めを促す様に外ではスズメが鳴いている。

IS学園の中庭では織斑一夏が鍛錬をしていた。

第十六話

「っ！」

轟ッ！と空気が薙ぎ払われる音と共に一夏の拳が振りぬかれる。

「ふッ！！」

更にもう一撃

そこで一旦動作を止めて、傍らに置いてあったタオルで汗を拭く。早朝から鍛錬をしていた様で、汗が結構出るので上半身は裸、下

はジャージの恰好である。

ちなみに早朝である為、一夏しかない筈なのだが、最近は妙に視線を感じる。

“……………敵意が無い様だから放っておいてもいいか”

校舎の窓からハアハアしながら半裸の一夏を見ている女子生徒達を無視して一夏は鍛錬を続けていた。

そこへ

「一夏」

「箒か」

剣道着姿の幼馴染がやって来た。

「どうした？」

一夏が不思議そう彼女を見ると、顔を紅くしながら横に向けていた。

「その……………だな……………お、おはよう」

「ああ、おはよう」

赤くなっている箒と平然としている一夏

両者の状態は対極であった。

「ふ、服を着てくれると助かるんだが……」

「それもそうだな。済まなかった」

一夏は体の汗を拭くと、脱ぎ捨てていたTシャツを着る。

「お前も朝早くから鍛錬しているのか？」

「そうだ。」

その言葉に大きなアドバンテージを得ようと篤が攻めに入る。

「でででで、では私と一緒に鍛錬をしないか？」

その言葉に一夏はふむ、と顎に手を置いて考えると

「良いぞ、剣の相手も必要だ」

脳内で“いよっし！！”とモッピーがガッツポーズをしている。

「では、明日からで良いか？」

「構わん」

見事に上手くいった篤に脳内軍師モッピーが助言を加えた事を言ってみる。

「そ、それでだ。私がお前の事を起こしに行こう」

そう、起こしに行くと言う大義名分があれば一夏の部屋の合鍵を入手する事が可能

最終手段、夜這いを行う事が可能になる。

しかし、そう簡単に物事は上手くいかないのが世の常である。

「いや、自分で起きられる。」

「そ、そうか……………」

流石に合鍵を入手する事は出来なかった。

すると、今度は

「むっ、そこにいたか」

「ラウラか……………」

長い銀髪に眼帯を付けた少女ラウラ・ボーデヴィツヒがやって来た。

「嫁よ。夫婦とは一緒に寝て、一緒に起きる物だ。」

「ああ……………」

ぶつきらぼつな返事を返す一夏

「私を置いて一人で起きるのは酷いじゃないか」

「裸で人のベッドに侵入するもどうかと思うが」

冷静にラウラに言い返す一夏

その発言に箒が詰め寄ってくる。

「一夏！…どういう事だ！この女と同衾したのか！…？」

箒の表情は憤怒に満ちていた。

「ラウラが俺のベッドに侵入していただけだ」

「全裸でか！？」

「ああ」

その答えを聞いた箒が今度はラウラに詰め寄る。

「貴様、どういっつもりだ！？」

「私と一夏は夫婦だ。夫婦が共に寝るのは当然だろう？」

「誰が夫婦だ！そんなの私は認めないぞ！！」

ラウラに食って掛かる箒、対するラウラは全く気にしていない

箒が怒りの余りラウラに真剣を振り下ろそうとするのを一夏が羽交締めにして抑える。

「く、放せ！！一夏！！」

「落ち着け、箒」

箒の気を静める為にも彼女の頬にキスをする。

赤くなって力の抜けた彼女から真剣を取り上げて鞘にしまつと、諭すように言う。

「お前の悪い癖だ。すぐに感情的になって暴力を振るう。」

「う……………」

しゅん、と小さくなる箒

「しかも真剣を人に振り下ろすなど、お前はその手を血で染める気か？」

「……………」

完全にシヨボンとなる箒

その様子はまるで親に怒られた子供の様だった。

はあ、と溜息をつきながらラウラの方を向く一夏

「大丈夫か？」

「ああ、だが不公平だ」

「何がだ？」

「私にもキスをしてくれないのは不公平だ。」

その言葉に篤が再起動する。

「なっ！？貴様は一夏の唇を奪っただろうっ！！」

「ついでに俺の初めてだ」

「わ、私も……初めてだったぞ。うむ……嬉しくは、あるな」

「無視するな！！」

急に頬を染めて一夏にそう言うラウラは可愛かった。

無視された篤は怒っていた。

“頭が痛くなってきた……”

やれやれ……と再び騒ぎだす二人に頭を抱える。

最近、自分の周りから平穩の文字が遠ざかってゆく気がする一夏
だった

キーンコーンカーンコーン、とチャイムが鳴ってSHRが始まる。

珍しく寝坊したシャルを抱えて一夏は猛ダツシュして、二人は間

に合っていた。

その時、シャルはお姫様抱っこされていたので嬉しそうな表情だった。

代わりに篝やセシリアの表情が怖いモノになっていたが一夏は気にしないでした。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前達も扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

授業数自体は少ないが一般教科もIS学園では履修するし、中間テストは無くとも期末テストはある

それで赤点を取るものなら夏休みは連日補修となる。

一夏の成績は基本的に優秀なので問題は無い

「それと来週から始まる郊外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れる事になる。自由時間では羽目を外しすぎない様に」

七月の初頭には臨海学校がある。

そして初日が丸々自由時間なのでクラスの女子達はテンションが上がりっぱなしなのである。

臨海学校について一夏は“大した興味は無い”とセシリアや鈴に言ったら、マシンガンの如き言葉の弾幕で猛注意を受けた。

シュライバーは海を楽しみにしているらしく、浮き輪や熊手などを用意していた。

熊手や刃物は貝とか潮干狩りでもするつもりなのだろうか？

“……………そういえばシュライバーは泳げるのか？”

ふと、一夏がそう思っている内にSHRは終わっていた。

週末の日曜日、天気は快晴である。

来週に迫った臨海学校の準備もあって一夏はシャルと二人で街に繰り出していた。

何故、シャルと一緒になのかと言うと

一夏はシャルが男子として学園に送り込まれてきたの事を思い出し、水着の事を聞き、無いなら一緒に買いに行こうという事になった。

原作の様にただ“付き合ってくれ”という勘違いさせる流れでは無い

「行くぞ、シャル」

「うん。って、えっ!？」

一夏はシャルとはぐれたりしない様に手を握って歩き出すが、シャルが妙な声を上げた。

「どうした？」

「い、いや何でもないよ!大丈夫!」

「そうか」

急に歩き出すシャルにつられて一夏も駅前へと進む。

“柔らかいな……”

握った掌から伝わってくるシャルの手の柔らかさや体温から女であるという事を改めて思う一夏だった。

そして

「 」

駅前へと向かう二人を物陰から見つめる二つの影が。

二人が人ごみに消えると頃合いとばかりに茂みから姿を現す二つ

セシリアと鈴であった。

「……あのさあ」

「……なんですか？」

「……あれ、手え握ってない？」

「……握ってますわね」

セシリアは引き攣った笑顔のまま、持っていたペットボトルを握りつぶす。

「そっか、やっぱりそっか、あたしの見間違いでも無く、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。」

よし、殺そう」

握りしめた鈴の拳は、ISアーマーが既に部分展開されており衝撃砲発射までのタイムラグは約二秒という所である。

二人の瞳からは光、ハイライトが消えていた。

なんとも恐ろしい十代乙女の純情であった。

鳳鈴音、彼女にはヤンデレの属性がついているのかも知れない

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい」

「「!?!」」

いきなり背後から掛けられた声に、驚いて振り返る二人

そこに立っていたのは、先月二人に衝撃を与えた相手ラウラ・ポ
ーデウィツヒであった。

「なっ!?!あ、あんた何時の間に!」

「そう警戒するな、今の所、お前達に危害を加えるつもりは無い
ぞ」

「そうそう」

ひょっこりとラウラの背後からシュライバーまで現れる。

ニコニコと笑顔なシュライバーの登場で毒気を抜かれる二人

ラウラ自身も原作の様に二人をボコって無いので猜疑心は大して
そこまで強くなかった。

「と言う訳で私は一夏を追うので、これで失礼するでしょう」

「それじゃあね」

そのまま一夏の向かった方角へとラウラとシュライバーは行こう
とする。

「ちよっ、ちよっと待ちなさいよ!」

「そ、そうですね！追ってどうしようといいますがの！？」

「決まっているだろう。私達も交ざる。それだけだ。」

「そう言う事」

あっさりと言われて、逆に怯んでしまう二人。こうまでストレートに言われると、何だか悔しいのか、羨ましいのか分からない。

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決。そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡の後、二人の関係がどのような状態にあるのを見極めるべきですわね」

「成程な。では、そうしよう。良いかシュライバー？」

「うん、それはそれでいいんじゃないかな？……面白そうだし」

かくして、よく分からない内におかしな追跡カルテットが結成されたのであった。

「水着売り場はここだ。」

「むっ？」

背中に走った妙な悪寒に呻く一夏

「どうしたの？一夏」

「なんでもない」

二人は現在駅前のショッピングモールの二階にいた。

ここは交通網の中心である為、電車、地下鉄、バス、タクシーと交通に関して何でもござれのそりい踏みである。

そして周囲の地下街すべてと繋がっているショッピングモール『レゾナンス』は食べ物、欧・中・和を問わずに完璧、衣服も量販店から一流ブランドまで網羅している。その他にも各種レジャーはぬかりなく、年齢問わず幅広く対応可能。曰く『ここで無ければ市内のどこにも無い』と言われるほどだ。

一夏は中学生の頃、弾と鈴の三人で放課後に繰り出した事を思い出した。

「あの、一夏はさ、その……………僕の水着姿、見たい？」

「ああ」

「ほ、本当!?!」

ガバツと迫って聞いてくるシャルは迫力があつた。

「本当だ。」

「そうなんだあ…………えへ…………」

幸せそうな表情のシャル

“あんな期待された目で聞かれたら、そう言っしかないだろう……?”

一夏はそう思いながらヘブン状態のシャルを温かい目で見守った。

「じゃあ、僕は水着を選んでくるね」

「ああ」

三十分後にここで会おうと約束し、シャルは上機嫌で女性用水着売り場に向かっていった。

「俺も選ぶか…………」

とりあえず並んでいる水着をしてみる。

金色なブーメラパンツ、所々返り血が付いている様な柄の水着、
虎柄の水着、紅い蜘蛛の模様が入った水着

「奇抜だな…………」

とりあえずシンプルなネイビー色の水着を手取る。

“これでいいか”

そう思ってレジへと向かった。

流石に金のブーメランパンツや返り血柄は選ばなかった。

虎柄は悪くは無かったが……………

先程、別れた場所に向かうと既にシャルが立っていた。

「早いな、もう終わったのか？」

「あ、ううん。ちょっとね、一夏に選んでほしいなって思って」

「そうか、分かった。」

一夏はシャルと一緒に女性用水着売り場に足を踏み入れる。
すると

「そのあなた、その水着、片づけておいて」

「……………自分でやれ」

突然、見ず知らずの女性から言われた。

女尊男卑の風潮が浸透してからと、どの国でも女性優遇制度が設けられた事もあって、こういう事は偶にあるのだ。

「ふうん。そういう事を言うの。自分の立場がよく分かっていないみたいね」

「下らん、ISを使える訳でも無い女が偉そうな事を言うな」

「何ですって!?!」

一夏の尤もな発言に女性はヒートアップして警備員を呼びつとす
る。

「あの、この位でもういいでしょう?彼は僕 私の連れですか
ら」

タイミングを見計らってシャルが口を挟む

「あなたの男なの? 羨くらいしっかりしなさいよね」

まったくこれだから男は…とブツブツ言いながら女は去って行っ
た。

「ごめんね一夏。やな思いさせちゃって」

「別に構わん」

「じゃあ、水着を見てくれるかな?」

「ああ」

一夏はシャルと一緒に試着室へと入る事になった。

「……………」

衣擦れの音が一夏の耳に入ってくる。

一夏自身、自分に違和感を感じていた。

前世の時よりも女性を意識するようになっていた。

“ どういう事だ？ ”

自分が徐々に違う存在になってゆくような気がした一夏は考える事を止めた。

「い、いいよ」

「むう……………」

シャルが着ている水着はセパレートとワンピースの中間の様なデザインで、色は夏を意識した鮮やかなイエローだった。

意外と大胆に胸を強調する様なデザインの水着なのでシャルは恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「……………似合っているぞ」

ぼんと頭に手を置かれてそう言われたシャルは嬉しそうな表情になるのだった。

「じゃ、じゃあ、これにするねっ」

「ああ」

とりあえず一夏は試着室から出て行こうとドアを開けたら

「む？」

「えっ？」

「ええっ？」

自分のクラスの副担任、山田真耶がそこに居た。

彼女の後ろでは千冬が頭を抑えていた。

「何をしている。バカ者が……」

次の瞬間、軽いパニックになった真耶の悲鳴が響いた。

数分後、二人に事情を説明した一夏は現在千冬と二人で水着を選んでいた。

シャルは物陰から出てきた鈴とセシリアに連れて行かれていた。

「どっちの水着が良いと思う？」

彼女が見せてきたのは二つのビキニ

黒い方はスポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出しており

白い方は対極に一切の無駄を省き機能性のみを重視していた

「…………黒だ」

そう言ってから一夏は気づいた

“これを着たら碌でも無い男が寄って来るのでは？”

すると、一夏の内心を読んだかの様に千冬は言う

「安心しろ。私はその辺りに居る男になびく様な女に見えるか？」

“それに私も男がいるからな”

その言葉を理解するのに数秒の時間を要した。

「誰だ？」

再起動した一夏は真剣な表情で千冬に問う

その目は“碌でも無い奴だったら殺す”と語っている。

「まあ…………その…………ラインハルトだ。」

照れながら言った千冬の言葉を聞いた一夏は再びフリーズする。

“アレが義兄？……アレが！？アレが義兄！！？”

脳内でリフレインされる兄と言う言葉

そして

『長い付き合いとなるだろうが頼むぞ、義弟よ』

「
ツ！！！！！！！！？」

何か途轍も無く大変な未来予想図が完成してしまった。

“ラインハルトが碌でも無い男と言う訳では無い、だが何か複雑だ”

むううううううううううと一夏が悩んでいると千冬は

「お前は彼女を作らないのか？」

そう聞いてきた。

そこで一夏は考える。

千冬にはラインハルトという最強の恋人がいる

なら恋人位を作っても良いだろう？

だが、誰を？

そもそも自分に女が必要なのか？

そこで思考の渦に入り込んでしまう

そんな一夏に千冬は苦笑して聞いてくる。

「ラウラなんかはどうだ？色々と問題は有るだろうが、あれで一途な奴だぞ。容姿だって悪くはあるまい」

「一途云々は分からないが、容姿については可愛いと思う」

「まんざらでも無いか？」

千冬は微笑をたたえていた。

「……………分からん。恋と云うものが分からん。」

自分は常に孤高の英雄であった。

故に恋愛感情が理解できない、分からなかった。

「成程、これはラウラと似た様なモノか……………」

孤高であった弊害とでも言うべきか

それに気づいた千冬はこう言うのだった。

「お前が隣に立って共に居て欲しいと思える奴がいたのなら、それがお前にとっての恋なんじゃないか？」

「共に居て欲しい奴か……………」

その言葉が一夏の心に何らかの影響を与えたのか、一夏は何かを探し求める様な目をするのだった……………」

“か、か、可愛い……………？私が可愛い……………可愛い……………”

シュライバーは既にどっかへ消えており

帰ろうとしていたラウラは一夏の言葉を聞いて、顔を紅くして脳内で一夏の言葉をリフレインしていた。

その後、彼女はキョロキョロと辺りを見回してからISのプライベート・チャンネルを開いた。

同時刻、ドイツ国内軍施設。

そこでは現在、IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』

通称『黒ウサギ隊』

「この隊長がラウラである。」

「何をしている！現時点で三十七秒の遅れだ！急げ！」

怒号を飛ばしているのは部隊最年長で『頼れるお姉さま』である副隊長のクラリッサ・ハルフォーフであった。

彼女の専用機『シユヴァルツェア・ツヴァイク』に緊急暗号通信と同義のプライベート・チャンネルが届いた。

「受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です。」

『わ、私だ』

本来なら名前と階級を言わなければいけないのだが、

向こうの声が妙に落ち着きが無い為、クラリッサは怪訝そうな顔をする。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」

『あ、ああ………とても、重大な問題が発生している………』

その様子からただ事では無いと思ったクラリッサは、訓練中の隊員へとハンドサインで『訓練中止・緊急招集』を伝える。

「部隊を向かわせますか？」

『い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、無い………』

「では？」

『クラリツサ。その、だな。わ、わ、私は、可愛い……らしい、ぞ』
「はい？」

理解できずに聞き返すクラリツサ

『い、い、一夏が、そう、言っていて、だな……』

「ああ、織斑教官の弟で、ストイックで、隊長が好意を寄せているという彼ですか」

ついでに、この部隊でラウラは人間関係に多大な問題を抱えていたのだが、VT事件の直後に好きな男が出来たとクラリツサに相談を持ちかけた時から総てのわだかまりが消えていた。

『う、うむ、それだ。今、水着売場なのだが……』

「ほう、水着！そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着を？」

『う、うん？学校指定の水着だが』

「何を馬鹿な事を！」

『！？』

くわあ！！と目を見開いて言うクラリツサの言葉の迫力にビククリするラウラ

「確か、IS学園は旧型のスクール水着でしたね。それも悪くない。悪くは無いですよ！男子が少なからず持つというマニア心をくすぐるでしょう。だが、しかし！それでは」

『そ、それでは……？』

ゴクリとラウラが唾を飲む

「色物の域を出ない！」

『なッ……！？』

「隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡というタイプではありません。ですが！そこで際物に逃げる様では『気になるアイツ』から前には進まないのです……！」

『な、ならば……どうする？』

「フッ。私に秘策があります」

クラリッサの目がキュピーンと光った。

おまけ

一夏は目の前にある水着を見て絶句していた。

「これは……裸より恥ずかしいだろう……」

一夏の前にある水着

それはブラジル水着、スリングショット、紐ビキニとか過激なデザインの水着だった。

「……………」

もし、これを千冬が着たら、いや、体のスタイルが凄まじく、巨乳のセシリア、箒、真耶が着たら……………」

「凄く……………一撃必殺です」

第十六話（後書き）

一夏、恋についてを考え、姉離れの始まりの話でした

第十七話（前書き）

今回は臨海学校、海水浴編です。

今回はセシリアがヒロイです。

では、ごき

第十七話

十代、ティーンズ、思春期というモノは面倒である。

体の成長に心がついてこないで何かを持って余したりする。

性欲というモノも男である以上、早期に活発化してくる。

本人の意志とは関係なく、様々な感情や欲求が溢れかえる事で非常に面倒な時期だ。

前世がミハエル・ヴィットマンである織斑一夏もそうである。

彼の場合、精神の方が体より大人である。

が、体は性欲旺盛な若者

別に彼が不能だったり同性愛者という訳では無い

一応、彼にも性欲はある。

だが、それを闘争本能や強さへの欲求に変換している。

でも性欲が無くなったら子孫とか残せないのも完全では無い

第十七話

臨海学校初日、天候に恵まれ快晴。

バスに乗って旅館『花月荘』に到着した一夏は旅館の女将さんの若々しさに驚いていた。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清州景子です」

三十代位には思えない程、若々しいのに大人の気品を併せ持っている。

“彼女の様な女性を良い女というのだろうか”

そう思う一夏であった。

真耶の誘導に従い、部屋へと向かった一夏だが

彼の部屋は千冬と同室であった。

だが一夏は気にせず、その場を後にした。

「……………」

一夏は箒は水着に着替えようと、更衣室のある旅館の別館に向かおうとして

地面から生えているウサミミを見つけた。

『引っ張ってください』という張り紙までしてある。

「これは、アレか？」

「知らん。私に聞くな。関係ない。」

“この反応は篠ノ之束にしか有り得んな”

一夏は無言でウサミミを引き抜く

『ハズレ』

「…さて、行くか」

そう言った途端

キイイイイイイイイイイイイイイイイッ!!

と何かが高速で向かって来る音を二人は聞いた。

「むッ!?!」

次の瞬間、轟音と共に目の前にソレは突き刺さった。

「に、にんじん……？」

後ろからやって来たセシリアがそう漏らす。

今、彼らの目の前に刺さっているのはイラストチックで巨大なニンジンである。

「あつはつはつ！！引つかかったね、いっくん！！」

「やはり貴方が、篠ノ之束」

パカッと二つに分かれたニンジンから現れたのは童話『不思議の国のアリス』でアリスが着ている様な青と白のワンピース姿の女性

彼女は一夏からウサミミを受け取ると頭に装着した。

彼女こそISを生み出した天才にして天災の科学者、篠ノ之束である。

「お久しぶりです。束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいね！。所でいっくん。篝ちゃんはどこかな？さつきまで一緒だったよね？」

「ああ、貴方を避けて逃げたか？」

包み隠さず、ストレートに事実を言う

「むうう、篝ちゃん冷たいなあ。まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機で直ぐに見つかるけどね！じゃあねいっくん。また後でね」

すったったーと走り去ってしまっ束。

“インドア系の科学者の癖に何故あんなに早い？”

そんな事を束に聞けば“篝ちゃんへの愛だよ！！”と力説されるのは分かってるので聞かないが……

篝ちゃん探知機なるモノはウサミミだった。

「い、一夏さん？今の方は一体……」

呆気にとられていたセシリアが再起動して一夏にそう聞いてくる。

「篠ノ之束、知ってるだろう？」

「え……？ええええっ！？い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「ああ、行方不明というより逃亡中という表現が正しいが」

“やれやれ……あの人は相変わらずだな”

昔も今も全く変わっていない事に溜息をつきながら一夏はセシリアに言う

「今は彼女の事は後でいい。俺は海へ行くが、セシリアは？」

「え、ええ、私も海へ。そ、そこですね」

咳払いしてからセシリアは一夏に言う

「せ、背中サンオイルを塗れませんから、一夏さんをお願いしたいんですけど……よろしくて?」

「俺でいいなら構わん。」

「ほ、本当ですね!? 後からやっぱり無しは認めませんわよ!?!」

「ああ、安心しろ」

何か子供が“約束だよ!? 絶対に約束だよ!?”と言っている様に感じる一夏

「では、先に行ってますわ!一夏さん」

機嫌よさ気に軽快かつ迅速な足取りでセシリアは別館へと走り出してゆくのだった。

「……………友人に頼めばいい事のに、わざわざ男である俺に頼むか」

“もし彼女が俺に惚れているとしても、俺が惚れているかは別だが……………”

セシリア・オルコット、彼女について考えながら一夏は歩き出す。

“あのクラス代表決定戦の後、彼女は俺に好意的になった”

考えて見れば、あの時から惚れたのだろうか

彼女の境遇はある程度、彼女と黒円卓からの情報で知っている。

父親は名家への入り婿で母親はいくつもの会社を経営していた才媛

そんな母親に引け目を感じていたらしく、女尊男卑の社会になつてからは更に弱くなっていったらしい

その事から彼女は男に対する評価が低くなっていったのだろうか

更に両親が鉄道の事故で亡くなり、遺された財産を狙って汚い大人がやって来た。

彼女の他者を見下す様な性格は幼かった自身を守る為の鎧なのだろう

つまりマトモな男がいない中で、織斑一夏という誇りを失っていない男が現れたものだから、惚れたのだろうか

簡単に言うと、小さいころから醜く情けないブ男しか見て来なかった為、誇りを忘れない男への耐性が低かった。

自分は彼女にとって初めての誇りを持った男という訳だ。

卵から孵った雛が最初に見た存在を親と思う原理と同じ様なモノだろう

たまたま自分が初めてだったに過ぎない

世の中には誇りを失っていない男がまだまだいる。

“惚れられた男である以上は、何時かは答えを出す必要がある”

“俺に惚れているのならば……だがな”と付け足すと一夏は男子用更衣室に入るのだった。

ただ、普段は別々にいる筈のセシリアの両親はどうして、その時ばかり二人一緒に居たのか？

そして、その事故を起こした鉄道はブレーキが掛かった形跡が無かった。

事故原因はブレーキの故障という訳だが……どうも怪し過ぎる。

調べようが無いので考えるのを止めた。

夏の日差しによって焦熱世界の如き熱さに感じられる砂浜を歩いて、波打ち際へ向かう

ビーチには既に何人もの女子生徒が溢れていて、肌を焼いている者、ビーチバレーをしている者、泳いでいる者など様々だ。

「ちて……」

一夏は準備運動を始める。

海で泳ぐなど随分と久しぶりであり、足がつって溺れるという無様な醜態など晒したくは無いからである。

決して人工呼吸とかで血を見る予感がしたからでは無い

「い、ち、か~~~~~~~~~~~~つ!~!」

「ツ!~?」

いきなり上半身に衝撃を受けて多少よろめいた一夏だが直に持ち直した。

「あんた真面目ねえ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら終わってたんなら泳ぐわよ。」

いきなり一夏に飛び乗ってきたのは鈴であった。

“そういえば昔から水着になると飛び乗ってきたな”

“猫みたいな奴だ” と思いながら彼女を支える一夏

彼女が着ている水着はスポーティーなタンキニタイプ。オレンジと白のストライプで臍が出ている。

彼女の小柄でしなやかな肢体からは生命の活力というモノが感じられ、健康的な印象が強調されていた。

「準備体操をしておかないと溺れるぞ?」

「あたしが濡れた事なんかないわよ。前世は人魚ね。多分」

「そうか……………」

とりあえず鈴を肩車したまま歩き出す。

「おー高い高い。遠くまで良く見えていいわ。」

一夏の身長は180クラスで高校一年生にして、かなりの高身長である。

すると……………」

「あつ、あつ、ああつ!?!な、何してますの!?!」

水着に着替えたセシリアがやって来た。

彼女の水着は鮮やかなブルーのビキニ。腰に巻かれたパレオが優雅さを醸し出しており、ビキニによって強調された胸、ミルクの様な北欧系の白い肌のむっちりとした肢体

その総てが合わさって扇情的な雰囲気醸し出しながらも優雅さを忘れない美しさを誇っていた。

「何って、肩車。あるいは移動監視塔ごっこ」

「とにかく!鈴さんはそこから降りてください!」

一夏にべったりくっ付いている鈴にセシリアが迫る。

「ヤダ」

「な、なにを子供みたいな事を言って……！」

セシリアがザクツッ！と砂浜にパラソルを刺す。

「あ！織斑君が肩車してる！」

「ええっ！いいなあっ！いいなあっ！」

「きつと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！」

騒ぎを聞きつけた女子達が一夏に肩車してもらおうと詰めかけてくる。

「鈴、お前はジェットコースターとか好きだったな」

「え？うん、そうだけど……」

唐突な質問に？マークを浮かべる鈴

そんな彼女をガシッと掴む一夏

「昔もやった事あるだろうっ？」

「ま、まさか……」

鈴の顔が引き攣る

彼女の腰をガツチリ固定して構え

目の前に広がる大海原へと

「逝つてこい」

投げた

「んにゃああああああああああああああああああアアアアアアアツ!!!!!!??」

そのまま人間砲弾と化した鈴は数十メートル先の海面にドツパアアアアアアアツ!!と着水した。

目の前で展開された漫画の様な事に啞然とする一同

「誰か挑戦してみるか？」

「「「「「いえ、結構です!!」「」「」「」

「そうか……………」

ちよっぴり残念そうな一夏だった。

「では、お願いしますわね」

「任せる」

しゅるりとパレオを脱ぐセシリア。

「背中だな？」

「い、一夏さんがされたいのでしたら、前も結構ですわよ？」

その言葉に“自分に好意があるんだろうな”と薄々感じる一夏

「流石にそれは問題になる。」

「でしたら」

セシリアは首の後ろで結んでいたブラの紐を解くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる。

「さ、さあ、どござっ？」

「ああ……」

紐解いた水着はシートと体に挟まれている状態でセシリアの無防備な背中を一夏に見せている。

体に漬されてむにゅりと形を歪めた乳房が脇の下から見えて、相当な色気を出していた。

うつ伏せになっている所為か、胸と同じく発育の良い尻の方もムッチリとしてエロい

パレオに隠されていたが、水着の下の方は露出度が高い。

そこからすらりと伸びる脚線美も、また素晴らしい

男ならかなりムラツとしても仕方無い光景だが一夏は平然としていた。

“久しぶりの姉さんの水着姿はどれ程、魅力的になっているのだろうか？”

こんな状態のセシリアを目の前にしてシスコンな事を考えている事自体、結構失礼である。

シスコン卒業の一步は踏み出しているも、完全な卒業までは遠い様だ。

「……………塗るぞ」

ちゃんとサンオイルを手で少し温めてから彼女の背中に塗り始める一夏

これも姉の為にシスコンが習得したスキルである。

「あ、あんツ……………い、一夏さん上手ですわ」

サンオイルと塗りながらマッサージを行う一夏

「それなりに資格は持っているからな（姉の為）」

脇の近くや、はみ出ている乳房の近くまでも確りと丁寧且つ丹念

にマッサージしてゆく

「あ、ああアん？……あッ？……んああ……？」

凄くエロい嬌声を上げながら痙攣した様にピクンピクンと体を震わせるセシリア

口元からは涎が少し垂れている。

しかし一夏は何の反応も示さない

別にある意味兄弟の男がツンデレに言った「お前じゃ、勃たない」という訳では無い

とにかく真剣にマッサージをしているのだ。

その顔を見れば分かるだろう

ただ、その技術が間違った方向のマッサージ技術な気がするのには気のせいだろうか？

数分後

「ハア…ハア……んッ？」

顔を真っ赤にして荒く呼吸をしながら、ぐったりとシートに寝そべるセシリアと

「大丈夫か？」

何でマッサージしただけでこうなるんだ？と首を傾げつつセシリアの心配をする一夏がいた。

すると

「い~~~~ち~~~~か~~~~」

一夏が振り向いた先には昆布とワカメのお化けが！！

「何、本気で人をブツ飛ばしてくれてんのよ！！」

海草お化け、もとい鈴が涙目ながら怒り顔で海草を一夏に叩き付けた。

「…………味噌汁に使えるそうだな」

「他に言う事があんだろうが！！」

ツインテールをピーンと逆立てながら怒る鈴

でも涙目

「済まん、手加減し忘れた。」

「もう…………じゃあ、向こうのブイまで競争ね。後、勝っても負けてもアンタは駅前の『@クルーズ』でパフェ奢んなさい」

「…………良いだろう…………セシリア、後でな」

「ええ、私はもう少しこうしてますわ……ん？」

セシリアをその場に残し、やれやれ…と娘の我儘に付き合う又は娘の頼みを聞き入れる親の様な感じで鈴について行く一夏だった。

途中で足がつった鈴を一夏が背負って魚雷の様な勢いで水中を突き進んだりした後、一夏は一休みしていた。

「あ、一夏。ここにいたんだ。」

ふと、声に呼ばれ振り向いた一夏の視線の先には水着を着たシャルと

「海草の次はバスタオルか……」

バスタオルお化けがいた。

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める」

“この声はラウラか”

いつも自身に満ちたラウラにしては、随分と弱弱しい声に聞こえた。

シャルはそんなラウラを説得しようとしていた。

「ほーら、せつかく水着に着替えたんだから一夏に見て貰わないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「ふうん？ だったら僕だけ海で一夏と遊んじゃうけど、いいのかなあ？」

「そ、それはダメだ！ わ、私も行くぞ！」

シャルの言葉に焦るラウラ

「その恰好のまんまで？」

「ぬ、脱げばいいのだろう！ 脱げば！ ……ええい！！」

ばばッとバスタオルをかなぐり捨て、水着姿のラウラが陽光の下に現れる。

その水着姿というのが

「わ、笑いたければ笑うがいい……！！」

黒の水着で、ふんだんにレースをあしらってある。

一見すると大人の下着にも見える。

更にいつも飾り気のない伸ばしたままの髪も左右で一对のアップテールになっている。

鈴とかぶっている気もするが、ショートツインテールとロングツイ

ンテールという事で分ければ良い

「おかしな所なんて無いよね、一夏？」

「ああ、似合っていて可愛らしいぞ」

「かつ、かわいっ！！？」

ぶしゅ〜と顔を真っ赤にして逃げ出すラウラ

「あ〜あ〜照れ屋だね。ラウラは」

「そうだな」

そんなラウラを一夏は微笑ましく思うのだった。

ドゴオンッ！！と砲撃音が鳴り響く

放たれた砲弾は空気の壁を貫きながら地へと向かう

しかし、その砲弾は一人の女性によって打ち返されてしまう

「がはッ！！」

砲弾は一夏の顔を正確に捉え、そのまま頭を持っていかれそうになるのを踏ん張って耐える一夏

砂浜には一夏のいた場所から数メートルの線が二本出来ていた。

「流石だな、姉さん」

織斑千冬のアタックを受けた一夏の感想である。

織斑姉弟がバレーを行えば必ず人は吹っ飛ぶ

明らかに常識外れな光景である。

一夏はバレーボールの後、千冬と居た。

シャルはラウラを探しに行き、セシリアは体を焼いて、鈴は泳いでいる。

「似合っているか？」

そう聞いてきた千冬に一夏は素直に答えた。

「似合っている。綺麗だ」

「そうか、お前が選んだんだ。当然だろう？」

千冬に言葉に嬉しくなる一夏

その時

「全く……海水浴などと……」

「大佐あ、こんな時位は和やかに行きましようよ」

そんな風にぶつくさ言っただけで来たのは

競泳用の水着を着たエレオノーレと白いビキニ姿のベアトリスだった。

「お前達まで……珍しいな」

普段から軍服姿のエレオノーレの水着姿は新鮮で、一夏も思わずジツと見てしまう程であった。

意外と彼女のスタイルも良く、普段は軍服の下に隠されている肌が露わになっていた。

「何だ？私に劣情でも抱いたなら覚悟しておけ」

「お前が軍服以外の恰好をするのは珍しいな」

「ふん、海で一人だけ軍服姿で居ても無駄に目立つだけだからな……」

堅物なエレオノーレは余り乗り気では無い様だ。

「大佐も、ビキニを着ても良いと思いますけど……」

とにかく険悪な雰囲気だけは避けようとするベアトリス

「下らん。その様な下劣な男に見せびらかす恰好など不要だ。」

そう言っつてジロリと干冬を見るエレオノーレ

「見せつける相手を取られたのは分かりますけど……」

あ、また地雷を踏みやがりました。

「ほほう………キルヒアイゼン、どうやら無駄に体力が有り余っている様だな。どれ貴様にはISを背負つて遠泳してして貰おうか」

そう言っつエレオノーレの表情はまるで阿修羅の様だった。

「ヒイイイイイイツ！！！？それ沈んじやいますよー！！」

「喧しい！さっさとついて来んか！ー！」

「嫌アアアアアアアアツ！！！！！？？」

るるると何時もの如くベアトリスは怒りのエレオノーレに引きずられてゆくのだった。

すると今度は

「マキナ~~~~~」

後ろからかかった声に振り向いた一夏の目に飛び込んできたのは

「どっつ？マキナ、似合っつ？」

白スク水を着たシュライバーだった……………

「ご丁寧に胸元のワッペンには平仮名で『しゅらいばー』と書かれています。」

「……………」

マニアックな格好に呆然としてしまう一夏

「ボクの水着姿に見惚れた？」

「そんな訳無いだろう」

素っ気なく言い返す一夏

「その水着だと透けるぞ？」

その発言にシュライバーは胸元を抑えながら意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「そんな事を考えていたの？いや〜ん、マキナのえっちゃん」

「……………」

イラッと来たらしい一夏は無言で拳を振り上げようとする。

それを察したシュライバーは即座に海の方へと逃げていた。

「一夏、そろそろ昼食の時間だ。いくぞ」

「分かった」

「夏は千冬と共に昼食を食べに旅館へと戻って行くのだった。

“ そっといえは箸の姿が無かったな…… ”

第十七話（後書き）

シユライバーは少佐にエロ水着を着せようとしたが、怒られました。

マキナは恋人ではなく戦友を求める事になるのかな……？

それ以前にヒロインの恋が叶う可能性が低いぞ、これは……

いや、性欲処理の名目なら……無理だな

さて神父やリザさんの出番はもう少し先か……

ついでに白式の二次移行形態はDiesからでは無い名前です。

シャルの創造の出番は来る……かなあ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189x/>

IS～インフィニットストラトス～黒騎士は織斑一夏

2011年12月29日02時53分発行